

嬉し涙の裡で動いて居るさういふ眼は、オドクした憐みと、喜んで居る戀愛とで、公爵アンドレエーを見詰めた。唇の膨れ上がった、ナタアシヤの瘡、蒼い顔は、醜いといふより以上であつた——それは、恐く見えた。が、公爵アンドレエーは、ナタアシヤの顔を見無かつた、彼は、美しかった輝いた眼を見たのみであつた。二人は後で人の話を聞いた。

今は最早全然眼を覺した侍僕のピョートルは、醫者を起して。脚の疼痛の爲めに徹夜睡られ無かつたティモフィン、起つて居た總てのことを長い間熱く見て居たが、やがて、腰架の上で身體を圓くして、褥被で裸の身體を丁寧に包んで了まつた。

「いや、何うした事です？」と、醫者は云つて、床の寢床から起ち上つた。「何卒、お歸りください、ご婦人」

その途端に、戸を叩く音がした、女中が、娘を探しにと伯爵夫人からよこされたのであつた。夢の最中に起された夢遊病者のやうに、ナタアシヤは、部室から歩み出、自分の小舎へ歸ると、寢床の上へ獻献あけながら倒れて了まつた。

その日から、ロストオフ家の旅行のそれから後の何の休み場所でも、宿り場所でも、ナタアシヤは、決してボルコオンスキイの傍を離れ無かつた、そして、醫者は、若い娘に、それ程の勇氣があり、負傷者の看護にそれ程の熟練があらうとは、全く意外であつたことを、承認せざるを得無かつた。

公爵アンドレエーが、途中で、娘の腕に抱かれたまゝで死ぬかも知れ無い（それは、醫者の言辭に依れば、随分有りさうなことであつたのだが）といふことを考へれば、それは、伯爵夫人に取つて、非常に恐ろしい事であつたけれども、伯爵夫人はナタアシヤに思ひ止まらずことは能き無かつた。

公爵アンドレエーとナタアシヤとの間に愛情的關係が復活したと共に、彼が傷が癒れば、二人の既往の約婚も復活するだらうといふ事に氣は付いて居ながらも、誰も——殊にナタアシヤと公爵アンドレエーは寸毫も——その事を云は無かつた。生死の未決の問題が、公爵アンドレエーの上のみならず、全露西亞の上に、懸つて居て、それが、それ以外の有らゆる考量を、閉ち出して了まつたのだ。

（三十三）

ピエールは、九月三日には、遅く起きた。頭が痛く、着たまゝで睡た衣服が肌觸りが悪かつた、そして、彼は、前の晩に何か恥かしいことを爲たといふ漠然した感が心にあつた。

その何か恥かしい事といふのは、大尉ラムバルと話を爲たことであつたのだ。

彼の懐時計が、十一時であることを、彼に告げた、が、その日は、殊に曇然した厭な日らしく思はれた。ピエールは、起ち上つて、眼を擦り、彫刻の爲である臺の短銃を見て——それはゲラシムが、書物卓子の上へ戻して置いたのだが——ピエールは、何ういふ處に自分が居るのか、その日、自分が何ういふことを爲すべきなのか、憶ひ起した。

「最早後れたのかな？」と、ピエールは、思ひ惑つた。

いや、「彼」は、大抵、十二時より前には、莫斯科へ入城しは爲まい。ピエールは、自分の前に横たはつて居た事柄を考へ廻す餘裕を、自分に向つて與へずに、急いで實行にかゝらうと爲た。衣服を直して、ピエールは、短銃を取り上げ、そして、出やうと爲た。が、其所で、始めて何うすれば、

手に持つので無くして、武器を街で持つて歩けるだらうか、といふことに気が付いて、思ひ惑ひ始めた。大外套の下ですらも、大きい短銃を隠すことは能きさうも無かつた。腕の下の腰帯の内でも、人の眼に付かぬやうに、隠して置くことは能き無かつた。その上に、短銃はその時には弾が入つて居無かつた、そして、ピエールは、それに弾を装める暇が無かつた。

「短銃だつて同なじだ」と、ピエールは、一人で云つた、然し、彼は、これまで、何ういふ風に自分の計畫を實行するかといふことを考へた時には、千八百〇九年の時の學生の大失策は彼が短銃でナポレオンを殺さうと爲たのにあるのだと、斷定したのは、一再のみでは無かつたのだ。

が、ピエールの主たる目的は、自分の計畫の成功するといふことよりは、寧ろ彼が自分の計畫を捨てはせずに、極力その實行を計つて居ることを、自分自身に向つて、證明するのにあつたらしかつたのだ。ピエールは、スハアレフ塔で、短銃と一緒に買った緑色の鞘の、鈍刀の、刻み目のある短銃を取つた、そして、それを直衣の下へ隠した。

農夫の外套の周圍に腰帯を締め、それから、帽子を眼深にして、ピエールは、廊下へ出て、音をさせ無いやうに、大尉の眼を覺まさ無いやうにと、靜に歩いて、竊然と街へ忍び出た。

彼が、前の晩には極く平氣で見居た火事が、夜の間に大部廣がつた。莫斯科は諸方で焼けて居た。馬車屋町だの、河向だの、市場町だの、ボヴァアルスキイだのが、同時に焼けて居た、そして、ドロゴミロフ橋の傍の材木屋街だの、莫斯科川の荷船だのが、盛に燃えあがつて居た。

ピエールの路は、ボヴァアルスキイまでは横町を通り、其所からは、アルバタイを横ぎつて、ニコラヤヴレンニイの禮拜堂へ行くのであつた、其所をば、彼は餘程前から、彼の想像の裡で、爲事が實行される

べき場所と極めて居たのであつた。何の家も大抵門も窓扉も閉めてあつた。通りにも横町にも、人が居無かつた、空には、物の焼ける臭氣と烟があつた。時々、彼は不安さうなオド／＼した顔の露西亞人どもや、如何にも軍陣に居るらしい態で、街の真中を歩いて居る佛蘭西人どもに、行き會つた。兩方ともピエールを不思議に思つて見た。露西亞人がピエールを見詰めたのは、彼の非常に背が高く、肥つて居たことや、彼の顔及び身體全體に陰鬱な沈思と苦惱が表はれて居たことは左に右、人々には、彼が何ういふ階級の人間だか分から無かつた爲めであつた。佛蘭西人どもが、彼を不思議に思つて凝視めたのは、他の露西亞人は誰でも佛蘭西人等をオゾ／＼と不思議さうに見詰めるのであつたのに、ピエールは、佛蘭西人どもを見せせずに、歩いて居たからであつたのだ。

とある家の門の所で、三人の佛蘭西人が、幾人かの露西亞人と何か諍つて居たが、露西亞人等には、佛蘭西人の言語の意味が解から無かつた、で、その佛蘭西人等は、ピエールを止めて彼に佛蘭西語を知つて居るか、何うか、尋いた。

ピエールは、頭を振つて、ズン／＼歩いて行つた。又或る横町では、緑色の彈藥函の傍に居た哨兵が、彼に怒號つた、が、その兵が今一度恐しい叫を繰り返して、銃を取り上げる音を聞いて、始めてやつと、ピエールは、街の他の側を通らなければならぬことに気が付いたのだ。

彼は、周圍の何物をも聞か無かつた、何物をも見無かつた。急ぎと、恐怖で以つて、彼は、自分の計畫をば、自分に取つては異様な恐しい事のやうに、心の裡に持つて居て、それを失つてはならぬと——前の晩の經驗から——恐れて居た。が、彼が歩を向けて居たその場所まで、彼の計畫を安全に持つて行くことは能き無い譯になつて居たのであつた。その上に、縦令彼が途中で止められ無かつたとした所で、彼の計畫は實行

され得無かつたのだ、何故だといふと、ナポレオンは、最早四時間前に、ドロゴミロフ郊外を出て、アルバタイを横ぎつて、内廊に達し、最早その時分には、最も陰鬱な機嫌で、クレムリン宮の皇室の書齋に坐つて、直ぐに火事を消すこと、掠奪を制すること、住民を安堵させることなどの、差し掛つた命令を出して居たからであつたのだ。

が、ピエールは、左様とは少しも知ら無かつた、自分の前途に横たはつて居た事柄に全く心を占領されて、彼は、人が——爲事その者の元來の困難からでは無く、自分等の本性と相容れ無いものであるが爲めに——自分等にとつては到底不可能であるところの或る爲事をやらうと何時までも爲て居る時に、苦しむやうな苦惱を爲て居た。彼は、自分がいよ／＼の場合に弱くなつて、自分に對する自尊心を失ふだらうといふ恐懼で、惱まされた。

彼には、自分の周囲の物が、何も聞えず、見えもし無かつたに拘らず、彼は、本能的に路を見出し、そして、ボヴァアルスキイへ行く路へと間違へずに曲つた。

ピエールがボヴァアルスキイ街に近づくに従つて、烟がだん／＼濃くなり、空は大火の熱で大部熱くなつて居た。烟の舌が、屋根の彼方で、彼方此方で、燃え上つて居た。彼は、街路でだん／＼多くの人々に會ひだしたが、さういふ人々は、非常に昂奮して居た。ピエールは、何か常ならぬ事が自分の周囲に起りつゝあることを感じたけれども、自分が火事場へ近寄つて居るといふ事實には氣が付か無かつた。

一方では、ボヴァアルスキイ街へ、他方では、公爵グルジンスキイの庭園へと、續いて居る大きい廣場を横ぎつて、道路を辿つて居るうちに、ピエールは、不意に、自分の直ぐ傍で、絶望的に叫んで居る女の聲を聞いた。彼は、夢から覺めたかのやうに、ビタリと止まつた、そして、頭を擧げた。

道路の片側の枯れ切つた塵埃だらけの草の上に、家の道具の幾つもの積層が横たはつて居た、羽毛臥褥、沸茶器、聖畫、それから、箱といふ風に。箱の傍の地上に、黒い外套と帽子を着た長い突き出た前齒の、最早若くは無い女が坐つて居た。この女は、右左に身體を揺ぶつて、烈しく泣いて居ながら、何か口の裡で云つて居た。汚い、短い戸外衣と外套を着た十歳から十二歳の二人の娘が、蒼い怖けた顔に呆れ返つた表情を以つて、自分たちの母親を凝視めて居た。外套と、確に自分では無いらしい大きい帽子を冠つた七歳位の男の兒が、年老つた子守に抱かれて、泣いて居た。裸の脚の汚い下女が、箱の上に坐つて居た、その娘は、亞麻色の髪を垂らして、焦けた髪を抜いて、それを嗅いで居た。夫は、背の低い、屈んだ身體で、小さい輪のやうになつた頬髻のある、頭へ眞直に冠つて居た帽子の下から髪を滑こい房が覗き出して居る、制服を着た男であつたが、それは、動かし難い顔で、箱を順々に下から動して、その下から、何か衣類を引張り出すと爲て居た。

女は、ピエールを見るや否や、彼の脚下へ殆ど身體を投げ倒した。

「あゝ、何卒、教徒の方、私を救つてください、私に手を貸してくださいまし、親切な旦那……誰か手を貸してください」と、女は、獻秋の際から、やう／＼云つた。「私の小さい娘です……私の娘ですよ……私の一番小さい娘が取り残されたんですよ……焼け死にました。おお——何といふ不運にお前を育てあげたことだらうね……おお——」

「これ、靜に、マリイヤ・ニコラアエヴナ」と、夫は、確に、他人の前では自分を辯護するばかりの爲めらしい態で、低い聲で、妻に云つた。「姉の娘が、伴れて逃げたに違ひ無いんだよ、何うしてもそれに違ひ無いんだよ」と、彼は云ひ足した。

「鬼奴、悪黨奴」と、女が、恐ろしい権幕で叫んで、涙が不意に止んで了まつた。「お前さんは情といふもの無い人だ、お前さんは自分の兒に對して何の感情も無いのねえ。誰でも他の人だつたら、彼の兒を火の裡から助けたんですよ。だけでも、此奴は、鬼だ、人間ぢやア無い、父親ぢやア無い。貴下は貴族でいらつしやるわ」と、女はビエールに振り向いて、獻けながら、速語に云つた。「町が火事になりました——人が駈け込んで来て知らせて呉れましたんです。娘が「火事だ」と、叫びました。私どもは、自分たちの物を出さうと飛んで行きました。私どもは、着のみ着のまゝで、遁けました……取り出したのは、此所にあるこれつ限りなんです……貴とい聖畫です、私どもは小兒に氣を付けたんです、それから、私が里から持つて来た寢床、それだけで、餘は悉皆焼いて了ましました。カティイチカが見えませんか。おお——。あ、主よ……」

で、女は再獻けした。「私の可愛い幼兒、焼け死んだ。焼け死んだ」

「でも、何處、何處にその兒は居るんですか？」と、ビエールが云つた。

彼の氣を入れた顔の表情でもつて、女は、この人が自分に手を貸して呉れるのだと見た。「善い、親切な旦那」と、女は金切り聲で云つて、ビエールの脚へかじり付いた。「恩人、何卒、何方にしろ私も安心させてくださいましよ……アニエスカ、さア、怠惰者、ご案内をしな」と、女は、下女に向いて、怒つて口を廣く開き、長い齒を一層善く見せて、怒號つた。

「案内して呉れ、道を教へて呉れ、私は……私は……私が何か爲てあげる」と、ビエールは急いで、喘いで、云つた。

汚い下女は、箱の蔭から出て来て、髪を梳き上げ、肌目の荒い、裸の足で、先に立つて、道路を歩いて行つた。

ビエールは、烈しい氣絶の後で、不意に氣が付いたかのやうな氣持が爲た。彼は、頭を擧げ、彼の眼が生命の光で輝きだし、そして、速歩で、彼は、娘の後へ隨いて、娘に追ひ付いて、ボヴァアルスキイ街へと行つた。街全體に、黒い烟の雲が満ちて居た。焔の舌が、さういふ雲の裡から、彼方此方で燃え上つて居た。大きい群集が火事の正面に集まつて居た。街の中央に、一人の佛蘭西の將官が立つて、四邊の人々に何か云つて居た。下女を伴れたビエールは、佛蘭西の將官の立つて居る場所へ近寄つて居た、が、佛蘭西の兵卒等がビエールを止めた。

「通つては不可」と、聲が彼に向かつて怒號つた。

「此方へ、旦那」と、娘が怒號つた、「横町へ入つて、ニコリニイを抜けませう」

ビエールは、後へ返つた、娘と歩調を合せる爲めに時々小走になつた。娘は、街を横ぎり、左方の横町へ曲り、家を三軒通り越し、また曲がつて、右の門へと入つた。

「直ぐ其所です」と、娘は、云つて、廣場を駈け抜けて、柵の中の小さい門を開け、ピタリと立ち止まつて、眞赤に燃えあがつて居る小さい木造の家をビエールに指し示した。その一方の側は落ち込んで、他の側は焼けて居た、そして、焔が窓穴や、屋根の下から、覗き出して居た。

小さい門から入つて行くといふと、ビエールは、熱のドツと迫つて来るのを感じた、で、我にもあらずピタリと立ち止まつた。

「孰、孰がお前の家だい？」と、彼は尋いた。

「おおお——」と、下女は泣き出して、その家に指し爲た。「彼がさうなんです、彼所の彼が私どもの家だつたんです。眞個に、貴嬢は焼け死んぢやつたのねえ、私の寶のカティイチカ、私の大切な小さいお嬢様や、

「おお——」と、アニエスカは火事を見るといふと、自分も又自分の感情を口へ出さずには居られ無くなつて、泣きだした。

ピエールは、家へと飛んで行つたが、熱の甚かつたことと云つたら、彼がその周囲をグルリと廻らなければなら無くつて、未だ片側、屋根が焼けて居るばかりの大きい家の傍へ何時の間にか出て了まつた程であつた。佛蘭西の兵卒の一群が、その周囲にたかつて居た。

ピエールは、始のうちは、家から何か引張り出して居る佛蘭西の兵卒どもが、何を爲て居るのか、識別し得無かつた。が、自分の正面の佛蘭西の兵卒が、鈍刀の彎剣で、一人の農夫を殴つて、彼から、毛皮裏の外套を奪つて居るのを見るといふと、ピエールは、掠奪が其所で行はれて居ることに、憤り氣が付いた——が、彼は、その考案に心を止めて居る暇が無かつた。

倒れる壁や、落ちる天井の、轟といふ音、ガラ／＼といふ音、焔のドツといふ音、シユウといふ音、それから、群衆の昂奮した叫喚、烟の依違つて居る雲——此方では、黒い幾個もの集塊に重なつて居、彼方では、棚引いて、輝る火花で赤く照らされて居る——の光景、此方では太い赤い束のやうに見え、彼方では、壁の面を黄金の鱗のやうに這つて居る焔、熱や、烟や、物の速い動き方、さういふものが悉皆併さつて、大火の常例の刺戟的效果を、ピエールの心に及ぼした。その効果はピエールに取つては殊に強かつた、何故だといふと、それは、火事を見るや否や、不意に、彼は、自分が、自分の上に重く押し付けて來て居たさま／＼な考案から解放されたやうに感じたからであつた。彼は、若く、快活に、勢好く、勇氣に満ちた心持に爲つた。彼は、家の方へ向いた小家の部分で廻つた、そして、未だ倒れず居るその部分へ駈込まうと爲た、と、途端に、頭の直ぐ上で怒號つて居る五六人の聲を聞いた、と、それに直ぐ續いて、直ぐ傍で、何か重い物が、

ガラ／＼ドタンと落ちた音が爲た。

ピエールは見返つた、と、家の窓の所に、何か金屬の物の一杯入つて居る箱の引出しを今落したばかりの、幾人かの佛蘭西の兵卒を見た。下に立つて居た今幾人かの佛蘭西の兵卒が引出しの傍へ行つた。

「おい、その野郎は何の爲めに來たんだい？」と、佛蘭西の兵卒の一人が、ピエールのことを指して、さう云つた。

「小兒が、家に居る。君等は小兒を見掛け無かつたかい？」と、ピエールが云つた。

「野郎何を歌つてやがるんだい？ 行つちまへ、おい」と、聲々が怒號つた、そして、兵卒の一人は、ピエールが自分等から銀や青銅を取つて了まはうと思つては大變だと怖れたらしく恐しい權幕でピエールへと跳び掛かつた。

「小兒？」と、上から一人の佛蘭西人が叫んだ。「庭園で何か泣いてるものがあつたにやアあつたぜ。彼が其奴の幼兒かも知れ無え。少し情深くなつてやらうぜ、なア」

「何處かね？」と、ピエールは尋いた。

「此方だ」と、佛蘭西の兵卒は、家の蔭の庭園へ指し爲て、窓から、ピエールに叫んだ。「待つてろ、今降りてくから」

で、間もなく、佛蘭西人——頬部に痣のある、直衣ばかりになつて居た、黒眼の男——が、實際、階下の部室の窓から跳び出して、ピエールの肩を叩いて、ピエールと一緒に庭園へと駈けた。「急げよ、朋輩たち」と、彼は、戦友等に叫んで、「危なくなりだしたぞ」

家の蔭から砂の布いてあつた路へ駈け出て、佛蘭西人は、ピエールの腕を捉へて引つ張つた、そして、圓

い空地を彼に指さした。庭園の腰架の下に、桃色の戸外衣を着た三歳程の女の児が臥て居た。

「これがお前の幼児だ、あゝ、小さい女の児だ、尚結構だ」と、佛蘭西人が云つた。「左様なら。情深くしやうや、吾々も人間なんだから、なア」で、頬部に痣のあるその佛蘭西人は、朋輩の所へと駈けて歸つた。

ピエールは、嬉しさで息も吐けずに、幼児の傍へ駈け寄つた、そして、それを抱き上げやうと爲た、が、知らぬ人を見ると、小さい女の児——母親に極く好く似て居た、瘰癧らしい、人好きの爲無い幼児——は、泣き聲を出して、逃げだした。けれども、ピエールはそれを捉まへて、抱き上げた、幼児は、甚く怒つて金切り聲を出し、小さい手で、ピエールの腕から、自分の身體をもぎ放さうと爲、汚い、涎の垂れる口で彼に噛みつかうと爲た。ピエールは、何か小さい獸に觸つた時に感じたことのあるやうな恐怖と厭惡の感を覺えた。が、彼は骨折つて、その感に打ち勝つて、その幼児を落さ無いで、それを抱いて、大きい家へと、駈け戻らうと爲た。が、最早、同なじ道路で歸ることは到底能き無かつた、下女のアニスカは、何處にも見え無かつた、で、憐愍と厭惡の感情で以つて、ピエールは、出来るだけ優しく、愠れ氣に泣いて居る、クツシヨリ濡れた幼児を、抱き締めて、何處か他の出路を索さうと、庭園を駈け抜けた。

（三十四）

ピエールが、諸所の前庭や、横町を駈け抜けてから、彼の重荷を持つて、ボヴァアルスキイの隅の公爵グルウジンスキイの庭園へ戻つて行つた時に、始めのうちは、自分が小兒を探しにと發つた場所を識別けることが能き無かつた、其所は、人々や、諸方の家から引摺りだされた荷物で、一杯になつて居た。火から助

けた道具の傍に居る露西亞人の家族の側に、此所にも又、種々な制服の可なり多くの佛蘭西の兵卒どもが居た。

ピエールは、彼等を一向眼に入れ無かつた。彼は、自分の目ざす家族を見附けて母親に小兒を渡して置いて、それから、又元へ戻つて、誰か他の者を助けるやうに爲やうと、急いで居た。ピエールには、爲無ければなら無いことが多數あつて、而もそれは速く爲無ければなら無いやうに、思はれたのであつた。熱と駈けたこととで、勢ひ付けられて、ピエールは、その時には前に小兒を救はうと駈けて居た時に彼の心へ不意に出て来た若さ、熱心、及び勇氣の感を尙一層強く覺えた位であつた。

小兒は、最早溫和しかつた、そして、小さい手でピエールの外套にかじり付き、彼の腕に坐つて、小さい野獸のやうに、四邊を見廻して居た。

ピエールは時々その兒を見て、微弱に微笑んだ。彼は、その怖けた、弱々しい、小さい顔の裡に、愠れな無邪氣な何物かを見たやうな氣が爲たのであつた。

官吏もその妻も、ピエールがその二人と別れた場所には居無かつた。速い歩調で、ピエールは、群集の間を歩き廻つて、行き遣ふさまぐな顔を熟く調べた。

彼が、目を付け無いでは居られ無かつたのは、新しい布の表の羊皮の外套を着、新しい靴を穿いて綺麗な東洋型の顔の極く老年の男と、同なじ顔型の老婆と、若い女とで成り立つて居たジョルジャヤ人カアルメニヤ人の一家族であつた。一番終の者——極く若い女——が、東洋の美人の完全な模範として、ピエールを驚かした、その女は、劃然した、弓形の黒い眉で、非常に和かな、パツとした艶のある肌色で、美しい、表情の無い、楕圓な顔を持つて居た。草の生た空地の上の群集の裡へ投げ出された道具の間で、その女が、立派

な八糸の外套を着、頭には、派出な薄紫色の頭巾を冠つて坐つて居るところは、雪の中へ投げ出された熱帯植物の観があつた。女は、老婆の少し後の荷物の上に坐つて居て、長い睫毛のある、その大きい、黒い、長い目な眼が、地面へと凝乎と見据ゑられて居た。

「誰かにはぐれたですかね、旦那」。「お前さんは旦那方かね、それとも、何だね?」。「誰の幼児だね?」  
 確に、女は自分の美しいことに気が付いて居て、それが爲めに怖れて居たらしかつた。その女の顔がビエールを驚かした、で、彼は、急いで居る間で、柵の傍を通りながら、幾度も女の方を振り返つた。

柵に達しても、依然、目ざす人々をば見付け兼ねて、彼は、立ち止まつて、見返つた。  
 ビエールの姿は、幼児を抱いて居るので今は尙一層眼に立つた、男と女の五六人の露西亞人が、彼の周囲に集まつた。

「誰かにはぐれたですかね、旦那」。「お前さんは旦那方かね、それとも、何だね?」。「誰の幼児だね?」  
 と、彼等はビエールに尋いた。

ビエールは、幼児は、小兒たちと一緒にこの場所に坐つて居た黒い外套の女のだと、答へた、そして、誰かその女を知つて居無いか、その女は何處へ行つたのか、尋いた。

「いや、それは、アンフェーロフ一家ぢや」と、老取つた補祭が、痘痕のある農婦に向いて、云つた。「主よ、我等を憐ませ給へ。主よ、我等を憐ませ給へ」と、彼は、職業の濁聲で、云ひ足した。

「アンフェーロフ一家ですつて」と、女は云つた。「あれ、アンフェーロフ一家は、今朝早くから何處かへ去つて了まつたぢや無いかね。マリイヤ・ニコラアエヴナのか、イヴァーノヴナのかなんだよ」

「此の人は、女だと云ふでは無いかね、が、マリイヤ・ニコラアエヴナは貴婦人なんだぜ」と、家内の隷従が云つた。

「お前が知つてるね、では、瘠せた女で——長い齒の」と、ビエールは云つた。

「え、全く、マリイヤ・ニコラアエヴナです。彼の衆は、斯ういふ狼どもが私たちの上に、推寄せて來ると直ぐ庭園へ去つて了りましたよ」と、女は、佛蘭西の兵卒等を指しながら、云つた。

「お、主よ、我等を憐ませ給へ」と、補祭が再云ひ足した。

「彼方へ行つてご覧なさい、彼の衆は彼方に居ますよ。彼の女です、全く。彼の女は、宛然氣が狂つたやうに泣いて居ましたよ」と、女は再云つた。「彼の女なんですよ。さア、此方です」

が、ビエールは、女の言語などは最早耳に入ら無かつた。最早五六秒前から、彼は、自分から五六歩離れた所で起つて居る事件を、凝乎と見詰めて居たのであつた。彼は、アルメニヤ人の一家と、それに近寄つて居た佛蘭西の兵卒等とを、見て居た。さういふ兵卒の一人、敏捷な小さい男は、蒼色の外套を着て、帯の代りに、紐を腰へ結んで居た。その男は、頭に夜帽を冠つて居て、足は靴であつた。今一人の態容は、殊にビエールを驚かしたのだが、それは、重苦しいやうな舉作の、白痴のやうな顔付の、背の高い、圓肩の、赤髪の毛の、瘠せた男であつた。その男は、粗羅紗のチュウニクを着、蒼色の脚袴と、大きい、破けた長靴を穿いて居た。

蒼色の外套を着た小さい靴の佛蘭西人は、アルメニヤ人たちの傍へ行くと、何か云つて、老人の脚を捉まへた、と、老人は直ぐ急いで靴を脱ぎだした。チュウニクを着た今一人の兵卒は、衣囊に手を突つ込んだまゝで、美しいアルメニヤ娘の正面で立ち止まつた、そして、物も云はず、動きもせず、娘を見詰めて居た。

「受け取れ、幼児を受け取れ」と、ビエールは、小兒を農婦にさし付けて、命令的な急ぎで云つた。「お前

から彼の人たちに渡して呉れ、お前、この兒を伴れてつて呉れ」と、彼は、女に宛然怒號り付けるやうにして、遽然しく泣き立てる小兒を地面へ置いて、佛蘭西人とアルメニヤ人の家族とを見返つた。

老人は、最早跣で坐つて居た。小さい男は、今老人から二番目の靴を奪つたばかりのところ、彼は、その靴を兩方叩き合せて居た。老人は、獻献きながら何か云つて居た、が、ビエールは總てさういふことを唯だ一目に見たばかりであつた。彼の注意の全部は、チュウニクを着た佛蘭西人の上へ引き付けられた、その男は、その間に、悠乎とした、身體を搖るやうな歩き方で、若い女の傍へ動いて行つて、衣囊から手を出して、女の頸を捉まへて居た。

美しいアルメニヤ女は、長い睫毛を垂れて、同なじ不動の姿勢で、靜乎と坐つて居て、兵卒が自分に對して爲て居た事柄を見もせず、感じもし無かつたやうに見えた。

ビエールが、佛蘭西人等と自分との間の五六歩を駆けて居る間に、チュウニクを着た背の高い兵卒が、最早アルメニヤ美人の頸から頸飾を引きもぎつて了まつて居た、と、若い女は、兩手で自分の頸を掴んで、金切り聲で叫んだ。

「その女に手を觸ける勿」と、ビエールは、憤怒で皺喰れた聲で、叫びつた、そして、背の高い、屈んだ兵卒の肩を捉まへて、突き飛ばした。その兵卒は、倒れ、起き上り、そして、逃げ去つた。が、その男の朋輩は、靴を落して、劍を抜いて、凄い權幕でビエールへと詰め寄つた。

「これ、愚行を爲る勿」と、彼は怒號つた。

ビエールは、彼が何にも覺えて居ず、そして、彼の力が十倍に増すやうな、さういふ熱狂の忘我の境に居た。彼は、跣の佛蘭西人に跳び掛かつた、そして、その男が彎劍を抜く間の無いうちに、それを殴り倒して、

拳固でさんぐ、殴り付けた。

贊成の叫聲が周囲の群集から聞えた、と、その途端に、佛蘭西の槍騎兵の巡察隊が、角を曲つて、乗つて來た。槍騎兵は、ビエールへと速足で乗り附けた、そして、佛蘭西の兵卒等がビエールを取り圍いた。ビエールは、それから後の事件を少しも覺えて居無かつた。彼は、誰かを殴り、自分も殴られ、それから、やがて氣が付くと、自分は兩手を縛られて居て、佛蘭西の兵卒等の一群が自分の周圍に立つて、自分の衣服の中を掻き探して居ただけを、覺えて居るのみであつた。

「中尉、此奴は短劍を持つて居ます」といふのが、ビエールが、その意味を捉へた最初の言辭であつた。

「あゝ、武器だな」と、將校は云つた、そして、ビエールと一緒に捉まへられた跣の兵卒に振り向いた。

「宜しい、宜しい、お前は軍法會議で悉皆云ふが宜い」と、將校は云つた。それから、彼はビエールに振り向いた、「お前は佛蘭西語を知つてるか？」

ビエールは血走つた眼で、四邊を見廻し、そして、何とも返答し無かつた。彼の顔は非常に恐しかつたのであらう、何故だといふと、將校が何か低聲で云ふと、今四人の槍騎兵が、他の連中から離れて、ビエールの兩側に立つたからなのだ。

「お前は佛蘭西語が話せるか？」と、將校は、少し離れたまゝで、尋問を繰り返した。「通譯を喚べ」  
隊列の裡から、平服を着た一人の小さい男が、出て來た。その衣服と言語で、ビエールは、直ぐ、それが莫斯科の何處かの商店に居た佛蘭西人であることを認めた。

「この男は普通の人間では無いらしいんです」と、ビエールを熟く査て、通譯は云つた。

「おゝ、おゝ、此奴は何うも放火者らしいな」と、將校は云つた。「何ういふ者だか、尋いて見ろ」と、彼



は、云ひ足した。

「お前は何と云ふ者だ？」と、通譯は、彼の佛蘭西化した露西亞語で尋いた。「お前は將校には返答しな  
きやア不可」

「俺は俺が誰だか云はん。俺はお前の捕虜だ。さア、伴れて行け」と、ビエールは、不意に佛蘭西語で云  
つた。

「あゝ。あゝ」と、將校は口を挟れて、額を擡めた、「うん、では、歩るけ」

群集が槍騎兵たちの周圍に集まつた。ビエールに一番近い所に、小兒を抱いた農婦が立つて居た。巡察隊  
が動きだすと、その女は、歩み出た――

「あれ、何處へお前さんは伴れて行かれるんだね、親切な人？」と、女は云つた。「幼兒、若しか、彼の  
たちので無かつたら、幼兒を何うしたら宜いんだらうね？」と、女は叫んだ。

「何う爲て呉れといふんだね、この女は？」と、將校が尋いた。

ビエールは酔拂つた人のやうであつた。彼の昂奮は、自分が救つた小さい女の子を見るといふと、一層増  
した。

「何用かといふのか？」と、彼は云つた。「彼の女は、俺が今の先刻の裡から助け出した俺の娘を抱い  
て居るんだ」と、彼は云つた。「左様なら」、で、何故さういふ目的の無い虚言を云つたのか、自分にも全然  
解り兼ねながら、ビエールは、佛蘭西人に圍まれて、確乎とした、嚴肅な歩調で大跨に歩いて行つた。

槍騎兵のその巡察隊は、デュウロスネルの命令で、莫斯科の種々な街々を通つて、掠奪を止め、尙一層、  
高級の佛蘭西の將校間の輿論では、その日火事を起して居るといふのであつた放火者どもを捕へることに重

きを措くやうにと、派遣されたのであつた。五六の街々を巡察して、槍騎兵どもは、掠奪を行つて居た五六  
人の佛蘭西の兵卒の外に、商人、二人の神學生、農夫、家内の従隸といふやうな――悉皆露西亞人の――今  
五人の疑はしい人間を捕縛した。

が、さういふ總ての嫌疑者どもの中で、ビエールが一番疑はしい人物だと、槍騎兵どもには見えたのであ  
つた。

彼等が悉皆、牢獄として極められて居たズボオフスキイ城壁の上の大きい家へと、その夜を送らせる爲め  
に、連れて來られた時に、ビエールは、他の者どもから引き離されて、嚴重な番兵の下に置かれたのであつ  
た。

第二章

(一)

彼得堡の上流の諸團結の間では、ルウミヤンツエフ黨、佛蘭西黨、マリイヤ・フォドロヅナ黨、皇太子黨、其他の派の間に極く複雑な闘争が、その時分常に、常例に無いやうな熱で以つて、行はれて居て、それが、何時通りに、宮中の懶惰蜂どものワア／＼いふ唸り聲で溺らされて居たのであつた。が、唯だ時々空想や、人生の回想に心を悩ませるゝきりの、彼得堡の安樂な、贅澤な生活は、往時通りの路を續けて居た。そして、さういふ生活の爲方が、露西亞人民が危険や、困難な位地に立つて居ることを信するのを、全く難かしいことに爲て了まつた。其所には、前と同なじな朝賀や、舞踏會や、同なじな佛蘭西演劇や、同なじな宮中の利害や、官吏間の同なじ利害や陰謀があつた。

眞個の位地の困難であることを回想しやうといふ努力が爲されたのは、唯だ極く高貴な連中の間でのみであつた。皇后と皇太后とが、斯ういふ難局の裡で、相互に反對した行動を爲て居るといふ噂が低い聲で傳へられて居た。皇太后のマリイヤ・フォドロヅナは、自分の保護の下に在る慈善や教育の諸設置の休戚に甚く心を勞して、さういふ總ての社團をカザンへ移す手筈を極めて、さういふ諸團體の財産は、最早全部荷造りされて居た。

皇后エリザヴェタ・アレクセエヴナは、何ういふ命令を出す積りであるゝかと尋かれるといふと、國事に就ては、さういふ事は總て皇帝の手にあるのであるから、自分は何の命令も出す譯には行かぬのだと答へられた、が、自分自身だけのことを云へば、自分は一番最後で無ければ彼得堡を去ら無い積りだと、皇后の特質の露西亞的の愛國心で以つて、確言されたのであつた。

八月の二十六日、即ち、ボロディノの戰の丁度その日には、アンナ・バアヴロヅナの家で夜會があつて、その主な面白いことは、皇帝に聖セルゲエーの聖像を送る時に書かれた市總祭の手紙の朗讀であつた。この手紙は、愛國的な、宗教上の雄辯の模範だと認められて居た。その手紙は、演説法の巧いといふので名高かつた公爵ヴァシイリその人によつて讀まれるのであつた。(彼は、皇后の謁見室でさへ屢々讀んだのであつた)。彼の演説法の巧妙さは、彼が絶望的な遠吠のやうな聲と、優しい泣くやうな聲との間で、種々に變る高い、調子の好い聲で、讀む所にあるのだと、想像されて居た、彼は、さういふ聲で、意味とは一向關係の無い風で言語を轉がして、唯だ何の秩序も無く、其所此所の言語の上へ、遠吠を落したり、泣き聲を落したりするのであつた。

この朗讀は、アンナ・バアヴロヅナの催では何時でもさうであるやうに、政治的意義を持つて居るものであつた。アンナ・バアヴロヅナは、この夜會は、五六人の身分の高い人々が来る筈であつたので、其所で、さういふ人々にこの朗讀を聞かせて、その人々に、さういふ人々等が佛蘭西劇場を眞眞にして居るのを恥ぢさせて、愛國的熱心を起させやうといふのであつた。

最早大部の人数が来て居た、が、アンナ・バアヴロヅナは、客室に是非居て貰はなければなら無いと思つて居る人々を未だ見無かつた。で、朗讀にかゝる前に、極く一般的な題目の談話を起させたのであつた。彼得堡でのその日の噂話は伯爵夫人ベズウホフの病氣のことであつた。伯爵夫人は、四五日前から病氣であつた。何時も自分が其所の裝飾になるやうな二三の夜會に缺席した、そして、客に一切逢はずに、何時も

かゝりつけの名高い彼得堡の醫者では無く、或る伊太利人の醫者にかゝつて、その醫者が何か珍しい新療法を行つて居るといふのであつた。

誰も、美しい伯爵夫人の病氣は、一度に二人夫を持つて居ることの不便から來て居るのであつて、伊太利醫者の治療法といふのは、その不便を取り去るのにあるのだといふことには、氣が付いて居た。が、アンナ・バアヴロヴナのの前では、誰一人その問題のさういふ觀方のことを考へることを敢てするものは無かつたし、又、全然、自分等が知つて居るだけのことを、知つて居るやうな顔さへ爲得無かつたのだ。

「伯爵夫人はお氣の毒な御病氣だといふぢやありませんか。醫者の話では狭心症ださうですね」

「狭心症？。あゝ、それは大變な病氣ですよ」

「戀の競争者同志協力が能きたさうですね、狭心のお蔭で……」。狭心といふ語が、甚く氣に入つたらしく、繰り返された。

「老伯爵は大變お氣の毒ださうですね。醫者が重體だと云つたら、小兒のやうにお泣きなすつたさうですよ」

「あゝ、それは非常な喪失です。彼の女は眞個に惚々するやうな御婦人ですもの」

「お氣の毒な伯爵夫人のお物語ですか」と、アンナ・バアヴロヴナは、傍へ來て、云つた。見舞の使をやりましたよ。大部良いといふことなんです。えゝ、確に、世間で一番美しい人好きのする婦人ですとも」と、アンナ・バアヴロヴナは、云つて、自分の熱心に對して微笑んだ。「私は彼の女とは組が違ひますけどもね、それでも、彼の女の善い所は認めますわね。彼の女は甚く幸福で無いんです」と、アンナ・バアヴロヴナは云ひ足した。

さういふ最後の言語で、アンナ・バアヴロヴナが、伯爵夫人の病氣の上に懸つて居た神祕の幕を一寸と擧げたのだと思像して、一人の輕率な若漢が、誰も名高い醫者が喚ばれずに、伯爵夫人が、危険な療法を利用するかも知れ無いやうな山師醫者にかゝるのは、不思議では無いかと、云ひだした。

「貴下の方が私より熟く御承知かも知れませんがね」と、アンナ・バアヴロヴナが、不意に意地悪るさうに、その物慣れ無い若漢に、突つ掛かつて、叫んで、「ですが、私がさる確な筋から聞きましたんではね、その醫者は、極く學問のある上手な醫者だといふんですわ。彼の人は、西班牙の女王の侍醫だといふんですよ、斯ういふ風に、若漢を滅却して置いて、アンナ・バアヴロヴナはビリービンに振り向いた、ビリービンは、その時、他の集團の裡で、警句を云はうといふ心構で眼を見張り、額を皺だらけにして、墺地利人のことを話して居た。

「實に良いぢやありませんか」と、彼は云つて居たが、それは、彼得堡での所謂「ベツロポルの勇者」なるウィツツゲンスタインが奪つた墺地利の軍旗に添へて、維也納へ送られた外交文書のことを云つて居るのであつた。

「何ですか。何ですか？」と、アンナ・バアヴロヴナは尋いて、實は、その警句は前に聞いたのではあつたが、その警句の聞えるやうな沈靜を造つた。

で、ビリービンは、彼が作つた外交書の言辭を一句も違へずに繰り返した。

「皇帝は、墺地利の軍旗を御送還に及ぶ」と、ビリービンは云つた、「路に迷つて居た軍旗を」と、ビリービンは言辭を結んで、額から皺を消えさして了まつた。

「實に良い、實に良い」と、公爵ヴァンシイリが云つた。

「ウァルソウへの路だらう」と、公爵イポリイトが高い聲で云つたので、衆皆吃驚した。誰も彼も、彼が何ういふ積りでさう云つたのか、推量し兼ねて、彼を見た。公爵イポリイトも、活快な驚愕で四邊を見た。自分の言語の意味が何であるのか解ら無かつたことは、彼自身も他の人々と少しも異ら無かつた。彼の外交官としての今までの経歴のうちに、彼は、一再ならず、さういふ風に不意に云つた言語が、非常に面白いものとして受け容れられたことに、氣が付いた、で、その機會が有り次第、何時でも彼は、舌頭へ出て來放題、何でも構はず、云つたのであつた。「多分、旨く行くだらう」と、彼は思つて、さうで無いにしても、衆皆が何うか爲て呉れる」

所が白けて居た一座の沈靜は、實際、アンナ・バアヴロヰナが、もつと善い了簡に變へさせやうと待ち構へて居た愛國心の缺けた高位の人物の入つて來たので、破られたのであつた、で、アンナ・バアヴロヰナは、微笑んで、公爵イポリイトに向つて指を振つて置いて、公爵ヴァシイリを卓子へ喚び出し、二本の蠟燭と原稿とを彼の前へ置き、そして、始めるやうにと彼に頼んだ。

一座が聞然と靜まつて了まつた。

「至高なる、優渥なる皇帝及び露西亞帝たる陛下よ」と、公爵、ヴァシイリは、荒々しい高い聲で云つた、そして彼は、誰かそれに異存があるものがあるかと尋くかのやうに、聴衆を見廻した。が、誰も何とも云は無かつた。

「吾々の首都、莫斯科、即ち、新エルサレムは、その救世主を迎へまする」——公爵ヴァシイリは、「それの」といふ語に不意に力を入れて云つた——「さながらに、孝行なる息子等に抱擁さるゝ母親のやうに、迎へまする、そして、濃くなり行く暗黒の裡にあつても、陛下の御統治の眩き光榮を先見して、勝ち誇つた

風で「ボザナよ。來たる者に幸あれ」と、聲高く語りましまする」

公爵ヴァシイリは、さういふ後の方の言葉を涙聲で、云つた。

ピリイピンは、ツクツクと自分の爪を査て居た、そして、聴衆の間には、自分たちが何様な悪い事を爲たらうかと怪しんで居るかのやうに、怖れた様子の眼立つて表はれて居る者も多かつた。アンナ・バアヴロヰナは、年取つた女どもが、聖餐式に加はらうとして、祈禱を口の内で云ふ時のやうに、手紙の裡の言葉を前以つて呟やいた、「奸惡にして、且無禮なるゴリアテをして……」と、アンナ・バアヴロヰナは、囁いた。

公爵ヴァシイリは續けた——

「奸惡にして、且無禮なるゴリアテをして、佛蘭西の國境よりして、死の恐怖を以て、露西亞の領内を圍ましめよ、敬虔なる信仰、即ち、露西亞のダビテの投石索は、必らず、迅速なる打撃を以つて、血に渴する彼の頭を撃ちます。昔から吾々の國の熱心なる代戦士である所のいや尊き聖セルゲエーのこの聖像をば、陛下の御前へ擔はせます。私の病弱なことが、陛下の最も優渥なる御意に親しく接する機會をば、私に與へて呉れぬのが、甚だ残念でございます。熱烈な祈禱をば、私は天へ捧けて居ります。されば、全能の御神は、信仰厚き者を賞し給うて、彼の御慈悲に於て、陛下の御希望を協はせ給ふこと、信じます」

「實に遁勁だな。實に名文だな」と、朗讀者及び筆者に對する稱讚の聲がさめいた、この訴へに勵まされて、アンナ・バアヴロヰナの客たちは、國の状態のことを、長いこと話し續け、そして、數日内に戦はれる筈であつた戦の結果に就てさまざまな推測を爲したのであつた。

「御覽なさいよ」と、アンナ・バアヴロヰナは、云つて、「明日、皇帝の御誕生日には、何か報知がありま

(二)

アンナ・バアヴロヴナの豫覺は事實に的中した。

次の日、皇帝の誕生日の祝賀の爲めに行はれた宮中での祈禱會のうちに、公爵ヴォルコンスキイが、禮拜堂から呼び出されて、公爵クツウゾフからの報告を受け取つた。これは、クツウゾフが、戦の日に、タタアリノヴァから出した急報であつた。クツウゾフの報告では、露西亞軍は一步も退か無かつた、佛蘭西軍は吾軍よりも損害が多かつた、そして、この報告は、最も近い情報を集めるに違の無い戰場から直ぐ大急ぎで出したものだ、といふのであつた。

では、先づ、勝利であつたらしかつた。で、直ぐ、禮拜堂を去らずに、集まつて居た宮中の連中は、救援を與へられたこと、勝利を得たこと、に對して、神に感謝を捧げた。

アンナ・バアヴロヴナの豫覺は事實に的中した、そして、その午前ちう、陽氣な祝ひの氣分が市ちうに行き渡つて居た。誰も彼も、その勝利をば終局的なものとして受け取つた、そして或る人々は、最早、ナポレオンが捕虜になつたとか、彼が帝位から下されて、佛蘭西には新たな君主が選ばれたとか、いふやうなことを、噂しだして居た。

實戰場裡から遠く距たつて宮中生活の種々な状況の裡に居ては、事件をば、その眞の力や大きさに於て、考へることは、到底能き無いことなのだ。公の事件は、何か知らの私の事件の周圍へ、知らずく、集められて了まふのだ。で、この場合でも、宮中官の喜んだのは、勝利の事實その者よりは、勝利の報知が丁度皇帝の誕生日に來たといふ事實の爲めであつたのだ。それは、人を驚かす爲めにわざく巧く取り合せたものを、噂しだして居た。

であるかのやうであつた。

クツウゾフの報告には、又露西亞軍の損害が載つて居つた、その損害の中には、ツウチコフや、バグラアチオンや、クウタイソフの名が擧げられて居た。事件の悲哀な側も、又、この彼得堡の世界では、知らず知らずのうちに、唯つた一つの事件——即ち、クウタイソフの戦死——の周圍に集中したのであつた。誰も彼も彼を知つて居た、皇帝は彼が氣に適つて居た、彼は、若くつて、面白い男であつた。その日は、誰でも行逢つた同士、斯う云ひ合つた——

「實に不思議なことだね。丁度感謝會の時だなんて。けれども、惜しいことをしたね——クウタイソフは。あゝ、實に、残念なことだ」

「クツウゾフのことを私が何と云つたか覚えて居るかね？」と、公爵ヴァシイリが、今は、豫言者の得意さで、云つた。「私は、何時も、彼の男がナポレオンに勝つことの能る唯一の人間だと云つて居つたよ」

が、次の日には、軍から何の報知も來無かつた、で、公衆の聲が、たじろぎ始めた。宮中官等は、皇帝が苦んで居た未定の状態の苦痛に對して、苦痛を受けた。

「皇帝の御地位をお察し申しあげろよ」と、宮中官等は云つた、そして、彼等は、最早二日前のやうにクツウゾフの稱讚をば諂すに、反つて此度は、その日の皇帝の不安の原因だとして、彼を非難した。

公爵ヴァシイリは、最早自分の被保護者クツウゾフの自慢は爲無くなつて、總司令官のことが談話の主題になる時には、黙まり込んで居た。

その上に、その日の夕方には、有ゆる物が、何も彼も、一緒になつて、彼得堡の世界をば、動搖と不安の裡へ投げ込んだともいふやうであつた、恐しい報知が來て、人々の不安に今一つ驚きを加へた。伯爵夫人



エレナ・ベズウホフが、全く不意に、恐ろしい病氣——彼れ程面白がつて人々が話して居た病氣——の爲に、死んだのであつた。

大きい集會では、誰も彼も、伯爵夫人ベズウホフは、狭心症の恐ろしい襲撃の爲に死んだのだといふ表面の物語を繰り返して居た、が、極く親しい同士の間では、人々は、西班牙の女王の侍醫が、或る効果を起こさせやうと思つて、或る藥の少量の分量を、エレンに施して居たのだが、エレンは、老伯爵が自分を疑つて居たのと、自分の夫（彼の不運な、放埒なピエール）が自分の手紙に返答を爲無かつたのとの爲めに苦められて、不意に、極まつて居た藥を非常に多量に飲んで、救助が與へられる筈も無くして死んで了まつたことを、詳しく話して居た。世間の取り沙汰では、公爵ヴァシリと老伯爵とは、醫者の伊太利人に對して訴訟を起さうと爲たのであるが、後者が、自分が持つて居た不幸な死者の手紙を出して、それが餘程何か理由のあるものであつたので、二人は直ぐに訴訟を思ひ止まつたといふのであつた。

談話は、三つの悲哀な事實——即ち、皇帝の未定の状態に對する不安、クウタイソフの喪失、それから、エレンの死——の周圍に集中した。

クツウゾフの急報が來てから三日後に、一人の地方紳士が、莫斯科から彼得堡へ着した、で、莫斯科が佛蘭西軍へ渡されたことの報知が、市ちうへ廣がつた。

これは實に恐ろしいことであつた。皇帝の地位は察するに餘りあるのであつた。クツウゾフは叛逆人であつた、で、娘の死んだ時に「悔みの訪問」の間、公爵ヴァシリは、クツウゾフの話を爲る場合になると、前には彼れ程その人を讃め立て、置きながら——愁傷の折であつて見れば、自分が既往に云つたことを忘れたのも、無理では無いのだが——彼は、クツウゾフのやうな盲目の不身持な老人には、今のやうなことが當然

なのだと言つたのであつた。

「彼様な男に、能くまア、露西亞の運命が托されるやうになつたことだと、實に不思議で堪らん」

報知が公式なもので無い間は、未だそれが眞實だか何うか疑ふ餘地があるのであつた、が、その次の日に次のやうな報告が伯爵ラストオブチンから來た——

「公爵クツウゾフの副官が、彼が、リヤザン海道へ彼の軍を案内する爲めに警察官等を出して呉れと頼む手紙を私の所へ持つて参りました。彼は、残念ながら、莫斯科を放棄すると申すのです。陛下。クツウゾフの處置は、その首都と陛下の帝國との運命を決するのでございます。露西亞國は、露西亞の偉大なことが集中して居り、吾々の祖先の灰が在るところのその都が棄てられたと聞いては、國ぢう戰慄すること、思ひます。私は軍に隨いて行かうと致して居ります。何も彼も、有ゆる物を運び去らせました、唯だこの上は、私は、吾國の不運の爲めに泣くのみでございます」

この上書を受取るといふと、皇帝は、次のやうな勅書を持たして、公爵ヴォルコオンスキイを、クツウゾフの許へと、遣つた。

「公爵ミハイール・イラアリオノヴィチよ。予は、八月二十九日以來卿から何の上書をも受けぬ。而るに、予は、オロスラヴルの方から、莫斯科總督から、卿が、軍と共に、莫斯科を棄るに決したといふ報知を得た。この報知が、予に何ういふ影響を及ぼしたか、察して呉れ、而も、卿から音沙汰の無いことは、予の驚愕をますます加へるのだ。予は、今、軍の状態及び、卿をしてさういふ悲しい決斷を爲さしめた諸原因を、卿に就て、確める爲めに、予が、副官長の公爵ヴォルコオンスキイに此の書を持たせて遣る」

(三)

莫斯科の放棄から九日後に、クツウゾフからの使者が、莫斯科の開城の公報を持つて、彼得堡に達した。この使者は、佛蘭西人のミシオーであつた、この男は、露西亞語は知ら無かつたが、それでも、彼自身が何時も云つて居た通り「外國人ながら、心は全くの露西亞人」であつたのだ。

皇帝は直ぐに、カアメンニイ島の宮殿内の自分の書齋で、使者を引見した。この戦役以前には莫斯科を一度も見たことが無く、又、露西亞語を一語も知ら無かつたミシオーも、莫斯科の大火——その焔が彼の道を照らしたのだ——の報知を持つて、「吾等の優渥なる皇帝」(彼はさう書いた)の前へ出た時には、非常に感動した心持になつた。

モシウ・ミシオーの悲哀の原因は、露西亞國民の悲痛の原因であつたものとは、異つて居たけれども、ミシオーは、彼が皇帝の書齋へ通されるといふと、皇帝が直ぐに次のやうに彼に尋いた位、非常に悲しさうな顔容であつたのだ——

「悲しい報告ですか、大佐？」

「眞個に悲しい報告でございます、陛下、莫斯科の放棄」と、ミシオーは答へて、溜息と共に眼を下けた。「一戦も爲すに私の舊都を棄て、了まつたのか？」と、皇帝は口迅に尋いて、不意に顔を赤くした。

ミシオーは、謹んで、クツウゾフから奏上しろと云はれて居た報告を爲た、それは、莫斯科の前で戦ふなどは思ひも寄らぬことであつて、軍と莫斯科を併せて失つて了ふか、さ無くば莫斯科だけを、失つて了ふか、といふその孰かより外には、何うにも方が無いのを見たので、總司令官は、後者を擇ばざるを得無かつ

た、といふのであつた。

皇帝は、ミシオーを見ずに、一言も云はずに聽いて居た。

「敵は市へ入つたかね？」と、彼は尋いた。

「左様でございます、陛下、で、今は、市は灰燼になつて居ります。私は全體が燃えて居ります時に出で参りました」と、ミシオーは、思ひ切つて、云つた、が、皇帝の顔を見ると、ミシオーは、自分がさう云つたのに慄然として了まつた。皇帝は、苦しさに、速く、呼吸を爲て居た、彼の下唇はビリ／＼して居た、そして、彼の美しい蒼い眼が寸時の間涙で濕つて居た。

が、それはホンの寸時のことであつた。皇帝は、自分の弱さが自分ながら癢に觸つたとしても云ひさうに、不意に顔を擧めた、そして、頭を擧げて、確乎した聲でミシオーに話し掛けた——

「吾々に向つて起つて居る事から見れば、神が吾々から非常な犠牲を求められるのだと思はれるね、大佐。私は、何様な事に於ても神の御意に従ふ覺悟だ、けれども、ねえ、ミシオー、一撃をも敵に與へずに私の舊都がさういふ風に棄てられたのを見た軍の状態は、お前が出る時分は、何うであつたか、話して呉れんかね。勇氣沮喪の風は無かつたかね？」

彼の最も優渥なる皇帝が、沈着を回復したのを見ると、ミシオーも自分の沈着を回復した。が、皇帝の如何にも率直な問——何うしても、直截な返答をし無ければなら無いもの——に對しては、彼は、未だその答の心構が無かつた。

「陛下、私が忠義なる軍人として、遠慮無く申し上げることを、お許しくださいませうか？」と、彼は、遲をこしらへる爲めに、云つた。

「大佐、それが私が何時も求めて居ることなのだ」と、皇帝は云つた。「何にも隠さずに云つて呉れ、私は、全く實際の状態を知り度いだ」

「陛下」と、ミシオーは、唇に、微妙な、殆ど見とめられ無いやうな微笑を含んで、云つた、彼は、最早その時までには、軽い、謹んだ云ひ廻し方の返答をこしらへる違を持つたのであつた。「陛下。私が發ちました時分には、上司令官等から下兵卒に至りますまで、残らず、非常な絶望的な恐怖に陥つて居りました」

「何うしたことだ？」と、皇帝は、遮ぎつて、荒々しく顔を擧げた。「私の露西亞人等が、不幸の爲めに落膽するなどは……いや決して……」

ミシオーが、自分の名文句を扱れやうと待つて居たのは、恰度其所なのであつた。

「陛下」と、彼は、謹んだ、少し冗談らしい顔容で、云つた。「彼等は、唯だ、陛下が、御仁心から、和議をお結びになるやうになりは致しますまいかと、只管それを恐れて居るのでございます。彼等は、燃え立つ心で戦を熱望致して居ります」と、露西亞國民の全權使節は云つて、「そして、彼等は、自分等の生命を犠牲にする事に依つて、自分等が何れ程忠義であるかを、陛下にお見せ申し上げやうと熱望致して居ります……」

「あゝ」と、皇帝は、安心させられて、云つて、眼は親し氣な光を持つて、ミシオーの肩を叩いた。「お前は私を安心させて呉れた、大佐……」

皇帝は下を向いた、そして、少時黙つて居た。「では、軍へ歸つて」と、彼は、云つて、轟然と立ち、そして親し氣な、神々しい身振りで、ミシオーに、話し掛けて、「それで、吾々の勇士どもに、それから、何處でも、私の善良な臣民等悉皆に、云つて呉れ、私は、一兵卒も持た無くなつても、私の親愛な貴族、私の善

良な農夫を私自身率ゐて、そして、私の帝國の最後の手段を、悉く盡くすのだ。國からは、私の敵が想像して居るより以上の物が得られるのだ」と、皇帝は、益々奮ひ起つて、云つた。「けれども、神聖なる神の命令の中に」と、彼は云つて、そして、感情で輝いた彼の美しい、柔和な眼が、天の方へ舉げられたが、「私の朝が、私の祖先の位に於て、國を治め得無いやうになると、書いてあるのであつたら、私は、私の力で能きる有らゆる手段を盡くしてしまつてから、顎髯を此所まで延し」(皇帝は、手を下けて胸の半の所へ附けた)「私の農夫等の中の最も卑い者の間へ入つて、それ等の者どもと共に、馬鈴薯を食つて暮らさう、私は、私の國及び私の親愛な臣民の恥になる講和を爲るよりは、さう爲る方を潔よしとするのだ。私は私の臣民の今の犠牲の行爲を満足に思ふのだから」

感情の甚く籠つた聲で、斯ういふ言葉を云つて、皇帝は、自分の眼に出で来る涙をミシオーに見せまいとするかのやうに、突と身を彼方へ振り向けた。そして、書齋の彼方の端へと行つた。寸時、其所で立つて居てから、彼は、ミシオーの傍へ歩み戻つて、力強い身振りで、ミシオーの腕を、腋の下の所で、ギュッと握つた。皇帝の美しい、柔和な顔が赤くなつた、そして、彼の眼は、氣力と憤怒で、ギラ／＼した――

「大佐ミシオー、私がお前に今此所で云つた事を忘れ無いで居て呉れ、何時か又吾々二人がこれを、愉快に、憶ひ起すこともあるだらうから……ナポレオンか、私か、孰か一人倒れるのだ」と、皇帝は云つて、自分の胸を押して、吾々は、最早一緒に國に王たることは能き無い。私は彼の男が善く解つて來た。再度と彼の男に欺まされるものか……」で、皇帝は、言葉を止めて、顔を擧げた。

斯ういふ言葉を聞き、皇帝の眼の裡で斷乎とした決心を見て、ミシオーは、外國人ではあつたが、心は全く露西亞人であつたので、その嚴肅な刹那に於て、彼の今聞いた事の爲めに、熱中の感を喚び起させられた



(彼がその後、度々話した所では)で、彼は、次のやうな語句で、自分自身及び露西亞國民(彼は自分がその國民を代表して居るのだと思つて居た)の感情を言ひ表はした。  
「陛下」と、彼は云つて、「我國民の榮譽と、歐羅巴の救出が、陛下の唯今の御言辭で極まりました」  
頭を動かして、皇帝はミシオーを退出させた。

(四)

露西亞の半分が征服され、莫斯科の住民等が遠方の諸地方へと遁れつゝあり、民兵の徵募が、國を防禦する爲めに、相續いて行はれて居るのであるから、その時代に居無かつた吾々は、露西亞の人民は、貴賤を問はず、悉く、犠牲的行爲に出ることや、國を救ふことや、國の没落を傷むことなどの外には、何も爲て居無かつたのだと、想像せざるを得無い。

その當時の物語や、記録は、何れも残らず、露西亞人の犠牲献身、愛國心、絶望、悲痛、及び勇者的行爲の外、何にも吾々に語ら無い。

所が、實際は、寸毫も左様では無かつたのだ。それが前に云つたやうに吾々に思はれるのは、吾々が過去の事を見る場合には、吾々は、その當時の全般的な歴史上の利害關係を見るのみで、その當時の人々の個人的な利害關係を見無からである。所が、實際に於ては、その當時にあつては、直接の現在のさういふ個人的利害の方が、公の利害よりも更に重要であつて、公衆は、前者の爲めには、公の利害をば深く感ぜず——甚しきは、その存在に一向氣が付かずに居る位であつたのだ。で、ナポレオン戦争當時の人民の大多数は、國の事態の全般的進行に少しも氣を留めずに、唯だ自分等の直接の個人的利害の爲めに動かされて居

た。所が、さういふやうな人民こそ、その當時の爲事に對して最も有益な働を爲て居たのであつた。

事件の全般的傾向を了解しやうと力めたり、犠牲的行爲や勇者的行爲に依つて、その事件に参加しやうと試みたりして居た人々は、社會の最も無用な分子であつたのだ。彼等は、有らゆる物を、何も彼も、逆まに見た。そして、彼等が非常に善い事の積りで爲た事は、無用な愚擧に爲つたのだ。即ち、ピエールや、マモオノフの聯隊のやうなもので、唯だ露西亞の村々を掠奪して廻はつて居たきりであつたし、又貴婦人等の裂いた外科用布のやうなもので、出來たには出來たが、決して負傷者へは達か無かつたのだ——二三の例が先づさうなのである。

智力的問題の話を爲、自分等の感情を言ひ表はすことが好きであつて、露西亞の状態を論じ合つた人々さへ、知らずくのうち、彼等の談話の裡へ少しづつ、偽善、虚偽、で無ければ、他の人々に對する非難とか厭惡とかいふものを、入れて居たのだ、が、さういふ非難を受けた人々は、何人の咎でもある筈の無い事件に對して、非難されて居た譯であつた。

歴史上の諸事件に於ては、吾々は、「智慧の樹」の果を食ふことを吾々に禁する法則を一層明瞭に見るのだ。果を結ぶのは、唯だ無自覺の活動のみである。そして、歴史上の事件の中で働く人は決してその意義を解して居るものではない。若し、その人にして、その意義を領會しやうとするのだとしても、その人はそれの無意義であるのに驚かされるのだ。

その當時露西亞で起つて居た事件の意義は、人がそれに参加する度合が密接なれば密接なだけ、それだけそれを了得することが厳かしかつたのだ。彼得堡でも、莫斯科から遠く離れた諸地方でも、貴婦人等や、義勇兵の制服を着た紳士等は、露西亞及び舊都の不運を悲んだり、犠牲的行爲のことを話したり、といふやう

な風であつた。が、莫斯科の彼方へ退却してしまつた軍の間では、人々は、莫斯科のことなどは、殆ど話してもせず、考へも爲無かつた程で、焼けて居る市を見詰めても、誰一人佛蘭西人に對しその復讐を爲るなど、誓つた者も無かつた。が、彼等は、誰彼無しに、衆皆、渡さるべき次期の給料のことや、次の駐軍地のことや、酒保女のマツリョーシカのことなどをば、考へて居たのであつた。

ニコライ・ロストオフも、犠牲獻身などといふ考想は更に無く、唯だ自分が軍職を退か無いうちに戦争が起つて来たといふ理由ばかりで、國の防禦に、直接にそして引續いて、與かつて居たのだ。で、さうであつたからして、彼は、露西亞で起りつゝあつた事件をば、絶望もせず、暗愴たる豫想も持たずに、見て居たのだ。

彼が、若し、露西亞の今の状態を何う思つて居るか他から尋かれたのであつたら、彼は、自分はさういふことを考へるには及ば無い、それは、クツウゾフ其他の連中の爲事であるのだ。けれども、自分は、諸聯隊が十分に充員されて居るさうだから、随分長く戦ふだらうし、又、現在のやうな状況では、二三年うちには随分譯無く聯隊の司令權を握れるかも知れぬと思つて居る、と云つたらう。

これが彼の見解であつたので、彼が自分の隊團に對する補充馬匹を買ふ爲めにヴォロネエスへ出張を命ぜられたといふ通知が来た時にも、近くにある戦に少しも與からぬのを更に残念がりはせずに、反つて大満足であつた——その心持を彼は少しも隠さ無かつたし、又、彼の同僚等も十分道理だと思つて居た。

ボロディノオの戦の二三日前に、ニコライは、所要金と公文書類を得て、幾人かの驃騎兵を先發させて置いて、自分は驛次馬でヴォロネエスへと向つた。

同なじ經驗のある人——即ち、戦地での軍の雰圍氣の裡で何か月も引續いて暮したことがある人——で無

ければ、ニコライが、軍隊が、その徴發隊、兵站部、病院と共に、散ばつて居た地域から離れた時に感じた嬉しさを想像することは能き無いのだ、最早一人も兵卒が見えず、軍用荷馬車も、陣營の汚い痕跡も見え無くなつて、その代りに、農夫や農婦の居る村や、紳士の田舎家や、草を食つて居る牛の群の居る野原や、眠むさうな驛長の居る驛亭などを見るといふと、ニコライは、生れてから始めてさういふ物を見たとしても云ひさうに、大喜びになつた。

彼に取つて何よりも、一番、長く驚愕となり、喜悅となつて、残つて居たものは、若い、健康な女たち——その一人々々の尻へ、何十人もの將校が附隨して居るといふやうなことの無い女たち——を見たこと、又、一人の將校の冗談を云ひ掛けるのを、嬉しがつて居た女たちを、見たことであつた。

非常に嬉しい心持で、ニコライは、夜ヴォロネエスの旅館に着いて、自分が軍では持つことの能き無かつた有らゆる物を註文した、で、次の日は、特別に念を入れて顔を剃り、最早餘程長く着たことの無かつた正式の制服を着て、官憲の前へ出る爲めに、馬車を驅つた。

その地方の民兵の司令官は文官の將官で、老紳士であつたが、確にその人は自分の軍務や官位を非常に面白がつて居たらしかつた。彼は、ニコライに如何にも無作法に應對した（彼はさういふのを軍隊式だと思つて居たのだ）、それから、さうする權限が自分にあるとでも云ひさうに、さも勿體振つた風で、ニコライを種々に尋問し、又それから、戦争のやり方に就て判定を求められでもしたかのやうに、自分の賛意や、非難を言ひ表した。

ニコライは、これを唯だ面白がつてばかり居たといふ位、非常に機嫌が好かつたのであつた。民兵の司令官の所から、ニコライは、知事の所へ行つた。知事は、勢の好い小男で、これは、極く愛想

の好い、氣取つた所の無い男であつた。彼は、ニコライに、馬が得られやうと思はれる育馬場を幾個所か名指した、それから、善い馬を持つて居るといふので、市の馬商人と、市から二十露里の所に居る紳士とを、推薦した、で、ニコライに能きる限り有らゆる助力を爲やうと約束した。

「君は、伯爵イリヤ・アンドレーエチの息子さんだね？。私の荆妻が貴下のお母様と非常な信友でしたよ。私の家の接客日は木曜です、今日は木曜ですから、何卒おいでください、儀式などは全く止にして」と、知事は、別れ際に云つた。

ニコライは、驛次馬車を雇ひ、自分の側へ給養係を乗らせて、知事の所から直ぐに、善い育馬場を持つて居るといふ二十露里の彼方に居る紳士の所へ向つた。

ヴォロネエス滞留の始の數日の間は、何も彼も、ニコライには、閑氣に愉快に見えた、そして、人が自分自身楽しい心持である場合には、何時でもさうであるやうに、ニコライに取つては、何事でも、好く、都合好く行つたのであつた。

先方の田舎紳士は、行つて見ると、年取つた騎兵將校で、獨身者で、非常な愛馬者で、狩獵家で、喫烟室と、百年の古酒の藥草火酒と、或る洪牙利の葡萄酒と、見事な馬との持主であつた。

一言一言交じへたのみで、ニコライは、自分の補充馬匹の見本として、十七匹の牡馬を、六千留で買つた、それは、悉皆それらの種の完全な模範（その紳士の云つたものでは）であつた。食事を爲、又、洪牙利葡萄酒を一二杯飲み過した位にして、ロストオフは、最早甚く心安くなつて居たその田舎紳士と接吻を交換してから、非常に嬉しい氣持で、恐しく悪い道路を馬車を驅けさしながら、知事の夜會に後れ無いやうにと、絶えず馭者を急ぎ立てた。

衣服を着換へ、香料をかけ、冷水で頭を冷してから、ニコライは、知事の家へ行つた、それは、少し遅れて居たので、「來無いよりは、遅れても」といふ句を、舌の端まで出しかけて居ながら。

それは舞踏會では無かつた、そして、舞踏のことは何とも云はれて居無かつた、が、誰も、カテリイナ・ベツロオヴナが翼琴でワルツや蘇國振を弾いて、舞踏があるだらうといふことを知つて居た、で、誰も、その積りで、舞踏會の服装で來たのであつた。

千八百十二年の地方の生活は、全く平常と同じに行はれて居た、唯だ異つて居たことは、その時は、地方の市々が、莫斯科から來た富裕な家族等が多く居たが爲めに、平常よりは賑かであつたことや、その當時露西亞で有つた有らゆる事の裡にの如く、その快活さの裡にも、何と無く、何うなつても構はぬといふ、絶望的な向ふ見すな所が窺はれたことや、それから又、人々の間には是非やらずには居られ無い一寸とした談話が、今では、天氣のことか、相互の知人たちのこと、かといふのでは無くつて、莫斯科のことや、軍のことや、ナポレオンのことであつたといふことばかりであつた。

知事の家は、ヴォロネエスの上流社會のみで成り立つて居た。

其所には貴婦人たちが多勢居た、その中に、ニコライの莫斯科の知人が五六人居た、が、男等の中には、聖ゲオルグの騎士で、勇ましい驃騎兵で、人の好い、育の善い伯爵ロストオフに肩を比らべ得る者は一人だつても無かつた。

男たちの中に、一人の俘虜の伊太利人——佛蘭西軍の將校が居た、で、ニコライは、この俘虜の居ること、が、自分——即ち、露西亞の勇者——の光彩を一層増したことを感じた。彼は、宛然、勝利の記念物であつた。ニコライはこれを感じて居た、そして、誰もがそれと同じやうな風に伊太利人を見て居るかのや

うに、ニコライには思はれたので、彼は、その外國の將校を、懇篤な威儀のある風と、隔を置いた風で、取り扱かつた。

ニコライが、驃騎兵の將校の禮服で、入つて来て、四邊へ、香料と酒との香を行き渡らせ、「遅くても、來無いより良い」と、自分も云ひ、又、五六度他から自分に向いて云はれるのを聞いて了まふや否や、人々は彼の周圍に蝟集つた。總ての眼が彼へと向けられた、そして、彼は、直ぐ、自分が、地方の市で自分に全く適した地位——何時も心持の好い、そして、殊にさういふ満足長く持ち得無いで居てから後の今では、酣醉させられるやうに甚く嬉しい地位——即ち、四方八方誰からも可愛がられる者の地位へ、入つて行つたことを、感じたのであつた。驛亭や、旅舎や、育馬者の紳士の喫烟室で、ニコライは、女中たちが、彼のお世辭を甚く嬉しがるのが、見えたばかりで無く、尙又、知事の家會の此所でも、自分たちの方へニコライが心を向けて呉れるのを只管に待ち兼ねて居る若い結婚した婦人たちが、可愛らしい娘たちが、無數に多く群れて居たのだ（ニコライにはさういふ氣が爲たのであつた）。

婦人や、娘たちは、彼と戯れた、そして、年取つた連中は、最早その初めての晩から、この様子の好い、若い、道樂者の驃騎兵を結婚させて、納まらせやうと、骨折りだして居た。さういふ後の方の連中の中に、知事の妻その人が入つて居た。その夫人は、ロストオフをば、自分の血族でもあるかのやうに迎へ、そして、彼を「ニコライ」と、呼んだ。

カテリイナ・ペツロオヴナは、實際、ワルツと蘇國振を弾くやうになつて、無踏が始つたのだが、その舞踏では、ニコライが、彼の如何にも様子の好い上品な風で、會衆を魅して了まつた。彼は、全く、彼の非常に輕々とした、自由な舞踏振で誰もを驚かしたのであつた。ニコライ自身も、その夜會での自分の舞踏振

には、我ながら少し驚いて居た。彼は莫斯科では一度も其様な態で踊つたことは無かつた。而も、莫斯科であつたら、其様な樂々とした自由な舞踏振をば、正しく無い、即ち、惡い舞踏振だと、思つたに違ひ無かつたのだ、が、此所では、異常な何物かで——人々が、自分等に取つては見慣れぬものではあるのだが、都では普通の事なのだと必らず思ふやうな何物かで——人々を悉皆驚かさなければなら無いやうに、ニコライは感じたのであつた。

その晩ちう、ニコライは、地方官の一人の妻の、碧い眼の、肥つた、心持の好い、小さい明色女に向つて、非常に眼に立つまでに愛想好くした。自分だけ面白ければ宜いと思つて他を顧み無い若者の無邪氣な確信——即ち、他の人々の妻は、自分だけの利益の爲めに、造られて居るのだといふ無邪氣な確信——で以つて、ロストオフは一度もその婦人の傍を離れ無かつた。そして、その夫をば、如何にも親氣な風で、扱つた。その様子では、殆ど、その夫とニコライとの間に何か内々の約束があつたかのやうに、又、二人とも、彼等、即ち、ニコライと、妻とが、何れ程面白く交際ふことが能きなのか、それを口へ出して云ひはせずとも、善く知つて居たかのやうに、見えたのであつた。

けれども、夫の方は、さういふ確信を持つて居るやうには見え無かつた。そして、ロストオフに向つて陰氣な調子を取らうとして居た。が、ニコライの機嫌の好い率直さが、非常に心持が好かつたので、時々夫はニコライの快活な機嫌に引き込まれずには居られ無かつた位であつた。

が、その晩の終に近づくに隨つて、妻の顔が、だん／＼赤くなつて、勢ひ付いて來るといふと、夫の顔の方、だん／＼陰氣に、無神經になるばかりであつた。それは、宛然、夫妻の間に快活さの融通が行はれて居て、妻の快活さが増せば、夫の分が減つて行くといふのであつたかのやうであつた。

(五)

寸時の間も、唇から微笑を無くならせずに、ニコライアイは少し前屈に低い椅子に掛けて、その明色美人の方へ近々と推冠さるやうにして、その女に神話的なお世辭を云つた。

「緊然した乗馬袴を穿いた脚の地位を態好く變へながら、香料の薫を撒き散しながら、それから、自分の美しい話相手や、自分自身や、緊然した袴を穿いた自分の脚の美くしい線を、賞しながら、ニコライアイは明色の婦人に、自分は、此所の、ヴォロネエスの或る婦人と駈落を爲度く思つて居るといふことを、話した。

「何様な風の方ですね？」

「人を魅するやうな、神々しい。その女の眼は」ニコライアイは、自分の話相手を凝視めた。「碧く、唇は珊瑚色で、白さは……」、彼は、女の肩を凝視めて、「月神の形……」

夫が、二人の傍へやつて来た、そして、何様な談話を爲て居るのかと、陰氣な風で、妻に尋いた。

「あゝ。ニキイター・イヴァーニイチ」と、ニコライアイは、云つて、丁寧な風で、起ち上つた。で、自分の戯談をば、是非ニキイター・イヴァーニイチにも面白がつて貰ひ度かつたかのやうに、ニコライアイは、或る明色の婦人と駈落を爲度く思つて居ることを、ニキイター・イヴァーニイチに話した。

夫は、恐い顔で微笑み、妻は陽氣に微笑んだ。

人の好い知事の妻が、不賛成らしい顔付で、傍へやつて来た。

「アンナ・イグナアティエヴナが貴下にお眼にかゝり度いと云つておいですよ、ニコライアイ」と、夫人は云つた。そして、その名の云ひ方は、ニコライアイが直ぐ、アンナ・イグナアティエヴナが極く身分柄な婦人で

あるのを覺ることができた程の調子であつた。「おいでなさい、ニコライアイ。貴下を斯う呼んでも宜いでせう、ね？」

「えゝ、宜しいですとも、伯母さん。それは、何様な女です？」

「アンナ・イグナアティエヴナ・マルヴィインツェフ。姪の方から、貴下がその方を助けたことなんぞ聞いておいでなんです……當て御覽なさい……」

「いや、助けた者は随分多いんですから」と、ニコライアイは叫んだ。

「彼の方のお姪御、公爵嬢ボルコオンスキイ。此所のヴォロネエスの伯母さんの所においでなんですよ。あら、まア赤くなつてさ。えゝ？」

「いゝや、決して、馬鹿なことです、伯母さん」

「えゝ、宜いんですよ、宜いんですよ。まア。まア。眞個に小兒ですな、貴下は」

知事の妻は、ニコライアイを、青いトック帽を冠つた、背の高い、甚く肥つた婦人の所へ伴れて行つた。その婦人は、市での極く善い身分の人々と一緒にやつて居た骨牌の勝負をその時恰度終つた所であつた。これが、公爵嬢マリイアの母方の伯母の、マダム・マルヴィインツェフで、この夫人は、子の無い、極く金持の寡婦で、何時もヴォロネエスに住んで居る人であつた。夫人は、ロストオフが傍へ行つた時には、起ち上つて、負を勘定して居た。

夫人は、嚴しい、威儀のある態で、眼瞼を下げて、ニコライアイをジロリと見たのみで、依然、自分に勝つた將官を叱つて居た。

「嬉しうございます、お前さん」と、夫人は、云つて、ニコライアイに、手をさし出した。「何卒、訪ねて來

てください」

公爵嬢マリイヤのことや、その父親——マダム・マルヴィンツェフはその人が嫌であつたらしかつた——のこゝろを一言三言云ひ、それから、公爵アンドレー——それも、何うも夫人には善く思はれて居無いらしかつた——のこゝろで、ニコライの知つて居たことを、尋ねてから、その威儀の整つた夫人は、家へ訪ねて来てといふ招待を繰返して、ニコライを退らせた。

ニコライは、夫人の家を訪ねやうと約束し、マダム・マルヴィンツェフと別れる時に、再顔を赤くした。公爵嬢マリイヤの名が出るといふと、ロストオフは、自分でも何故とも分らず、恥かしい感覚所では無く、恐怖の感覚をさへ覺えたのであつた。

マダム・マルヴィンツェフに別れると、ロストオフは、再舞踏をやらうと思つたが、知事の小さい妻が、彼の袖へ、圓々とした小さい手をつけて、少し話し度いことがあると云つて、彼を喫煙室へ伴れて行つた、その部屋に居た人々は、邪魔にならぬやうにと、直ぐに、出て行つて了まつた。

「ねえ、貴下」と、知事の妻は、人の好ささうな、小さい顔に眞面目な表情を持つて、云つて、「眞個に貴下には全く好適のご縁談なんですよ、貴下さへお宜しければ、私纏めにかゝりますよ」

「誰のことなんです、伯母さん」と、ニコライは尋いた。

「私、彼の公爵嬢と貴下との縁談を纏めるんですわね。カテリイナ・ベツロオヴナはリイリイのことを云つたんです、けれども、私は、いゝえ、それはいけ無い——公爵嬢だ——と云つたんですよ。貴下何うですね？。必定母上様は喜びですよ。眞個に、彼女の女は實に立派な娘さんです、愛嬌のある。それに、彼女の女は決して左様な不器量では無いんですよ」

「いゝや、決して」と、ニコライは、さういふ考想に對して腹を立てたかのやうに、云つた。「私としては、伯母さん、軍人の爲べき通りに、私は、誰にも無理に承知させやうとも爲無いと同時に、自然に出来る物は何でも嫌ひは爲無いんです」と、ロストオフは、自分が何ういふ事を云つて居るのか考量する違も無いうちに、云つて了まつた。

「では、覺えて居てください、これは決して冗談事では無いんですからね」

「いや、決して其様なことはありません」

「えゝ、えゝ」と、知事の妻は、獨語を云ふかのやうに、云つた、「所でですね、内々に申しときますけどもねえ、貴下は、他の女に餘り氣を入れ過ぎておいでですよ——彼の明色女にさ。ご良人がお氣の毒ですわ、全く……」

「いゝや、何うして、吾々は全く仲が好いんです、ニコライは、自分の心の率直なことから、さう云つた、自分に取つてそれ程面白かつた遊戯のやうなものが、他の人に取つて愉快で無からうなどいふ考想は、決して、彼の頭の裡へはテンで出て來無かつたのだ。

「だが、何といふ愚劣なことを、俺は知事の妻に云つたんだらうなア」といふ考想が晚餐の時に、不意にニコライの心へ出て來た彼女は眞個に縁談を纏めに掛かるぜ、さうすると、ソオニヤは？……」

で、知事の妻に暇乞を爲るといふと、その夫人は今一度「ね、覺えて居てくださいよ、では」と云つたので、ロストオフは夫人を片隅へ引張つて行つた。

「ですが、少し都合があります……實を云ひますとね、伯母さん……」

「何ですか、何ですか、貴下。さア、ま、此所へ坐らうぢやありませんか」

ニコライは、自分の最も秘密な感情（彼が、母親にも、妹にも、親しい友にも、決して話さ無かつたらうと思はれるやうな事）をば悉皆、この殆ど見ず知らずの人であるところの女に、話してしまひ度いといふ心持、さう爲度いといふ抵抗し難い衝動を、不意に持った。其後になつて、ニコライが、この説明し難い率直の何の原因も無い爆發——尤も、これは、彼に取つては、非常に重大な關係を生じたものではあつたが——の事を考へる度毎に、彼には、それは、愚學の不意の發作の爲めに、全く偶然に起つたものゝやうに（さういふ場合にあつた人には何時もさう思はれるやうに）思はれたのであつた。が、それと同時に、率直のこの爆發は、その他の一寸とした諸事件と一緒に、彼及び彼の家族に取つて非常に重要な結果を生じたのであつた。

「それは斯ういふんです、伯母さん。母は最早長いこと、私を金持の後繼娘に結婚させやうと、思つて居るんです。ですが、其様な事——金銭の爲めにする結婚——などは、唯だ思ふだけでも、私には實に厭で堪まら無いんです」

「え、そのお心持は私にも善く解ります」と、知事の妻が云つた。

「ですが、公爵嬢ボルコンスキイ、彼は全く別問題です。第一、私は貴女眞實を話しますが、私は彼の女が好きです、私は彼の女の方へ引き付けられるやうな氣が爲るんです。それから、彼様いふ地位で彼の女に行き逢つたからといふものは、何時も、餘程異様な事ですが、私には、それが運命だつたといふ氣が爲るんです。ねえ、何うでせう、母は、長いことそれを夢みて居たんです、けれども、私は、その前には、一度も彼の女に逢ふやうなことが無かつたんです——吾々が出逢は無いやうに何時も爲つて居たんです。それに又、私の妹のナタアシャが彼の女の兄と婚約を結ぶことになる、といふと、勿論、さうなると、吾々の方

の縁談は思ひも寄らんことになつたんです。（註——希臘教では、結婚關係は血族關係になるのだ）ナタアシャの婚約が破られたその時に恰度、私が彼の女に始めて出逢ふやうになつて居たやうに思はれるんです。で、其所で、それから何も彼も……先づ、さういふ風な譯なんです。私は、一度も、誰にも此様な事を話したことはありません。そして、これから先も、決して誰にも話しはしません。私は貴下だけにお話するんです」

知事の妻は、嬉しさうに、ニコライの腕を握つた。  
「貴女は、私の従妹のソフィーを存じますか？ 私は彼女を愛して居ます、私は、彼女と結婚しやうと約束しました、そして、私は彼女と結婚する積りです……ですから、其様な事を話したつて、何の益にも立た無いんです。ね」と、ニコライは、眞赤になつて、言葉を途中で切つた。

「もし、貴下、何故其様なことを仰しやるんです？ もし、ソフィーは何にも無しぢアありませんか、それに、貴下は、父上様のお手許が非常にお苦しいとお云ひなすつたんぢやありませんか。それから、母上様の方は何うなんです？ 母上様は、其様なことを貴下がなさらうものなら、死んでおしまひですよ——第一それから、ソフィーも、若し、その女も少しでも人情のある人なら、その女に取つても、随分苦しい生活になりますわね。母上様は絶望なさる、貴下の地位は破滅してしまふ——いゝえ、貴下、不可ませんよソフィーと貴下が、それを瞭乎と認め無ければなら無い筈なんですよ」

ニコライは何とも云は無かつた。さういふ議論を聞くのが、彼に取つては、心持が好かつたのだ。「それでも、依然、伯母さん、其様なことは能きる筈がありませんよ」と、彼は、一寸と黙まつて居てから、留息して、云つた。「それに、公爵嬢は私で宜いと云ふでせうか？。まだ、その上に、彼の女は喪中です、其様なことは、考へどころでは無いでせう」

「おや、まア、貴下は、私が直ぐ此所で貴下を結婚させるとでも思つておいでですか？。物には種々爲やうのあるものですからね」と、知事の妻が云つた。

「實に、媒介はお上手ですね、伯母さん……」と、ニコライは云つて、夫人の圓々とした小さい手に接吻した。

(六)

ボグチャアロヴァでロストオフに逢つた後、莫斯科へ行き着くといふと、公爵嬢マリイヤは、其所で、家庭教師と一緒に居る甥に逢ひ、ヴォロネエスに居る伯母のマダム・マルヴィインツェフの所へ何ういふ路を取つて行くと、指圖してある公爵アンドレーの手紙を見た。

旅行に對する支度や、兄の身の上に對する心配や、新しい家の中の生活の組み立て方や、新しい人々や、甥の教育——總てさういふさまざまの事が、父親の病氣中及びその死後、殊に、ロストオフと出會つて以來、公爵嬢を悩ました誘惑とも云へさうな感情をば、公爵嬢の胸の裡で、押し消して居た。

公爵嬢は鬱々として居た。

一月も、靜な、何事も無い状態で暮した今になつては、公爵嬢は、自分の父親の無くなつたことを、だんだん深く感じだした。その父親の無くなつたことは、公爵嬢の心では、露西亞の没落と結び付けられて居るのであつた。公爵嬢は、心配して居た、兄——自分に近い者で残つて居るのは唯だそれきりであつた——が、危険に曝らされて居るのだといふ考案が、公爵嬢に取つては、絶え間の無い苦惱であつた。

公爵嬢は、又、甥の教育のことでも苦しめられた、それを監理して行くことは自分には到底駄目だと、絶

えず感じて居るのであつた。けれども、その心の底には、内心の調和があつた。それは、自分が、ロストオフのことで起つて來た自分の幸福の夢だの希望だのを、自分の心の裡で壓伏してしまつたといふ感から生じたものであつたのだ。

知事の妻が、夜會の翌日、マダム・マルヴィインツェフを訪ねて、自分の計畫を相談し、時が時だから正式の約婚は勿論思ひも寄らぬことだが、それでも若い同士交際はせて、相互に善く知り合はすやうに爲たらば宜からうと説明し、それから、伯母さんの賛成を得て、公爵嬢マリイヤの前で、ロストオフのことを話して、ロストオフのことを賞め上げ彼が公爵嬢の名を聞くといふと顔を赤くした様子などを話した時には、公爵嬢マリイヤの感情は、喜ばしい感では無くつて、苦痛の感であつた。公爵嬢の内心の調和は破されてしまつた、そして、欲望や、疑念や、自己非難や、希望が再起つて來た。

それから、ロストオフが訪ねて行くまでの二日の間、公爵嬢マリイヤは、ロストオフに對して自分が何う擧作すべきであらうかといふことを絶えず考案して居た。或る時は、自分は、正式の喪服を着て居るので、それで客に接する筈のものでは無いのだから、ロストオフが來ても、客室へは下りて行くまいと、決心したが、やがて又、それでは、自分に對して彼だけのことを爲て呉れた先方の人に對して無禮に當るだらうと、思つた。そのうちに、伯母と知事の妻が、自分とロストオフに對して何か考慮を持つて居るらしく、而も、二人の言辭や眼付では、確に左様らしいのだ、といふ考案がフト起つて來た。それから又、自分がさういふ人々のことを左様思ふのは、自分が意地が悪くなつたからなので、最も重い喪服を着て居る自分のやうな地位にある者に取つては、さういふ縁談などは、自分に對しても又自分の父親の記念に對しても、侮辱的なことであるのを、二人の夫人が覺らずに居る氣遣が何うしてあるものか、と、公爵嬢は、自分自身に向つて、



云ひ聞かせた。

ロストオフに逢ひに下りて行くと假定して置いて、公爵嬢は、ロストオフが自分に向つて云ふだらうと思ふ言語と自分が彼に向つて云ふだらうと思ふ言語を想像したのだが、或る時には、さういふ言語が、餘り冷々とし過ぎて居るやうに見える、次には、餘り意味があり過ぎるやうに思はれたのだ。取り分け、公爵嬢は、ロストオフを見るや否や、自分が我にもあらず途を失つて了まつて、自分の心を見透かされて了まひはしまいかと、虞れたのだ。

が、日曜に、朝祈禱の後で、従僕が、客室へ来て、伯爵ロストオフが訪ねて来たこと、取り次だ時には、公爵嬢は別に途を失つた気色は更に無く、唯だ微弱な赤味が頬部へ出、眼がこれまで無かつたやうな、晴々した光で、輝いたのみであつた。

「貴女彼の人にお逢ひなすつたの？」と公爵嬢は、落着いた聲で、云つたが、何うして左様外だけは落着いて平氣らしくして居られたのか、自分でも分ら無かつた。

ロストオフが、部室へ入つて来るといふと、公爵嬢は、その客が、伯母に挨拶する暇を與へやうとするとも云ひさうに、頭を下けた。で、それから、ニコライが自分の方へ振り向いた恰度その途端に、頭を擧げて、輝いた眼で、ニコライの凝視に應じた。

威儀と、如何にも上品な身の擧作とで、公爵嬢は、如何にも嬉しさうな笑顔で起ち上り、ニコライに、華奢な、和かな手をさし出し、そして、何か云つたが、その聲には、公爵嬢が生れて始めて、深い、女らしい胸聲の戦音があつた。

客室に居合せたマドモアゼル・プウリアンヌは、面食つた驚愕で、公爵嬢マリイヤを凝視めた。最も物馴

れた妖婦である所のプウリアンヌ自身でさへ、自分が引き付けやうと思つて居る男に對して、それ以上のやり方を爲ることは能き無いのであつた。

「黒い物が彼の女に非常に好く似合ふのか、で無ければ、全く、私が気が付かぬ間に、彼の女の器量が好くなつたのか、孰かなのだ。それに、取り分け、彼の掛引、彼の上品さ」と、マドモアゼル・プウリアンヌは思つた。

若し、公爵嬢マリイヤが、その時に、考へ廻らすことが能るのであつたら、自分の心の裡に起つた變化に對して、マドモアゼル・プウリアンヌより今一層驚いたらう。その心持の好い、愛した顔へ眼を見据ゑた刹那から、生の或る新な力が公爵嬢を領有して了まつて、公爵嬢自身の意志とは全く離れて、公爵嬢に物を云はせたり、行動させたりするのであるかのやうに見えた。ロストオフが部屋へ入つて来た時から、公爵嬢の顔は全然變つたものになつて了まつた。

恰度、彫刻して、彩どつた提燈に火が入るといふと、それまでは、何も彼も、粗末な、暗い、意味の無い物だと見えた場所へ、微妙な、細かい、美術的な繪格子が、思ひも掛けぬ、印象の強い美しさで、出て来るのと同なじやうに、さういふ風に、公爵嬢の顔が全然變つて了まつた。公爵嬢が今まで行つて来た純潔な、精神的な、内的辛勞が、こゝに至つて始めて、悉く顔に出て来たのだ。公爵嬢の靈に對する總ての内的探究や、自己非難や、苦悶や、善ならんとする努力や、諦めや、愛や、犠牲や——總てさういふ物が、今、その輝いた眼、優微な微笑、その優しい顔の有ゆる道具、の裡に、晴々と出て来たのだ。

ロストオフは、公爵嬢をば此れ迄ズツと知り來つて居たかのやうに、總てさういふ物を瞭乎と見た。彼は、今、自分が、彼がその刹那に至るまでに遭遇したことのある總ての者とは、全く異つた、そして、それに優

つた、又そして、第一、自分よりも貧に善い、或る者の前に居ることを感じた。

談話は、極く單純な、下ら無い種類のものであつた。二人は、我知らず、誰ものやうに、戦争の物語を始めて、その問題に對する各自の悲哀を誇張した、二人は、自分たちの最近の出席のことを話した——と、其所で、ニコライは話題を變へた、二人は、親切な知事の妻のことや、ニコライの親族のことや、公爵嬢マリイアの親類のこと、を話した。

公爵嬢マリイアは、自分の兄のことを話さ無かつた。そして、伯母が公爵アンドレーの名を云ひ出すや否や、話題を變へて了まつた。公爵嬢は、露西亞の國難のことは、宜い加減に話して居ることが能きるので、兄のことは、公爵嬢の心に最も近いものであるもので、兄のことをば、輕々しく話し度くも無いし、又さういふ風に話すことも能き無いのであるらしかつた。ニコライはそれに氣が付いた、が、さういふ風に觀察の鋭かつたことはニコライにはこれまで餘り無いことであつたのだ。彼は又、公爵嬢マリイアの性格の有ゆる蔭に氣が付いた、そして、有ゆる物が、彼に、公爵嬢は全く稀な、獨創的な人物だといふ確信を固めさせた。

ニコライも、公爵嬢マリイアと同なじに、公爵嬢のことを他人が云ふのを聞くと、顔を赤くして、モチモチしたのみならず、自分が獨りで、公爵嬢のことを思つただけでも、尙且左様いふ風になるのであつた。が、今公爵嬢の前へ来て見ると、彼は全く平氣になつた。そして、公爵嬢に云はうと前以て支度して居た事柄を寸毫も云はずに、その刹那に心へ出て來た事ばかり云つたのだが、それが何時もチャンと宜しきに適つたのであつた。

客が、先方の家に小兒が居る場合には、何時でも爲るやうに、ニコライは、彼の短時間の訪問中の時々

一寸と黙まつて居る際に、公爵アンドレーの小さい息子の相手になつて、それを愛撫し、そして、驃騎兵にならぬかなど、尋いた。彼は、その小さい男の兒を抱き上げて、快活にグル／＼廻らせて、そして、公爵嬢マリイアを一す々々見た。和いだ、嬉しさうな、慎ましうな眼で、公爵嬢は、自分が愛して居る男の腕に抱かれて居る自分が愛して居る小兒を見守つて居た。ニコライは又その顔にも氣が付いた、で、その意味を見抜いたかのやうに、嬉しさで顔を赤くして、無邪氣な快活で、小兒に接吻しだした。

公爵嬢マリイアは、服喪の爲めに、一切交際場裡には出無かつた、で、ニコライは、再その家の人々を訪問するのは宜く無いと思つた。が、知事の妻は依然媒介役を勤めやうと骨折つて居て、ニコライに向つては公爵嬢マリイアが彼のことに就いて云つた彼に取つては嬉しい事柄を傳へ、公爵嬢の方へ行つては、ニコライの云つた同なじやうなことを傳へなどして、始終ロストオフに、公爵嬢マリイアに向つて自分の意志を通じると、促がすのであつた。

さういふ目的で、知事の妻は、若い二人が、祈禱式の始まる前に、僧の家で會ふやうに、取り計らつた。ロストオフは、公爵嬢マリイアに對して何の意志も通じはし無いと、知事の妻に、云ひはしたが、僧の家へは行かうと約束した。

恰度、テイルシットで、ニコライは、誰もが正しい事だと認めて居る事柄が實際正しいのか、何うかと、疑ふやうなことを爲無かつたのと同なじに、彼は、今、正しいといふ事に就ての彼自身の觀念に従つて自分の生活を整へて行かうといふ努力と、境遇に従順しく服従することとの間の、短かいが併し眞率な苦闘の後で、後者の方を選び、自分をば抵抗し難く持つて行きつゝあるやうな氣の爲て居た力へ自分の身を委せて了

まつた。彼は、自分がソオニヤと約束した後で、公爵嬢マリイヤに向つて自分の感情を口外するのは、彼の所謂下劣な行爲であることを知つて居た。で、彼は、自分は決して下劣な行爲は爲無いことを知つて居た。が、彼は又、今、境遇の力や、自分を導いて行つて呉れる人々の力へ、身を委せても、自分は間違つたことを爲して居るので無いのみならず、極く、極く厳肅な何事か、自分がこれ迄の生涯に爲た何事よりも更に厳肅な何事かを、爲して居るのだといふことを知つて居た（彼はさう知つたのでは無くして、心の底でさう感じて居たのだ）。

公爵嬢マリイヤを見てからは、ニコライの生活の風は外面的には前と少しも異ら無かつたけれども、彼に取つてこれ迄面白かつた事が、何れも此れも、少しも面白く無くなつて了まつて、彼は公爵嬢のことを度思ふやうになつた。が、彼が公爵嬢のことを思つたのは、彼が、交際場裡で會つた總ての若い娘たちのことを思つた時とも、又、彼が長く、そして、時には熱心で、ソオニヤのことを思つた場合とも、その思ひやうが、全く異つて居た。

大抵の正直な若者のやうに、彼は、何の若い娘をも、將來は自分の妻になるべきものとして、考へ、さういふ娘たちに、自分の想像の裡で、家族的幸福の總ての繪を當てはめ、白い朝外被、沸茶器の後の妻、妻の馬車、小兒等、母上様、父上様、彼等相互の態度、といふやうなことを心に思ひ浮べたのであつた。で、將來に就てのさういふ想像が彼に満足と與へたのであつた。

けれども、媒介好な連中が彼に婚約を結ばせやうと骨折つて居た公爵嬢マリイヤのことを思ふ時には、彼は、決してその公爵嬢との自分の將來の結婚生活のことは一切想像の裡で盡くことが能き無かつた。縱令、さう畫かうとしたに於て、その繪は、悉皆断片的で虚偽らしく思はれたのであつた。で、それは、唯だ

恐怖の念を彼の心に満たしたのみであつた。

(七)

ボロディノオの戦や、我軍の死者と負傷者の損害の、恐しい報知、それから、莫斯科が陥つたといふ尙一層恐しい報知が、九月の半にヴォロネエスに達した。

公爵嬢マリイヤは、唯だ新聞で兄の負傷を知つたのみで、何等確なことは更に知れ無かつたので、公爵アンドレーの、居る所へ行くやうに爲やうと、旅の支度をして居た（ニコライは、公爵嬢には其後逢ひは爲無かつたが、さういふ風に聞いた）。

ボロディノオの戦や、莫斯科放棄の報を聞いても、ニコライは、絶望とか、憤怒とか、復讐とか、いふやうなさういふ感情は一切感ぜずに、反つてヴォロネエスでの有らゆる物に對して倦怠や、苦惱を不意に感じたし、窮屈な感や、良心の不安を覺えたのであつた。彼が聞く總ての談話が、不誠實なものやうに思はれた、彼は、さういふやうな物一切を何う思つて宜いか、分ら無かつた、そして、聯隊へ歸りさへすれば、何も彼も自分には再明瞭になるのだといふ氣が爲た、彼は、大急ぎで、馬の買ひ込みを終はらうと爲た、そして、何の原因も無く、自分の従僕や、給養係に對して、度々機嫌が悪かつた。

ロストオブが出發する二三日前に、露西亞軍が得た勝利に對する感謝會が、大寺院であつた、そして、ロストオブはその式へ出た。彼は知事の後に居た、そして、式の終るまで、非常にさまじい問題に就て、その場合に相當な眞面目さで、沈思しながら、立つて居た、式が済むといふと、知事の妻がニコライを傍へ招き寄せた。

「公爵嬢にお逢ひでしたか？」と、夫人は、云つて、唱歌席の後に立つて居た黒い衣服の婦人の方へ、手を動かした。

ニコライは、直ぐそれが公爵嬢マリイヤであるのを認めた。が、それは、帽子の下に見えたその横顔からでは無く、一度にニコライ自身の心を襲つた敬虔な懸念、畏怖、及び憐愍の感情からであつたのだ。公爵嬢マリイヤは、自分自身の考で燃えて居るらしい態で、寺院を出る前の最後の十字を切つて居た。ニコライは、吃驚して公爵嬢の顔を凝視して居た。それは彼が前に見たのと同じ顔であつた。その顔には、前と同じに、一體に、上品な、肉体的な、精神的な辛勞の様子が表はれて居た。が、今は、その顔のうちに前とは全く異つた光が出て居た。其所には、悲哀の、祈禱の、それから、希望の、哀れな表情が出て居た。

彼が前に公爵嬢の面前で感じたと同なじの少しも躊躇し無い態で、知事の妻が促すのを待たずに、それが宜いことなのかどうか考へても見ずに、斯ういふ寺院のやうな所で公爵嬢に言語を掛けても宜いものなのかどうか考へもせずに、ニコライは、公爵嬢の傍へ行つて、自分は公爵嬢の心配のことを聞いて、心の底から悲しみを共にするのだと云つた。公爵嬢がニコライの聲を聞くや否や、公爵嬢の顔に生々した色が輝き出て、一度に公爵嬢の喜悦と悲哀とを照し出した。

「私のお話し爲度いことは、公爵嬢」と、ロストオフは云つて、「それは、若し、公爵アンドレー・ニコラエヴィイチが生きておいでなさらんのなら、公爵は聯隊長ですから、直ぐ官報に出る筈だといふことです」

公爵嬢はニコライを見た、で、彼の言語は分ら無かつたが、彼の顔に出て居た同情的な苦惱の表情の爲

めに慰められた。

「私の多くの實例から知つて居ます所では、弾片の傷は（新聞には榴弾だとあるのですから）直ぐにいけ無いか、で無ければ、極く軽いものなんです」と、ニコライは言語を續けた。「何大丈夫ですよ、で、確かに……」

公爵嬢マリイヤはニコライの言語を遮ぎつた。

「え、眞個に恐ろ……」と、公爵嬢は、云ひ始めた、が、感情が言語を塞いで了まつて、ニコライの前では何時もさうであつたやうに、頭を品好く下げ、感謝した態で彼を一寸と見て、伯母の後に隨いて行つた。

その晩は、ニコライは、何處へも行か無いで、馬商人との勘定を了まふ積りで、宿に居た。爲事を終はるといふと、最早何處へ行くにも少し遅かつた、が、それでも、寢床へ入るには早過ぎた、で、ニコライは、長いこと部室の裡を行つたり來たり歩きながら、自分の生活のことを考へた、が、其様なことを考へるのなどは、彼には非常に稀なことであつたのだ。

公爵嬢マリイヤは、ボグチャアロヴァで、ニコライに心持の好い印象を與へた。彼の時彼様いふ驚くべき事情の下で公爵嬢に逢つたといふ事實、及び、ニコライの母親が一時、彼に適合つた金持の繼嗣娘として、公爵嬢を選定したことがあるといふ事實が、ニコライをして、公爵嬢に對しては特別の注意を拂はすやうにさせたのであつた。

ヴォロネエスに逗留して居るうちに、さういふ印象が、愉快なものといふのみならず、非常に強いものに爲つて了まつた。ニコライは、この時に至つて公爵嬢の特殊な道德上の美しさを認めて、それから、深い

印象を受けた。

けれども、彼は、去る支度を爲て居た、そして、ヴォロネエスを去れば、彼は、公爵嬢に會ふ有らゆる機會を失つてしまふのだといふことを残念がる念は、少しも、頭へ入つて來無かつたのであつた。が、その朝、寺院で公爵嬢マリイヤに會つた事が、彼が豫想して居たより、眞然深く彼の心に徹し、彼が自分の心の平和の爲めに希つて居たよりは、眞然深く彼の心に徹したのであつた——少くとも、ニコライはさう感じたのだ。

その蒼い、優しい、悲しさうな顔、その輝いた眼、その和な、上品な身振り、それから、取り分け、公爵嬢の顔ぢうに表はれて居た深い、優しい悲しさうな様子が、ニコライの心を動揺させて、彼の同情を引き付けた。

男に於ては、ニコライは、高尚な精神的の生活の様子を平氣で見ることが能き無かつた（彼が公爵アンドレーを好か無かつたのはそれ故であつた）、彼は、さういふ事をば、哲學的理想主義だと蔑視して、評するのであつた、が、公爵嬢マリイヤの場合では、ニコライ自身に取つては全く不思議な、遠い、精神世界の有らゆる深みを示して居るその悲しさうな様子の恰度その裡に、ニコライは、抵抗し難い吸引力を見出したのだ。

「彼の女は非常な驚くべき女に違ひ無いな。天使だ、實際」と、彼は、一人で云つた。「何故俺は自由で無いのかなア？ 何故俺はソオニヤに對して彼様なに急いだのかなア？」

で、我知らず、彼は、さういふ精神的な天資——ニコライ自身がそれを持つて居無いが故に、非常に善い物だと貴んで居た——に於て、一人はそれに乏しく、今一人はそれに富んで居る所を、比較した。

彼は、若し自分が自由であつたら、何ういふことになるだらうかとか、何ういふ風に結婚を申し込むだらうかとか、何ういふ風にして公爵嬢が自分の妻になるだらうかとか、いふやうなことを想像しやうと試みた。いや、彼にはそれを想像することが能き無かつた。

恐怖の感が、彼を襲つた、そして、その想像は少しも纏まつた形に爲ら無かつた。ソオニヤに對しては、彼は、最早餘程前に、將來に就ての想像を造つて居たのだが、それは、如何にも單純で明瞭なものであつた。といふのは、全く、その想像が悉皆纏まつて居たものであつたからと、ソオニヤのことは何も彼も彼が知り抜いて居たからとで、あつたのだ。が、公爵嬢マリイヤに就ては、彼は、將來の生活を想像することが能き無かつた。それは、彼には、公爵嬢が解し得られて居らずに——彼が唯だ公爵嬢に戀して居たのみであつたからなのだ。

ソオニヤに關する彼のさまざまな夢想には、何處と無く冗談らしい所、何處と無く小兒の遊戯らしい所があつた。が、公爵嬢マリイヤのことを夢想するのは、難かしかつたし、又、少し恐しかつた。

「實に一生懸命に祈つて居たなア」と、ロストオフは思つた。「彼の女の靈全體が彼の祈禱に籠つて居るやうだつたなア。左様だ、山を動かすといふのは、彼様いふ祈禱なんだ、で、彼の祈禱には必定神が答へられるに違ひ無いんだ。何故、俺は、俺の欲しい物に對して、祈ら無かつたらう？」と、彼は思つた。「俺は何が欲しいのだらう？ 自由、ソオニヤから釋放されることなんだ。彼の女の云つた通りなんだ」と、彼は、知事（じ）の妻の云つた事を思つて、「彼の女と俺が結婚すれば、唯だ不幸に陥るばかりなんだ。それこそ滅茶々々だ、母上様の悲痛……俺の家の位置……滅茶々々だ、全く滅茶々々だ。その上に、俺は彼の女に戀しても居無いんだ。いや、俺は、彼の女に對して眞正の戀し方を爲て居無いんだ。我神よ。私を、この恐しい、望の無

い地位から救ひ出し給へ」と、彼は不意に祈り始めた。「左様だ、祈禱は山を動かすんだが、人は信仰が無ければ駄目だ、そして、ナタアシヤや俺が、小兒の時分、雪が砂糖になるやうにと祈り、それから直ぐ、それが砂糖に爲つたか何うか見て試やうと、廣庭へ駆け出た時のやうに、祈つては不可いんだ。いゝや、それでは不可いんだ、だが、俺は今下らん事を祈つて居るんだ」と、彼は、云つて、隅へ烟管を置いて、手を組み合せて、聖畫の前に立つた。で、公爵嬢マリイヤに對する考想で和けられて、彼は、最早長いこと祈つたことの無い風で、祈り始めた、彼は、眼に涙を持ち、咽喉に塊を持つて居た、其所へ、ラウルウシカが書類を持つて入つて來た。

「痴愚野郎、呼びもせんに跳び込んで來て」と、ニコライが云つて、急に姿勢を變へた。

「使者が參りましたんで」と、眠ぶさうな聲でラウルウシカが云つて、「知事から、旦那へのお手紙です」

「うん、左様か、宜し、有難う、去つて宜しい」

ニコライは、二本の手紙を取つた。一つは母親から、今一つは、ソオニヤからであつた。彼は、筆蹟で兩方ともそれと知つた、で、先づソオニヤの手紙を開けた。彼は、二三行讀むか讀ま無いうちに、顔が白くなり、眼が、驚愕と嬉しさで、廣く開いた。

「いゝや、其様な筈は無いぞ」と、彼は聲高く叫んだ。靜然と坐つて居ることが能き無くなつて、彼は、兩手でその手紙を持つて讀みながら、部屋の中を行つたり來たりして、歩いた。彼は、その手紙にザツと一渡り眼を通した、それから、今一遍讀み直し、そして、又讀み返した、で、肩を揺り、手を投げ上げて、口を廣く開き、眼を見張つて、部屋の中央に凝乎と立つて居た。

彼が今の先刻、神が自分の祈禱に答へて呉れるといふ確信で、祈つて居たその事件が、起つて來たのだ、

が、ニコライは、それが何か異常な事でもあつたかのやうに、彼には思ひ掛の無かつた事でもあつたかのやうに、そして又、それが其様な早く起つて來たといふ事實が、彼が祈つて居た神のお蔭でそれが起つたのでは無くして、全く何か通例の偶合であることを證據だてるのであつたかのやうに、その事件の起つたのに對して驚いたのであつた。

それを解くことは彼れ程不可能に見えて居た彼の自由を縛つて居た結び目が、ソオニヤからのこの思ひ掛の無い、そして、ニコライにはその理由の分らぬやうに見えた手紙に因つて、解かれて了まつたのだ。ソオニヤは、自分たちの此頃の災難や、莫斯科に在るロストオフ家の殆ど全財産が無くなつた事や、ニコライが公爵嬢マリイヤと結婚するやうにといふ願望を伯爵夫人が度々口に出す事や、近頃になつてニコライが冷淡になつて何の音信も爲無い事、總てさういふ事を一緒にして考へて見て、ソオニヤは、ニコライをばニコライの約束から釋放し、そして、彼に全くの自由を返し與へることを決心するやうになつたのだ、と書いて居た。

「私には背負ひ切れ無い程の種々な恩を掛けてくださつた家族の裡で、私が悲愁と不和の種になるやうなことがあるといふことを、思ふのは、私には實に苦しいことなんです」と、ソオニヤは書いた、「で、私の愛の唯だ一つの目的は、私が愛する人々が幸福になることなのです。ですから、何卒、ニコラス、貴下は、貴下御自身自由だと思つてください、そして、何うしたつても、この世の中で誰よりも一番貴下を愛して居るものは、貴下のソオニヤばかりなことを承知して居てください」

その手紙は二つともツロイツァからのものであつた。

今一つの手紙は伯爵夫人からであつた。それには、莫斯科の最後の數日だの、出發だの、火事だの、

ストオフ家の全財産の損失だのことが、詳しく書いてあつた。伯爵夫人は、又、公爵アンドレーエが、自分等と一緒に旅して居る負傷兵の一行の中に居るといふことを書いて居た。公爵アンドレーエは、未だ極く危険な状態に居るのだが、それでも、此頃は、醫者が少しは希望が出来たと云つて居る、ソオニヤとナタアシヤとが彼を看病して居るといふのであつた。

この手紙を携つて、ニコライは次の日公爵嬢マリイヤを訪問した、ニコライも公爵嬢マリイヤも、雙方とも、「ナタアシヤが彼を看病して居る」といふ言辭のうちに含まれて居る事柄に就ては、一語も云は無かつた。が、この手紙のお陰で、ニコライは、不意に、公爵嬢に對して、極く親近な關係、殆ど血族のやうな關係に、爲つたのであつた。

次の日、ロストオフは、公爵嬢マリイヤをヤロスラヴルまで見送つた、そして、それから二三日後に、自分も聯隊に加はらうと出立した。

(八)

ニコライの祈禱に對する答として來たソオニヤからニコライへの手紙は、ツロイツで書かれたのだ。それは、下のやうな譯で書かれることになつたのだ。

ニコライをば誰か金持の繼嗣娘に結婚させやうといふ考慮が、だん／＼強くなつて、到頭伯爵夫人の心を全く占領してしまつたのだ。伯爵夫人は、さう爲るのには、ソオニヤが非常な障碍物だといふことを知つて居た。で、伯爵夫人の家でのソオニヤの生活は、此頃では、殊に、ニコライが、ボグチャアロヴで公爵嬢マリイヤに會つたことを、書いた手紙が來てからといふもの、だん／＼居辛いものになつて行くので

あつた。

伯爵夫人は、ソオニヤに對して何か残酷な、侮辱的な當てこすりを云ひ得る機會を決して遁さ無かつた。が、人々が莫斯科から出立する二三日前に、その時の事情の爲めに苦められて、氣が氣で無かつた伯爵夫人は、ソオニヤを喚んで、言ひ張つたり、叱つたりは爲すに、涙と懇願とで、ソオニヤに、それまでのさまざまに恩義に對して、自分を犠牲にして、ニコライとの約束を反古にすることに以つて、恩返しを爲て呉れと頼んだ。

「私は、お前がさう爲るといふ約束を爲て呉れ無いちは、何うしても安心が能き無いのだよ」と、伯爵夫人が云つた。

ソオニヤは、甚く、歎息、泣聲の間から、自分は何様なことでも爲る、何様なことでも何時でも爲るといふことを、答へた、が、直接の約束は爲無かつた、心の裡では、頼まれたやうに爲る氣には何うしても爲れ無かつたのだ、ソオニヤは、自分を育て、呉れ、自分を養つて呉れて居る家の幸福を來すが爲めに、自分を犠牲に爲無ければなら無かつたのだ。

自分より他の人々の爲めに、自分を犠牲にするのが、ソオニヤの習慣であつた。ロストオフ家に於けるソオニヤの地位は、唯だ自分を犠牲にすることに因つてのみ、自分の善徳を示し得るといふやうな、さういふものであつた、で、ソオニヤは自分を犠牲に爲慣れて居て、さう爲るのが好きであつた。

けれども、これまでの孰の犠牲行爲の場合でも、ソオニヤは、その犠牲行爲その者で以つて、自分の眼に於ても、他の人々の眼に於ても、自分の價値を高めて居て、且、それで以つて、自分が人生に於ける何物よりも愛して居るニコライに對して自分がますます釣り合ふものとなるのだといふことを、知覺して、嬉し

く思つて居たのであつた。

が、今は、その犠牲は、ソオニヤに取つて、犠牲の褒美全體、人生の意義全體を、成して居るところの物を捨て、了まふことであつたのだ。で、生れてからこゝに始めて、ソオニヤは、自分を益々烈しく苛責む爲めばかりに自分に向つて親しく爲て居る人々に對して、怨しく思ひだし、それから、ソオニヤのやうな經驗を一つも持つたことも無く、一度も犠牲を爲ることを求められたことも無く、唯だ他の人々をして自分の爲めに犠牲を爲さしめるのみで、それで居て、誰からも愛されて居るナタアシヤをば、羨ましく思つた。

其所で、始めて、ソオニヤは、ニコライに對する自分の穩な、純潔な戀愛の裡から、有ゆる道理、徳、及び宗教を超越した熱烈な感情が、生れて來たことを、感じた。で、その熱情の勢力の下に、他人の家に世話になる生活を送つて居たが爲めに、知らずくの間、何事も控へ目にするやうに慣らされて居たソオニヤも、曖昧な、何とも極ら無い返答を伯爵夫人に爲、伯爵夫人と話を爲ることを避け、そして、ニコライと直接に逢ふまで待つて居て、其所で、彼との約束は取り消さずに、反つて、常久に自分へ彼を結び付けて了まはうと決心した。

莫斯科でのロストオフ家の最後の数日間の忙騒や、恐怖が、ソオニヤの心を押し付けて居た陰鬱な思想を抑へ付けて了まつた。ソオニヤは、喜んで、實際の仕事の中でさういふ考想からの遁け路を見出した。が、伯爵アンドレーエーが自分たちの家に居ることを聞くといふと、ソオニヤは、彼及びナタアシヤに對して心底からの憐愍を感じたに拘らず、自分がニコライと別れ無といふことが神の意であるといふ嬉しい、迷信的な感が、ソオニヤの心を領して了まつた。

ソオニヤは、ナタアシヤが愛して居る者は唯だ伯爵アンドレーエー一人切りで、その上に、ナタアシヤは彼

を決して愛さ無くはなら無かつたことを知つて居た。ソオニヤは、伯爵アンドレーエーとナタアシヤが、今さういふ恐しい状態の下で一緒に爲つた以上、二人は再愛し合ふことになる、で、さうなると、二人の間に存在することになる親類關係の爲めに(正 教 會の定法に従へば)、ニコライは伯爵嬢マリヤと結婚することは能き無くなるといふことを、知つた。莫斯科に於ける最後の一二日及び行旅の最初の二三日の間に起つたさまじくな恐しい出來事に拘らず、自分の事に神が立ち入つて呉れるといふ感、さういふ知覺が、ソオニヤに取つては喜悅の原因であつた。

ツロイツァ修道院で、ロストオフ家の人々は、行旅に於ける最初の滞留を爲た。

その修道院の旅舎の中で三つの大きい部屋が、ロストオフ家に向つて當てられ、そして、そのうちの一つを伯爵アンドレーエーが占領した。その負傷者は、此の時には、最早餘程快くなつて居た。ナタアシヤは、彼の傍に附いて居た。その次の室では、伯爵と伯爵夫人が、自分の古い知人であり且保護者である所のロストオフ家の人々を訪ねて來た院長と、謹んで、談話を爲て居た。ソオニヤは、その人々と一緒に坐つて居ながら、伯爵アンドレーエーとナタアシヤと何様な談話を爲し居るだらうかと、好奇心を燃え立たして居た。ソオニヤは、戸越しに、二人の聲の音ばかりを、聞いた。伯爵アンドレーエーの部屋の戸が開いた。ナタアシヤが、昂奮した顔で出て來て、起つてナタアシヤを迎へた修道士には氣が付かずに、廣い袖をば右の手からたくし上げて、ソオニヤの所へ行つて、その腕を捉へた。

「ナタアシヤ、何を爲るのですね?。此所へおいでなさい」と、伯爵夫人が云つた。

ナタアシヤは祝福を受にと行つた、そして、院長は、神と彼の聖に助を求めると、ナタアシヤに教へた。院長が去つて了まふと、直、ナタアシヤは、自分の朋友の腕を撃つて、一緒に、人の居無い第三の部屋へ



と行つた。

「ソオニヤ、左様よ、彼の人は助かるわよ」と、ナタアシヤは云つた。「ソオニヤ、私眞個に嬉しいつたら無いのよ、でも、又眞個に情け無い氣も爲るのよ。私の大好のソオニヤ、何も彼も此れ迄と寸毫も變ら無いわ。彼の人が助かつて呉れさへすれば。彼の人は何うしたつても……何故だと云へば……何……故だと……」で、ナタアシヤは、泣きだした。

「え、左様ですとも、何うしたつても必定快くなると思つてたわ。難有いわねえ」と、ソオニヤが云つた。「彼の人は助かるわ」

ソオニヤは、その朋友の悲痛や恐怖の爲めに、それから、自分だけの考へ（尤も、それは誰にも話したことは無かつたが）の爲めに、その朋友と同等な位に昂奮して居た。歎息ながら、ソオニヤはナタアシヤに接吻して慰さめた。

「彼の人助かつて呉れさへすれば」と、ソオニヤは思つた。泣き、少許話し、それから、涙を拭いてから、二人の朋友同士は、公爵アンドレーの部室の戸の方へ行つた。ナタアシヤは竊然と戸を開けて、内を窺いた。ソオニヤは、半開きの戸の所で、ナタアシヤの側に立つて居た。

公爵アンドレーは、枕三つで、頭の方を高く擧げられて、臥て居た。彼の蒼い顔は穏和であり、眼は閉ぢて居り、そして、二人は、彼の穩かな、調つた呼吸を見ることができた。

「あ、ナタアシヤ」と、ソオニヤが、不意に、殆ど金切り聲を出さ無いばかりで、云つて、従妹の腕を掴み、そして、戸の所から離れた。

「何なの。何う爲たのよ」と、ナタアシヤが尋いた。

「同なじよ、同なじよ、ね……」と、ソオニヤは、白い顔と震へた唇とで、云つた。

ナタアシヤは、靜に戸を閉めて、ソオニヤと一緒に窓の所へ行つた、が、未だソオニヤが何のことを云つて居たのか、解から無かつた。

「貴女覺えて居て？」と、ソオニヤは、怖た嚴肅な顔で、云つて、「貴女私が貴女の爲めに鏡を見てあけた時のことを覺えて居て……オツラアドノエで、降誕祭の時よ……私が何様な物を見たんだか、貴女覺えて？」

「左様だわ、左様だわ」と、ナタアシヤは、云つて、眼を大きく見張り、ソオニヤが、その時には、公爵アンドレーが臥て居るのを見たとか何と云つたことのあるのを、臆然憶ひ起した。

「貴女覺えて？」と、ソオニヤは言語を續けた。「私彼の時彼の人を見たでせう、そして、貴女たち衆皆に、貴女とゾウニヤシヤに、その時そのことを話したでせう。私彼の人を寢臺に臥てるのを見たのよ」と、ソオニヤは云つて、詳細毎に、指を擧げて、手眞似を爲て、「彼の人は、眼を瞑つてたのよ、桃色の蒲團を被て居たのよ、それから、手を拱んで居たわ」と、ソオニヤは、今の先刻見たばかりの詳細事を話して居ながら、それが、往時の鏡の時に見たものだと確信して、云つた。

その當時には、ソオニヤは何にも見無かつたのだが、唯だ、自分の頭へ出て來放題な事を云つたのであつた。が、その當時自分が虚構へて云つた事が、今、ソオニヤには全く眞實の記憶のやうに思はれたのだ。ソオニヤは、公爵アンドレーがソオニヤの方を見返つて、微笑んだ、とか、それから、何か赤い物を被て居たとか、云つたことを、憶ひ起したのみならず、尙又、自分がその當時、公爵アンドレーが桃色の——左様、確に桃色の——蒲團を被て居たことや、眼を閉つて居たことを、見もし、云ひもしたのだと、固く信じ

て居たのであつた。

「左様だわ、左様だわ、桃色だつたわねえ」と、ナタアシヤが云つたが、ナタアシヤまでも、ソオニヤが桃色の臥褥であつたと云つたのを憶ひ起したやうな気がしだして、その詳點に於て、豫言の最も驚くべき、神祕な點を見とめたのであつた。

「だけでも、それは何ういふことになるんだらうねえ？」と、ナタアシヤは、夢みるやうに云つた。

「あゝ、私には分ら無くつてよ、でも、眞個に不思議だわねえ」と、ソオニヤは、云つて、自分の頭を掴んだ。

二三分経つと、公爵アンドレーエが、鈴を鳴らした、で、ナタアシヤが入つて行つた、が、ソオニヤの方は、滅多に経験したことのないやうな昂奮と感情の状態、窓の所に残つて居て、その時起つて居た事件の如何にも不思議であることを、考へ込んで居た。

その日には、軍へ手紙を出す機会があつた、で、伯爵夫人は自分の息子への手紙を書いた。

「ソオニヤ」と、姪のソオニヤが傍を通つて居るといふと、伯爵夫人は、手紙から顔を擧げて、云つた。

「ソオニヤ、ニコオレンカに手紙をやつてお呉れ無いか？」と、伯爵夫人は、和かな、震へる聲で云つた、で、眼鏡の上からソオニヤを見た疲れた眼の裡で、ソオニヤは、伯爵夫人がさう云つた言辭の中へ籠めて居た總ての意味を讀んだ。伯爵夫人のその眼には懇願や、拒絶を怖るゝ念や、頼まなければならなくなつたのに恥ぢ入つた様子、若しソオニヤの方で拒絶すれば何時までも宥さ無い憎惡を直ぐ抱くといふ心持が、表はれて居た。

ソオニヤは、伯爵夫人の傍へ行つて、跪ついて、伯爵夫人の手に接吻した。

「私書きますわ、母上様」と、ソオニヤは云つた。

ソオニヤは、その日有つた事件全體の爲めに、殊に、自分のホンの今の先刻見た自分の豫覺の神祕な實現の爲めに、和けられ、昂奮させられ、感動させられて居た。ナタアシヤと公爵アンドレーエとの婚約が復活することになれば、ニコライは公爵嬢マリヤと結婚することができ無くなるといふことを知つた今では、ソオニヤは自分がやり慣れて居り、又さう爲て送るのが好きであつたその犠牲的精神が又起つて來たのを感じて、甚く嬉しく思つた。で、眼に涙を持ち、心には、寛仁な行爲を爲るのだといふ嬉しい感を持つて、ソオニヤは、坐つて、幾度も天鷲絨のやうな黒い眼を曇らせる涙に妨げられながら、哀れな手紙を書いた——この手紙を受け取ると、ニコライは彼様いふ風な強い印象を受けたのであつた。

(九)

ピエールが拘引れて行つた牢屋では、其所を管掌かつて居た將校や兵卒等が、彼に、敵意を持つと同時に尊敬を以つて彼を扱つた。さういふ者どものピエールに對する態度は、知らずくのうち、ピエールが何ういふ人間であらうか——餘程高い身分の者かも知れぬ——といふ疑念、並にホンの今の先刻彼が自分等に對して爲た格闘の爲めに生じた敵意をば、表はして居た。

が、次の日の朝になつて、番兵が交代するといふと、ピエールは、彼の新たな番兵には——將校等にも、兵卒等にも——自分は、最早、自分を捕虜に爲た人々に取つてのやうな同なじ興味、目的物で無かつたことを感じた。で、實際、次の日、捕虜の監視を受けつた哨兵等は、農夫の衣服を着たその大きい、肥つた男に於

て、掠奪して居た兵卒や、巡視兵と、彼れ程烈しく格闘し、それから、小兒を救ふことに就いて彼様な嚴肅な言辭を云つた強力な男を寸毫も認め無かつた、彼等は、彼に於て、何か知らの理由で上官の命令で拘束されて居る露西亞人の捕虜の第十七號を認めたのみであつた。

ピエールの様子に何か特殊な所があつたとすれば、それは、彼が何か考へ込んで居る平氣な態や、實に立派な佛蘭西語で話を爲て佛蘭西人等を驚かしたのみであつたのだ。それに拘はらず、ピエールが占めて居た部屋は一人の將校が使ふことに爲つたので、彼は、その日は、捉まへられて居た他の嫌疑者等と一緒に所へ入れられた。

ピエールと一緒に拘束されて居た露西亞人どもは、悉皆、極く下等な人間ばかりであつた。で、彼等は、悉皆、ピエールが紳士であることを識別け、尙その上に彼が佛蘭西語を使ふのであつたが爲めに、一層彼には構ひ付け無かつた。ピエールは、悲しさうに、自分に對する彼等の嘲弄を、聞いて居た。

その次の晩になると、ピエールは、總ての囚人が（自分もその中に入つて居るのだらうが）放火罪の審問を受けるのだといふことを、聞き知つた。その次の日に、ピエールは、白い口鬚の將官と、二人の大佐と、肩に肩巾を附けた他の佛蘭西人とが、坐つて居た家へ、他の囚人等と一緒に伴れて行かれた、囚人の審問に何時も用ひられる、そして、有らゆる人間的な弱情を排けて了まふものだと思像されて居る彼の特殊な正確と定限とで、その將官等は、ピエールや、他の者どもに、問を掛け、何ういふ者で彼があるのか、何處に居たのか、何ういふ目的であつたのか、など尋いた。

さういふ問は、實際、裁判所の取り調べの有ゆる問と同一やうに、生きた事實の本質を閑却し、且、その本質が発見される有ゆる可能を排除して置いて、唯だ、審問係の官吏等が、審問の終局——即ち、有罪の

判決——の方へ囚人を導いて行くことの能ざるやうに囚人の返答をして流れしめやうとする溝を巧く囚人の方へ向けることのみを、目的と爲たものであつた。

囚人が、この目的の方へ向は無いやうな事を何か知ら云ひ始めるや否や、審問係の者どもは、溝を止めて、水を勝手な方へ流れさして了まふのだ。

その上に、ピエールは、總ての裁判に於て被告が何時でも感じるやうに、何故さういふ問がかけられるのか、何うしても不思議で堪ら無かつた。彼は、彼等の返答の溝を導いて行くこの手妻が用ひられるのは、唯だ裁判官等の情とか、禮儀の爲めとか、いふのに過ぎ無いのだと感じた。彼は、自分がそれ等の人々の手の中にあることや、自分は、唯だ、自分よりも強い力の爲めに其所へ伴れて來られたのであることや、唯だその強い力が、彼等の間に是非答へさせるやうに爲る權利をば、彼等に與へたのであることや、それから、その手續の全目的が彼を有罪と判決するのにあるのであつたことを、知つて居た。

で、それ故に、彼等が強力を持つて居て、そして、彼等が彼を有罪と判決し度いといふのである以上、其様な網のやうな疑問や、審問の必要は少しも無いやうに思はれたのであつた。明白に、總ての尋問が、彼の有罪の判決に達するやうに爲つて居た。

捉まへられた時に、彼は何を爲て居たのかといふ尋問に對しては、ピエールは、悲壯な威嚴を以つて、彼が「焔の裡から救つた」小兒を、兩親の所へ抱いて戻つて來る所であつたのだ、と答へた。

何故、彼は兵卒等と格闘して居たのか？ ピエールは、女を保護する爲めであつたことや、凌辱された女を保護するのは、有ゆる人間の義務だといふこと、などを答へた……

彼は言辭を遮ぎられた、其様なことは無關係なことだといふのであつた。

彼が焼けて居る家の廣庭に居たことは、五六人の證人が有つて明白であるのだが、彼は一體何ういふ目的で其様な所へ行つて居たのか？

ビエールは、莫斯科の状態を見やうと思つて出て行つたのだと答へた。

彼は再遮ぎられた。彼は、何處へ行く所であつたか、尋かれたのでは無くして、何ういふ目的で火事の附近に居たのかと、尋かれたのだと、いふのであつた。

彼は何ういふ者なのか？。彼が、答へるのは嫌だと云つた最初の問が、繰り返された。ビエールは、再、それには答へられ無いと、答へた。

「それを書き止める、それは不可。何うも不可ぜ」と、白い頬髯のある、赤い顔を赤くさせた將官は、荒らかにビエールに云つた。

四日目は、火事がズヴォフスキー城壁で起つた。

ビエールは、他の十三人と共に、クルイムスキー・プロツツ——クリミヤ渡頭——の傍の商人の家の馬車庫へ移された。街を通つて行くうち、ビエールは、烟の爲めに殆ど呼吸が能き無かつた、さういふ烟は、莫斯科の市全體の上に懸つて居るやうに見えた。火事は四方八方で見えた。ビエールは、その時は、未だ、莫斯科の焼ける事の裡に含まれ居る意味を掴み得無かつた、彼は、火事をば、慄然として、凝視めた。

クリミヤ渡頭の家の後の馬車庫で、ビエールは今四日送つた、そして、その四日のうちに、彼は、佛蘭西の兵卒等の談話からして、此所に拘禁されて居る囚人等は、悉皆、元帥の手で自分等の運命が決められるのを、待つて居ることを、聞き知つた。

何といふ元帥なのか、ビエールは兵卒からは確め得られ無かつた。兵卒等に取つては、この元帥は、確に

権力の最高の、そして、何と無く神祕な、象徴であるらしかつた。

囚人等が第二の審問に向つて伴れ出された九月八日まで、さういふ最初の時分の日は、ビエールに取つては、非常に苦しいものであつた。

( 十 )

九月の八日に、囚人等の居た馬車庫へ、番兵等が言語を掛ける時の非常に恭やしい様子から判断すると、何うしても非常に高い位地の人らしい一人の將校が来た。參謀部の誰かであつたらしいこの將校は、手に覺書を携つて居て、露西亞人全體の名を呼んだが、ビエールには「名を白状せざる者」といふ稱號を與へた。で、囚人全體を、だらけた無頓着な眼付でジロリと見てから、その將校は、番兵の將校に向つて、彼等を元帥の前へ引き出す前に、彼等にチャンと衣服を着せ、秩序を整へるやうにしると、命令した。

一時間経ぬうちに、兵卒の一分隊が来た、そして、ビエールは他の十三人と一緒に處女野へ伴れて行かれた。

それは、雨の後の晴れ渡つた好い天氣の日であつた。そして、空氣が特別に澄み渡つて居た。烟は、ビエールがズボオフスキー城壁から引き出された日のやうに、町の上へ低く被さつては居無かつた、烟は幾個もの柱に爲つて澄んだ空へと立ち登つて居た。烟は何處にも見え無かつた、が、烟の柱は四方八方で立ち登つて居た、そして、莫斯科全體、ビエールが見得た全體が、一帯の大火の跡であつた。八方で、彼は、野原になつた場所を見た、煖爐や烟突がその中に残つて立つて居、それから、時々、石造の家の黒く焦けた壁を見掛けた。

ピエールは火事場を凝視めた、が、自分が善く知つて居た町の部分をも識別することができ無かつた。彼方此方に、火の付か無かつた寺院が見えた。内廊は、全部残つて、それを幾個もの塔や、イヴァン・ヴェリイキを以つて、遠方に白く聳えて居た。

極く近所に、新聖母の修道院が、キラ／＼と輝いて居て、勤行の鐘が其所から陽気に鳴り渡つて居た。さういふ鐘の音は、その日が日曜で、聖母の降誕祭であつたことを、ピエールに憶ひ出させた。が、この祭日を守る者は誰も居無かつたやうに思はれた、何處にも彼處にも、彼は、火事が造つた廢趾を見た、ピエール等が行會つた露西亞人といふのは、唯だ二三人の襤褸を着た、怖けた顔付の者ばかりで、さういふ者どもは、佛蘭西人を見ると、隠れてしまふのであつた。

露西亞人の巢が、頽廢して、破壊されたことは明瞭であつた、が、古い露西亞の生活の秩序が斯の如く殲滅されたと共に、佛蘭西人がこの頽廢した巢の上へ、彼等自身の全く異つた併し強い生活の秩序を建て上げたことを、ピエールは我知らず覺つた。彼は、これをば、自分や他の囚人等を護送して居る大膽に快活に進んで行く兵卒等の整々とした隊列を見ると共に、感じた。彼は、これをば、自分等が途中で行き逢つた、兵卒の馱して居る二頭馬車に乗つた誰か地位の高い佛蘭西の將校を見ると共に感じた。彼は、それをば、野の左方から漂つて来る聯隊の音楽を聞くと共に、感じた。それから、彼は、それをば、佛蘭西の將校が、その朝、囚人等の名を點呼した時に、讀んだ覺書から、感じ、且それをば殊に強く明白に認めたのだ。

ピエールは、一隊の兵卒等に引かれて、或る場所へ導かれ、其所から又、異つた者どもの十二人程と共に、他の場所へ伴れて行かれた。ピエールには、自分のことなどは最早忘れられて、他の人々とゴツチャになつて了まつたのだらうと、思はれたのであつた。所が、何うして、審問の時の彼の返答が、「名を白狀せざる者」

といふ名の形に於て、返つて来るのであつた。

で、この名——それがピエールの心に恐怖の念を満たしたのであつたが——の下に、護送者等は、ピエールや、彼と一緒に居た囚人等が確に罪人であつて、その罪に相當した場所へ引かれて行きつゝあるのだといふ確信の躊躇の無い様子を、自分等の顔に現然と表はして、ピエールをば、何處か知らへ引いて行くのであつた。ピエール自身も、自分が、少しの故障も無く運轉して居る機械の輪の下に落ちた極く小さい物の斷片であることを、感じた、尤も、それを明瞭に理解して居たのでは無かつたけれども。

ピエールは、他の囚人等と一緒に、修道院から遠く無い、處女野の右側へと、導びかれ、廣々とした庭園のある大きい白い家へと、伴れ込まれた。それは、公爵シチエルバアトフの家であつた。そして、ピエールは、往時には、その主人に逢ふ爲めに幾度も内部へ入つたことのある家であつたのだ。今は、兵卒等の談話から察すると、それは、元帥、エクスウル公の爲めに占領されて居るのであつた。

囚人等は、入口へと伴れて行かれた、そして、一度に一人宛内部へ伴れて行かれた。ピエールは、六人目であつた。硝子屋根の廊下、玄關の室、廣室と、悉皆ピエールには見慣れたものであつた場所を通つて、ピエールは、戸口に副官の立つて居る長い天井の低い書齋へと伴れ込まれた。

ダヴウは、鼻の先へ眼鏡を掛けて、部室の奥の卓子の所に坐つて居た。ピエールは彼の直ぐ傍へ行つた。ダヴウは、眼を舉げずに、自分の前に在る書類の裡で何か探して居ることに掛つて居るらしい態であつた。眼を舉げずに、彼は、低い聲で、「お前は何といふ者か？」と、尋いた。

ピエールは、一語も口へ出すことができ無かつたので、黙まり込んで居た。ピエールに取つては、ダヴウは唯だ佛蘭西の將軍といふ切りでは無かつた、ピエールに取つては、ダヴウは殘酷なので名高い男であつた。

のだ。嚴酷な教師のやうに、一寸の間堪へて答を待つことを承諾して居るやうに見えたダヴウの冷々とした顔を見るといふと、ピエールは、躊躇の一秒々々が自分の生命に懸ることだと感じた。が、ピエールは何を云つて宜いか分ら無かつた、最初の審問の時に云つたと同なじ事を云ふのは、彼の敢てし得る所では無かつた、さればと云つて、自分の名と地位とを知らせるのは、危険であり、且恥辱であつた。

ピエールは黙まり込んで居た。が、ピエールが未だ何とも決定する際の無いうちに、ダヴウは頭を擧げ、額へ眼鏡を突き揚げ、眼を見張つて、凝乎とピエールを見た。

「私はこの男を知つて居る」と、彼は、確にピエールを嚇す積りらしく、冷酷な、緩然した調子で云つた。ピエールの背部を走り降つて居た悪寒が、ピエールの頭の萬力でギョツと擱んだやうな気がした。

「將軍、貴下は私を御存じな譯はありません、私は貴下を見たことが無いのですから」

「これは露西亞の間諜だ」と、ダヴウは、ピエールのそれまでは気が付か無かつた部屋に居た今一人の將官に言語を掛けて、云つた。で、ダヴウは傍を向いた。自分の聲に意外な震へを持つて、ピエールは、不意に速語になつて、物を云ひ始めた。

「いえ、殿下」と、ピエールは、突然、ダヴウが公であつたことを憶ひ出して、云つて、「貴下が私を御存じな筈はありません。私は民兵の將校です、私は莫斯科を去ら無かつたんです」

「お前の名は？」と、ダヴウが、繰り返した。

「ベズウホフ」

「お前の云ふ事が虚言で無いといふ何か證據があるかね？」

「殿下」と、ピエールは、不満の聲では無く、懇願の聲で、叫んだ。

ダヴウは眼を擧げて、凝乎とピエールを見た。五六秒間二人は相互に眼を見合せて居た、そして、その見たことが、ピエールの生命を救つた。戦争や裁判の有らゆる事情を離れたその一瞥に於て、人間的關係がその二人の人の間に起つて來た。彼等は兩方とも、その一刹那に於て、漠然と、さまざまの物の非常な數を覺つた、そして、自分等は兩方とも人間の子であること、自分等は相互に同胞であることを、知つたのだ。

ダヴウが、彼の覺書——其所には、人間の生命や行爲が數でのみ記してあつた——から、頭を擧げた時の最初の一瞥では、ピエールは單に一個の事件に過ぎ無かつた、で、ダヴウは、自分の良心に於て、悪い事を爲たといふ感を更に持たずに、ピエールを銃殺させ得たのであつた、が、今は、彼に於て、一人の人間を認めただのだ。ダヴウは寸時考へ込んだ。

「お前の云ふ事が眞實だといふことを、お前は何う證明するかね」と、ダヴウは冷然と云つた。

ピエールはラムバルのことを考へた、で、彼の名と、聯隊と、彼が居るだらうと思ふ街や家を、擧げた。

「お前はお前が云ふ通りの者では無い」と、ダヴウは再云つた。

震へる、斷續の聲で、ピエールは、自分の證據が眞實であることの證明を提出しやうと爲始めた。が、その途端に、一人の副官が入つて來て、ダヴウに何か云つた。

ダヴウは、その副官が齎した報知に對して、嬉しさうな顔を爲た、そして、制服の釦を掛け始めた。彼は、ピエールのことなどは全然忘れてしまつたらしかつた。

副官が、囚人のことをダヴウに注意するといふと、彼は、顔を擧めて、ピエールの方へ向けて頷いて、ピエールを伴れて行けと、人々に云ひ付けた。が、何處へ伴れて行かれるのか——ピエールには分ら無かつた。

元の庫へ戻されるのか、それとも、彼の同行者が、自分等が處女野を通つて居る時に、彼に指し示した自分等を處刑する爲めに設けられた場所へ引いて行かれるのか、孰だか、少しも分ら無かつた。

彼は頭を振り向けた、と、副官が、何か問を繰り返して居るのを見た。  
「左様だ、勿論」と、ダヴウが云つた。が、その「左様だ」が、何ういふ意味であつたのか、ピエールには分ら無かつた。

ピエールは、何ういふ風に、若くは、何處へ、自分が行つたか、何れ程の間歩いて居たのか、分ら無かつた。全然惘然として了まつた何が何だか分ら無くなつた有様で、自分の周囲の何物にも氣が付かずに、彼は、他の衆皆が止るまで、衆皆と一緒に脚を動かして居たのみで、衆皆が止まると共に、自分も止つたのであつた。

その間始終、ピエールの頭の裡には唯だ一つの考案があつた。それは、自分を死刑に宣告して居るのは、實際、誰、何ういふ人なのか？、といふ疑問であつたのだ。それは、最初の審問の時に彼を調べた人々では無い、彼等のうちには、一人だつても、左様爲ることを欲した者も無ければ、左様爲得る者も無かつたらしかつた。それは、彼様な人間的な風でピエールを見たダヴウでは無い。今一分経てば、ダヴウは、自分等が間違つたことを爲て居ることを、覺つたに違ひ無かつた。が、その途端に其所へ入つて來た副官が、さうなすることを妨げたのだ。所で、その副官も、確に、惡い了簡では無かつた、彼は、入つて來無かつたかも知れ無かつたのだ。では、畢竟、それは、誰であつたのか、誰が、ピエールを罰し、彼を殺し、彼の生命を奪りつたのか——彼の、即ち、ピエールの生命をば、彼の總ての記憶、努力、希望、考案と共に、奪らうと爲て居るのは、誰であつたか？。誰がさういふことを爲つゝあつたか？。

で、ピエールは、それは誰の所業でも無いのだと感じた。

さういふ事を爲るものは、一個の規律であり、さまざまな事情の連結であつたのだ。  
何等かの規律が、彼、即ち、ピエールを殺し、彼の生命を奪ひ、彼の持つて居る總ての物を奪ひ、彼を全く滅却しやうと爲て居たのだ。

(十一)

囚人等は、公爵シチエルバアトフの家から、處女野を横断つて、眞直に坂路を下り、聖母修道院の左方へと、伴れて行かれ、そして、柱の立つて居る菜園へと伴れ込まれた。大きい穴が、その柱の傍に掘つてあつた、そして、新しく掘り上られた土が、その傍に積み重ねてあつた。人民の大きい群集が、穴や柱の周圍に半圓を成して居た。群集は、少しの数の露西亞人と、非番のナポレオンの兵士の多数とで、成り立つて居た、彼等は、獨逸人、伊太利人及び、種々な制服の佛蘭西人であつた。柱の右方と左方に、水色の制服の、赤い肩章の、ヘッス靴を穿き、シヤコ帽を冠つた佛蘭西の兵卒の數列が立つて居た。

囚人等は、名簿（ピエールは六番目であつた）に従つて、一定の順で立たせられて、柱へと伴れて行かれた。五つ六つの太鼓が、不意に、彼等の兩側で鼓たれ始めた、と、ピエールは、自分の魂の一部が、その音の爲めに、扭斷り取られたやうな氣がした。彼は、考慮や、回想の力を全く失つて了まつた、彼は、唯だ、見たり、聞いたりし得るのみであつた。そして、彼の心には、唯だ一つの願望が残つた、それは、爲さるべき恐しい事が、能きだけ早く爲されて了まふやうにといふ願望であつた。ピエールは、自分の同行者たちを見返つた、そして、彼等をツクム見た。

端に居た二人は、髪を剃られた囚徒であつた、一人は、背が高く、瘡せて居た、今一人は、赤黒い、多毛の、筋骨の逞しい、平たい鼻の男であつた。三番目の者は、家内の隸僕で、四十五歳の男で、半白の髪で、圓々と肥つた體容であつた、四番目は、農夫で、多量な亞麻色の髯の、黒眼の、極く奇麗な男であつた。五番目は、工場職工で、寝衣を着た、瘡せた、顔の青い、十八位の若者であつた。ピエールは、彼等を何ういふ風に銃撃するか、一人宛にしようか、二人宛にしようかと佛蘭西人等が相談して居るのを聞いた。

「二人宛」と、主任將校が冷々として答へた。

兵卒の隊列の間に動があつた、誰もが急いで居るのは、明瞭であつた、が、その急ぎやうは、人々が誰にでも解し得られる或る爲事を爲つて了まはうとする時のやうなものでは無く、人々が、心持の悪い、不可解なものではあるが、何うしても爲ることを避け得られ無い何事かを爲て了まはうと急いで居る時の急ぎ方であつたのだ。

飾襟を附けた佛蘭西の將校が、囚人の列の右側へ來た、そして、露西亞語及び佛蘭西語で、宣告文を讀んだ。

それから、佛蘭西の兵卒の二人宛の二組が、將校の命令で囚人等の傍へ行つた、そして、先頭に立つて居た二人の囚徒を捉まへた。囚徒等は、柱へと行つた、で、止まつた、そして、袋が持つて來られつゝある間、彼等は、追ひ詰められた野獸が近寄つて行く獵人を見るやうに、四邊を黙まつて見廻して居た。そのうちの一人は、始終十字を切つて居たが、今一人は、自分の背部を搔いて、微笑を粧つた風に唇を動して居た。兵卒等は急いだ指付で、囚徒等の眼に眼隠を爲て、袋を頭から被せ、そして、柱へ彼等を縛り付けた。

十二人の狙撃兵が、銃を持つて、立派な、揃つた足踏で、隊列から歩み出て、柱から八歩の所で止まつた。

ピエールは、それからの事を見無いやうにと、傍を向いた。不意に、ドン、バラ／＼といふ音がした、それは、ピエールには、雷の最も恐ろしい音のやうな気がした、で、彼は見返つた。烟の雲があつた、そして、佛蘭西の兵卒等が、蒼い顔で、震へる手で、穴の傍に立つて、その中で何か爲て居た。

次の二人が引かれて行つた。その二人も、同なじやうに、同なじ眼で、黙まつて、無益に、唯だ彼等の眼だけで保護を請ひ、それから、明白に、それからの事を理解も能きず、信じも能き無い態で、誰もを見た。彼等は、自分等のみが、自分等の生命が自分等に取つて何ういふものであつたのか知つて居たのだから、それを信ずることが能き無かつた、だから、彼等は、その生命が自分等から奪はれ得るものとは、了解することも能き無ければ、信ずることも能き無かつたのだ。

ピエールは見無いやうに爲た、そして、再傍を向いた、が、再、何か恐ろしい音が、彼の聴覺を驚かした、と、その音と共に、ピエールは、烟と、血と、再穴の所で何か爲て、震へる手で相互に邪魔になり合つて居る佛蘭西人等の蒼い、怖れた顔とを、見た。

ピエールは、苦しい息を爲て、「これは何事だらう？」と、尋くかのやうに、四邊を見廻した。

同なじ疑問が、ピエールの眼に出會つた總ての眼の裡に書かれて居た。露西亞人の孰の顔の面でも、佛蘭西の兵卒等や將校等の孰の顔の面でも残らず、ピエールは、彼が彼自身の心の裡で感じたのと同じ驚慌、戦慄、及び、葛藤を、讀んだ。

「が、其所で、實際彼様な事を爲て居るのは誰なのか？ 彼等は衆皆俺と同なじに苦みを受けて居るんぢ



やア無いか。それは誰だ？。誰なのか？と、いふ考慮が、一秒の間、ビエールの心の裡を閃めき通つた。

「第八十六の狙撃兵、前へ」と、誰かが怒號つた。

ビエールの傍に立つて居た、五番目の囚人が、前へ——一人——引き出された。

ビエールは、自分が助かつたことが、解ら無かつた、彼及び殘餘の衆皆は、唯だ處刑の場に居合す爲めにのみ、伴れて來られたのであることが、解ら無かつた、だん／＼募つて行く恐怖で、喜悅の感も、安堵の感も更に無しで、彼は、爲されつゝあつた事件を見詰めて居た。

五番目は、緩い寢衣を着た工場職工の若者であつた。兵卒等が彼に觸るや否や、彼は慄へ上つて、跳び退いて、ビエールにかじり付いた（ビエールは、ガタ／＼と身を慄はして、彼を振り放した）。

工場職工の若者は歩け無かつた。彼は脇窪を支へられて、引き摺られて行つた、彼は、始終金切り聲で何か叫んで居た、柱へ伴れて行かれるといふと、彼は不意に靜になつた。彼は、不意に何事かを覺つたやうであつた。彼は、叫んだとて何の益にも立たないのだと覺つたのか、それとも、人々に取つて彼を殺すことは不可能なのだと覺つたのか、それは孰だか分ら無かつたが、彼は唯だ柱の所に立つて、他の者等のやうに縛られるのを待ちながら、銃火の下の野獸のやうに、ギラ／＼する眼で、四邊を見廻して居た。

ビエールは、傍を向くことも能き無ければ、眼を閉ぐことも能き無かつた。彼、及び、彼と共に群集全體が感じた好奇心や、感情が、この五番目の虐殺に於て、その絶頂に達した。外の者等と同なじやうに、この五人目の者も、落ちて居るやうであつた、彼は、寢衣を自分の周圍に纏ひ付け、そして、裸の隻足を今一つの方で搔いて居た。

人々が彼の眼の上を縛るといふと、彼は一人で、結び目を直した、それは、彼の頭の後部を詰めたのであ

つた、それから、血だらけな柱へ押し付けられるといふと、彼は、後方へ蹠躑けた、そして、その地位では具合が悪かつたと見えて、立ち具合を變へて、足を均齊に下して、靜に後へ凭りかゝつた。

ビエールは、一度も、彼から眼を離さ無かつた、そして、彼が爲た極く微少な舉作をも見遁さ無かつた。

號令が響いて、その後で、八つの銃の音が爲たに違ひ無いのだ、が、ビエールは、その後になつて、何れ程一心にそれを憶ひ起さうと骨折つて見ても、銃の音を少しでも聞いた聲が無いのであつた。彼は、唯だ、工場職工が、不意に、繩へ凭れ掛るのを見た、血が二ヶ所で滲みだすのを見た、それから、吊ら下がる身體の重量で繩が自然に緩んで、工場職工が、坐ると共に、頭が異様に垂れ、脚が身體の下へ曲つたのを見たのであつた。

ビエールは、柱へと駈け寄つた。誰も彼を止める者が無かつた。幾人かの人々が、蒼い、怖けた顔で、工場職工の周圍で何か爲て居た。一人の年取つた、頬鬚のある佛蘭西人が、始終下顎をピク／＼させながら、繩を解いて居た。屍骸はグダリと下へ沈んだ。兵卒等は、拙態な急ぎ方で、柱の所からそれを引き摺つて行つて穴へ投げ込んだ。

彼等は、誰も彼も、全く疑無く、自分等が、罪人であつて、自分等の罪の證據を急いで隠さなければならぬのであることを、瞭乎と知つて居たのだ。

ビエールは、穴をヒヨイと見た、と、工場職工が膝の傍へ頭を持つて行き、一方の肩を今一つの肩より高くして、其所に倒れて居るのが、見えた。で、その肩が、痙攣的に、調子よく、上がり下がりして居た。が、地の幾層もが最早その身體の上へ落ちつゝあるのであつた。

兵卒等の一人が、憤怒と、絶望と、苦痛との聲で、傍へ退くとビエールに叫んだ。が、ビエールには、そ

れが解ら無かつた、で、依然彼は立つて居た。が、誰も彼を追ひ退け無かつた。穴が全然埋つて了まふといふと、號令が聞えた。ピエールは、彼の居場所へ作れ戻された、そして、柱の両側に列を成して立つて居た佛蘭西の兵卒等は、方向を變へた、そして、柱を越して揃つた歩調で行進し始めた。

圈の真中に立つて居た二十四人の狙撃兵は、射撃無かつた銃を持つて、自分等の隊が傍を通ると、それぞれの居場所へと駆け歸つた。

ピエールは、二人宛圈から駆け出て居たさういふ狙撃兵等を、今は、憤然とした眼で凝視めて居た。彼等は、一人の外は、残らずそれらの隊へ合して了まつた。死んだやうな青い顔色をした一人の若い兵卒が、依然、彼が射撃した地点で穴に向つて立つて居たが、彼の帽子は頭から後方へ落さうになり、彼の導火管は地面へと落ちかゝつて居た。彼は、醉漢のやうに蹣跚けて、前方へ二三歩出、それから、倒れ無いやうにと、二三歩後方へ退つた。年取つた下士官が、隊列から駆け出た、そして、若い兵卒を肩の所で捉まへて、隊へと引摺り込んだ、佛蘭西人等や、露西亞人等の群集は解散し始めた。衆皆、眼を下けて、黙まつて歩いた。

「これで、放火の懲しめになるぜ」と、佛蘭西人の間の誰かが云つた。ピエールは、さう云つた者を見返つた、そして、それは、爲された事件に對して何とか自分を慰めやうと爲て居るのだが、それが能き無いで居る兵卒であることを、見た。その言辭を云つて了まふと、彼は手を振つて前方へと行つた。

(十二)

處刑の後で、ピエールは、他の囚人等から離されて、小さい、掠奪された、汚ない寺院に一人で置いて置

かれた。

晩方になると、巡視隊の軍曹が、二人の兵卒を率れて、寺院へ来て、ピエールに、彼は宥るされたので、此度は、俘虜の兵舎へ行くのだと、告げ知らせた。

自分にまで云はれた事柄が、一言も解らずに、ピエールは起ち上つて、兵卒等と一緒に走つた。

彼は、焦げた板だの、梁だの、窄板だの、野の上の部分へ、急造へに建て上げた幾個かの小舎のある所へと、伴れて行かれ、そのうちのひとつへと伴れ込まれた。種々の種類の二十人程の人々がピエールの周圍に集まつて来た。彼は、さういふ人々が何ういふ者であつたか、何故彼等が其所に居たのか、彼等は彼に向つて何を爲て貰ひ度いといふのであつたのか、其様な事は更に分らずに、彼等を見詰めた。彼は、彼等が自分に向つて云つた言辭を聞いた、が、彼の心は、さういふ言辭を少しも演繹もし無ければ、それを解釋しも爲無かつた。彼は、その意味が少しも解ら無かつたのだ。彼は、又、自分に向つて尋かれた問に答へた。が、誰が自分の言辭を聞いて居たのか、何う彼等が自分の言辭を解するだらうか、などいふことは、更に分ら無かつた。彼は、さまざまの顔や姿を見詰めた。と、それが彼には悉皆同なじやうに無意味に見えたのであつた。

ピエールが、それを爲度く無かつた人々が行つたその恐ろしい虐殺を見たその刹那から、彼の心の裡の發條——それに依つて有らゆる物を締め合はされ、そして、生命らしい物が與られて居た發條——が、扭ぢ切られて了まつた、かのやうな氣がした。そして、何も彼も、悉皆、滅茶滅茶になつて、意味の無い廢物の積層になつて了まつたやうに思はれたのだ。彼には、さう瞭乎とは氣が付か無かつただけでも、その恐ろしい虐殺は、彼の心に於て、宇宙の恵み深き秩序に對する信仰、人間の心に對する信仰、自分自身の心に對する

信仰、及び神に對する信仰を、撲滅して了まつたのだ。

かういふ心の有様は、ピエールは前にも経験したことはあつた、が、今のやうなこれ程の烈しさの一度も無かつた。過去に於てかういふ疑惑に襲はれた時には、それは、彼自身の過失から起つたものであつたのだ。で、ピエールは、心の底では、さういふ時は、その絶望、さういふ疑念から救はるゝ方は、自分自身の手に在るといふことに、氣が付いて居たのであつた。が、今、彼は、世界が自分の前で崩れて行つて、意味の無い廢墟の外何物も残らなくなつて了まつたのは、自分の咎では無いことを感じた。彼は、人生に對する信仰に立ち戻つて行くことは、到底自分の力では能き無きことだと、感じたのだ。

彼は周圍の暗闇の裡に人々が立つて居た。彼等は、彼を何か甚く面白く思つたらしかつた。彼等は、彼に何か話し、何か尋き、それから、彼を何處かへ伴れて行つた、で、到頭、彼は、何時の間にか、小舎の隅の何か分らぬ人々の傍へ来て居た、さういふ人々は、八方で、話したり、笑つたりして居るのであつた。

「それでは、朋輩……その同なじ公爵がね」と、一番最後の言語に殊に力を入れて……誰かの聲が、小舎の裡の反對の側で、云ひ掛けて居た。

藥の上に坐つて、壁に凭りかゝつて、黙まつて、身動きせず、ピエールは、眼を開け、それから、直ぐ又、閉いだ、眼を瞑るや否や、その無邪氣であつた爲めに恐ろしい工場職工の若者の恐ろしい顔や、その不安らしい様子の爲めに一層恐ろしかった無意の殺人者等の顔が見えた。で、彼は、再眼を開けた、そして、暗闇の裡で四邊を悄然と見詰めた。

彼の直ぐ傍に、小さい男が身體を屈めて坐つて居た、その男の居ることには、その男が身體を動かす度毎に爲る汗の強い嗅氣で始めから、ピエールは、氣が付いて居たのだ。この男は、暗闇の裡で足の所で何か爲

て居た。そして、ピエールは、その男の顔を見無かつたけれども、彼が始終自分をジロ／＼見て居るのに、氣が付いて居た。暗闇で、ツク／＼とその男を覗いて、ピエールは、その男が脚絆を解いて居るのを見分けた。で、彼がさう爲て居る風がピエールの興味を引いた。

一方の足へ巻いてあつた紐を解いて了まふと、直ぐそれを奇麗に巻き、それから、直ぐ又、ピエールをジロジロ見ながら、今一つの脚の方へ掛つた。隻手で最初の脚絆を吊ら下けて居ながら、今一つの手では最早他の脚の方を解いて居た。斯ういふ風に、手ばしこく、休み無く手をぐる／＼廻す上手な運動で、その男は、自分の脚絆を解いて了まつて、頭の上に打ち込んであつた釘へそれを掛け、それから、小刀を取り出して、何か切り、小刀を閉ぢ、枕の下へそれを入れ、で、もつと身體を寛ろけて、膝を抱き、そして、ピエールを凝乎と見詰めた。

ピエールは、さういふ小器用な運動や、隅に於ての所持物のさういふ心持の好さ、うな始末方や、その男の嗅氣のうちにはさへ、心持の好い、心を安める、まん圓くなつたやうな何物かのあるのを、覺えた、で、彼は、その男から眼を離さ無かつた。

「貴下は随分お困りなすつたらうね、旦那。え、？」と、小さい男が不意に云つた。と、その歌ふやうな聲には、非常な親しさと率直さがあつたので、ピエールは答へやうと思つたのだが、顎が震へて、涙が出て来るのを感じた。その途端に、ピエールの當惑が表はれる隙もあらせず、小さい男は、同なじ心持の好い聲で、云つた――

「え、貴下、悲しんぢやア不可ませんよ」と、年取つた露西亞の農婦が物を云ふ時のやうな優しい、愛撫すやうな歌ふやうな聲で、彼は、云つた。「悲しみなざるなよ、お前さん、苦は一時のことです、けれども、

人生は何時までも續くぢやアありませんか。ねえ、ねえ、お前さん。で、吾々は、有り難いことに、宜い案配に此所へ来ました、何にも厭な事は無いんです。彼等も、又、人間です、悪い者もあれば、善い者も居ます」と、彼は云つた。で、物を云ひながら、膝を撓やかに動かして立ち上り、咳拂を爲て、歩み去つた。

「こら、娘、来たな、ビエールは、小舎の彼方の端で同なじ愛撫すやうな聲を聞いた。」

「やア、来たな、娘、俺を覚えてるな。これ、これ、臥て居ろつてば」

で、その兵卒は、自分へと跳び付いて居た犬を推し退けて置いて、自分の居場所へ返つて来て、坐つた。手には、布に纏んだ何かを持つて居た。

「もし、これを食べつて御覽なさい、旦那」と、彼は、最初使つた丁寧な聲調に戻つて、云つて、包を解いて、五つ六つの焼いた馬鈴薯をビエールに渡した。「晝食には肉汁がありました。だが、馬鈴薯は一等ですよ」  
 ビエールは、終日何にも食は無かつたのだ、で、馬鈴薯の香が非常に心持好く思はれた。彼は、兵卒に禮を云つて、食ひ始めた。

「でも、それぢやア駄目です、ねえ」と、兵卒は、微笑んで、云つた、そして、馬鈴薯を一つ取つた。「斯うして食つて御覽なさい。彼は、再、小刀を取り出し、手の掌の上で、それを眞二つに切り、布から鹽を出して振り掛け、そして、それをビエールにさし出した。

「馬鈴薯は一等です」と、彼は繰り返した。「斯ういふ風にして食つて御覽なさい」

ビエールには、それ程嘗い物を今まで一度も食つたことが無いやうに、思はれた。

「いや、私は大丈夫だ」と、ビエールは云つた、「だが、何故、奴等は彼の可憐さうな者どもを射ち殺したんだらう？……最終のは、二十歳位の若者だつた」

「チッ……チッ」と、小さい男が云つた。「罪、全く……、罪です……」と、彼は、早く云ひ足したが、それは、宛然、その言語が何時でも口へ出掛かつて居て、今、ヒョイと自然に跳び出したとでも云ひさうであつた、彼は、尙續けた——

「何うして、旦那、貴下は莫斯科に残つちまつておいでなすつたんですね？」

「奴等が斯様な早く來やうとは思は無かつたんだ。私は、偶然居残つて居たんだ」と、ビエールは云つた。

「でも、何うして捉まつたんです、貴下、家からですか？」

「いや、火事を見に出たんだ、さうすると、奴等が私を捉まへて、放火者として私を裁判に掛けたんだよ」

「裁判のある所には、何處でも、其所に虚偽があります」と、小さい男が口を挾れた。

「所で、お前は最早此所に長く居るのかね」と、ビエールは、最後の馬鈴薯を嚙みながら、尋いた。

「私ですか？。日曜に、莫斯科の或る病院から捉まへて來られたんです」

「お前は何だね、兵卒かね？」

「吾々は、アプシエロン聯隊の兵卒どもです。私は熱病で死かゝつて居ました。吾々には、何も云つて呉れ無いんです。病氣で臥て居た者は二十人でした。で、吾々は、それが何ういふ譯だつたのか、少しも分らず、推量することだつて少しも能き無かつたんです」

「所で、お前は此所で情無い氣がするかね？」とビエールが尋いた。

「情無いです、勿論、貴下。私の名はブラアトンです、カラタアエフといふ綽名でね」と、彼は、確に、ビエールが彼に話し掛けることをもつと容易くしやうと爲る爲めらしく、云ひ足した。「聯隊では、衆皆が、

私のことを「小さい鷹」と呼びました。何うして悲しからずに居られませう、お前さん？。莫斯科——市々の母ではありませんか。この有様を見ては、誰でも悲しくならずに居られませんよ。左様です、蛆が甘藍を噛む、が、食つて了まは無いうちに死んで了まふ、さう老人たちは云つてました」と、彼は、早く、云ひ足した。

「何、何と云つたね？」と、ピエールは尋いた。

「私？」と、カタアエフが云つた。「私の云ふのは、それは吾々の智慧では無い、神の御意だ、と云ふんです」と、彼は、自分が前に云つた事を繰り返して居るのだと想像して、云つた。で、直ぐ後を續けた、「ねえ、旦那、貴下は、御先祖からの家や土地をお持ちですかね？。貴下御自身のお家ですか？。勿論、貴下は幸福な方でしたらうね？。で、奥様も？。それで、御両親とも生きておいでませうね？」と、彼は、尋いた、で、ピエールは暗闇で彼を見ることは能き無かつたけれども、彼は、兵卒の唇が、彼がさういふことを尋いて居る間、親切らしい抑へた微笑で開いて居ることを感じた。彼は、ピエールに両親の無いこと、殊に母親の無いことに、失望したらしかつた。

「好い助言は女房で、親切に迎へて呉れるのは、姑です。が、實の母親程好い者は凡そ世の中にはありませんねえ」と、彼は云つた。「で、お見さんたちがおありですか？」と、彼は續いて尋いた。ピエールのさうで無いといふ答が、再、彼に當て違ひをさせた。で、彼は自分で云ひ足した、「いや、貴下がたは未だお若い方だ、だから、神の御意次第で、今におできでせう。唯だ平和で仲好くお暮しなさい」

「だが、最早、何うでも構はんぢやア無いか」と、ピエールは、云は無いでは居られ無かつた。

「あ、お前さん」と、ブラアトンが、應じて、「乞食の袋と、牢屋の壁は、誰も必定通れるといふ譯には

行きませせん」。彼は、もつと居心好く坐り直し、長い物語を爲やうとする支度らしく、咳拂ひを爲た。「で、それは、斯ういふ風でしたよ、朋友、私は家で暮して居ました時分には」と、彼は、云ひ始めて、「吾々は、大分な遺産、多量の土地を持つて居ました。農夫たちは暮しも樂だつたし、それから、吾々の家屋は——神のお蔭で、有り難いことに、可なりな奴でしたよ、全くね。父親は、吾々六人を伴れて、刈り入れに出るのでしたよ。吾々は結構に暮して居ましたね。先づ農夫らしい生活でした。が、そのうちに……」

で、ブラアトン・カタアエフは、自分が他人の森へ樹を伐りに行き、番人に捉まり、答たれ、裁判され、それから、兵卒に遣られたまでの長い物語を爲た。「で、ねえ、お前さん」と、彼は云つたが、彼の聲は、顔の微笑で變つて、「吾々は、それを災難だと思つたんです。實際はそれが幸福になつたのでしたのね。私が悪い事を爲たんで無かつたら、兄弟の内他の誰かへ行つて行つたんです。所で、私の弟には五人小さい兒がありました、けれども、私は、ね、女房の外、誰も後へ残して行く者がありませんでした。小さい娘がありました、けれども、私が兵に出る前に、神がその娘を取つておしまひでした。私は賜暇で家へ歸りました、實際、家の生計はますます、好くなつて居ました。廣庭には、家畜が一杯であり、家内には女が大勢居ました、二人の兄弟は、外で賃銀を儲けて居ました。唯だ、一番の下のみハイイロばかりが、家に居ました、父親は、小兒は何れも皆同なじだ、何の指を針で突いても、他のが、同なじに痛むのだ、と云つたんです。彼の時、ブラアトンが頭を剃られて兵にされ無かつたら、ミハイイロが出無ければなら無かつたんだ。父親は、吾々を衆皆呼び集めました——ねえ、實際の話ですぜ——で、聖畫の前に立たせたんです。ミハイイロ、此所へ来い、御足下へ平れ伏せ、お前たち、女ども、平れ伏せ、それから、お前たち、孫ども、と、父親は云つたんです。お前たち、解つたか？と、云ひました。左様、ね、さういふもんです、お前さん。運命といふ

奴は道理と一緒に働くものなんです。で、吾々に、何時でも人を裁判して居ます、それが正しく無いことです。これは、吾々の爲すべき事ではありません。吾々の幸福は、お前さん、引網の裡の水のやうなものです、引けば、網は膨れるが、引上げてしまふと、中には何にも無い。左様、それなんです」で、プラアトンは、薬の中の新たな座へ移つた。

寸時黙まつて居てから、プラアトンは起つた。「もし、眠むいでせう、さうでせう？」と、彼は云つた、そして、速く十字を切り始めて、呟いた——

「主耶蘇基督、聖ニコオラ、フロオラ、ラアヴラ。主耶蘇基督、聖ニコオラ、フロオラ、ラアヴラ。主耶蘇基督——吾等を憐れみ、救ひ給へ」と、彼は云ひ終はつて、床へ平れ伏し、溜息し、で、薬の上へ坐つた。「それが正しいんだ。私を石のやうに眠らせ給へ、お、神よ、私を新しい麵麩の様に起きさせ給へ」と、彼は、呟いた、で、臥て、自分の上へ軍服の外套を引つ被つた。

「お前が唱へたのは何といふ祈禱かね？」と、ピエールは尋いた。

「え、？」と、プラアトンが云つた（彼は、最早半分眠て居た）。「唱へた？。私は神に祈つたのです。貴下も祈ら無いんですか？」

「左様、私も祈るよ」と、ピエールは云つた。「けれども、お前が云つたのは何だね——フロオラ、ラアヴラといふのは？」

「え、その通りです」と、プラアトンは口速に答へた。「二人とも馬の守聖です。可憐さうな獣の爲めにも考へてやら無ければ不可ないんです」と、彼は云つた。「や、小さい娘奴、圓くなつてやがる。お前は暖だな、牝犬の仔」と、彼は、足で犬に觸つて、云つた、で、ゴロりと反側つて、直ぐ眠いつて了まつた。

屋外では、叫聲や、嘆き聲が、何處か遠方で聞え、壁の破れ目からは、火の明りが見えた、が、小舎の裡は眞闇で、聞然として居た。長い間、ピエールは眠いらずに居た、そして、傍に眠て居るプラアトンの調子の整つた鼾聲を聞きながら、暗闇で眼を開いて臥て居た、で、彼は粉塵された世界が、自分の心の裡で新しい、新たな美しくさで、揺が無い新たな基礎の上に、立ち上つて來つゝあるやうな心持がしたのであつた。

(十三)

この小舎——其所に、ピエールがそれから四週間居たのだが——には、兵卒が二十三人、將校が三人、文官が二人居た、それが衆皆俘虜であつたのだ。

彼等は、ピエールには、後になつては、悉皆霧のやうな形になつて了まつたのだが、プラアトン・カラタアエフばかりは、ピエールの心の裡に、最も強い、最も貴い記憶となり、親切な、圓い、露西亞的な有らゆる物の具體化した物として、残つて居た。

次の日の味爽に、ピエールが自分の隣人を見るときといふと、何か圓い物だといふ最初の印象は十分に確められた、佛蘭西の軍用外套を着て、紐で腰を締めて、略帽を冠ぶり、木皮靴を穿いたプラアトンの姿全體が圓々として居た、頭が全く圓かつた、背部も、胸も、肩も、それから彼の腕さへも——彼は、何時でも何物かを抱擁しやうとするやうな腕容を爲て居たのだが——それが皆その線が圓かつた、その上に彼の親しげな微笑や、大きい、和かな、鶯色の眼も、圓かつた。

プラアトン・カラタアエフは、彼が加はつたといふ戦役の物語から判断すると、何うしても五十歳を越して居たに違ひ無かつた。彼は、自分でも、幾歳であるのか、知らず、幾歳だと自分では極めることも能き無

かつた。が、彼が屢々笑ふ度毎に、彼の強い、キラ／＼と白い歯が、一つも缺けた所の無い半圓で、見えた、そして、何處も彼も、善く、健全であつた、髻にも、頭にも、白髪一筋無く、後の體軀全體が、撓かなこと、非常に強いこと、勞苦に堪へ得ること、を、表はして居た。

彼の顔は、深い皺があるに拘らず、無邪氣と若さとの表情を持つて居た、彼の聲は、心持の好い諳ふやうな調子であつた。が、彼の談話の非常な特徴は、それが自然に出て來ること、何時でも容易らしかつたこと、であつた。明に、彼は、自分が何を云つて居るか、若くは、何を云はうと爲て居るか、とかいふことは一向考へ無かつたらしかつた。で、さういふ所が、彼の、速語な、心からの調子に、特別な、抵抗し難い、説得力を與へたのであつた。

彼の體力と活動力は、拘禁された最初のうちは、非常なものであつて、宛然、彼は、疲憊とか病氣とかいふものは何様なものなのか知ら無かつたかのやうに見えた位であつた。毎晩眠る時には、「主よ、私を石のやうに眠らせ給へ、私を新しい麵麩のやうに起きさせ給へ」と、云ふのであつた。

で、毎朝、起るといふと、肩を何時も同様に振つて、「臥る時には、圓くなれ、起きたら、身體を振るひ覺ませ」と、云ふのであつた。で、彼は、實際、臥させすれば、直ぐ就眠て了まふし、起きて、身體を振るひ覺ましさをすれば、直ぐ、その上少しの猶豫も無く、何か知ら爲事に掛からうとして居た、それは、恰度、小兒が、眼が覺めると、直ぐ玩具で遊びだすのと同様なやうであつた。

彼は、何でも能きるのであつた、別に巧いものも無かつたが、さればと云つて、何でも拙いものは無かつた。彼は、麵麩を焼き、料理を爲、縫ひ、鉋を使ひ、靴を造へた。彼は、何時も忙しく働いて居た。そして、晩になると、やつと、自分が好であつた談話を爲たり、歌を諳つたりした。

彼の歌を諳ふのは、諳歌者が、人が聞いて呉れると思つて諳ふのとは異つて、鳥が時々身體で伸を爲たり、歩いたり爲ると同様なやうに聲を出さなければ居られないので、轉づるらしいのと、全く同様に、諳ふのであつたのだ。で、さういふ聲は、何時も細い、和かな、殆ど女性のやうな、悲哀な調子であつた。そして、それを諳つて居る時の彼の顔は、極く生眞面目なものであつた。

牢屋に居て、髻を生えさして了まつて、彼は、自分の上に無理に造へられて居て、彼に取つては不自然であつた總ての兵卒の習慣を投げ捨て、我知らず、往時の農夫の風習に立ち戻つたらしかつた。

「除隊された兵は、再下袴の外へ出た褌衣だ」と、彼は何時も云つた。彼は、兵卒としての自分の生活に就ては、別に不平は云は無かつたし、又、兵になつて以來一度も負けたことは無いとは屢々云ひ／＼したのではあつたが、さういふ兵卒生活の物語は爲度が無かつた。物語を爲る時には、何時でも大抵「基督教徒」——彼は、それを「クレスチャン」と云つた——としてか、若くは農夫としての、彼の生活の往昔の、彼に取つては貴いらしい、記憶のことを話したのであつた。

彼の談話には何時も屢々出て來た俚諺は、兵卒の間に普通して居るやうな思ひ切つた大抵猥褻なものでは無かつた。彼の俚諺は、一つ／＼離して見ると、何の意味も無いやうであるのだが、それが適當な所で云はれるといふと、倏忽にして、甚深な智慧の意義を得るといふやうな農夫間の金言であつたのだ。

彼は、屢々、自分が前に云つたこと、は全く反對な事を云ふのであつたが、併し、それでも、兩方の俚諺が同様なやうに眞實であつた。彼は、話すことが好きで、話上手で、可愛がる綽名だの、俚諺で談話を飾つて話したのだが、さういふ俚諺などは、プラアトンが自分で造へるのであるらしく、ピエールには思はれたのであつた。が、彼の談話の非常に面白かつた所は、極く一寸した事件——ピエールも見ただけに見たが、別

に何とも思はないで、心にも留まらなかつたやうな小さい事件——が、ブラアトンがそれを話すことになるといふと、如何にも面白く、嚴肅な意義があるやうになつて來ることであつた。彼は、晩になると、一人の兵卒が話すのであつた昔物語——何時も同なじ物を幾度も繰返すのであつた——を、聞いて居るのが好きであつたが、然し、彼が最も好きであつたのは、實人生の物語を聞いて居ることであつた。

彼は、さういふ物語を聞いて居る時には、嬉しさうに微笑んで居ながら、總て、物語の中の行爲の道徳上の美しさを瞭然と表はし出さうとするのらしい言語や、問を挾れるのであつた。

ピエールの解して居た意味での、愛着とか、友情とか、愛情とか、いふやうなものは、カラタアエフは寸毫も持つて居なかつた。彼は、自分が一緒に人生へ投げ込まれた孰の人々をも愛し、そして、それと仲好く暮して居た、彼は、男に對して殊に左様であつた——が、それは、或る極まつた一人の男に對してといふのでは無くして、彼の眼の前に居合せた男たち誰でもに對して、左様であつたのだ。彼は、彼の犬を愛し、彼の朋輩を愛し、佛蘭西人を愛し、それから、彼の一番傍に居たピエールを愛して居た。が、ピエールは、カラタアエフが自分に向つて持つて居た愛情の深い優しさ（それは、カラタアエフが、知らず／＼のうちに、ピエールの精神的生活に對しての尊敬として拂は無いでは居られなかつたのだが）に拘らず、カラタアエフは、ピエールと別れても、寸時の悲痛も受けは爲無からう、といふ心持がした。で、ピエールの方も、カラタアエフに對してはそれと同なじの感情を持ち始めた。

他の總ての兵卒の見るのでは、カラタアエフは普通の兵卒であつた、彼等は、彼を「小さい鷹」とか、ブラトオシヤとか、呼んだ、機嫌の好い冗談で彼を冷嘲し、物などを取りに遣らせた。

が、ピエールには、その最初の夜カラタアエフが見えた通りのもの——率直と眞實の精神の測り難い、圓められた、そして、永劫の、權化——であつて、さういふものとして、カラタアエフは、ピエールに取つては、何時までも残つて居たのである。

ブラアトン・カラタアエフが、諳で覺えて居るのは、彼の祈禱のみであつた。談話を爲る時には、彼は、一句を云ひ始めながら、それを何う終らせて宜いのか、分らなかつた。

ピエールが、時々、ブラアトンが云つた言語の意味の強いのに感服して、彼が云つた事を今一度云つて呉れと頼むことがあるといふと、ブラアトンは、恰度、彼が、彼の大好きな歌の文句をピエールに今一度云ふことが能き無かつたのと同なじやうに、一分前に云つた事を憶ひ起すことが能き無いたのであつた。歌には、「私自身の小さい樺の樹」といふ文句と、「私の心は惱んで居る」といふ句があつた、が、さういふ言語には何の意味も無かつた。彼は、句の中から離しての言語の意味を解して居無かつたし、又、それを覺ることも能き無かつた。

彼の一言一行が、彼の自ら覺つて居無い力、即ち、彼の生命その物であつた所の力の表現であつた。彼の生活は、彼の見た所では、個別の生活としては、何の意味も無いものであつた。それは、全體の一部としてのみ意味を持つて居たのだ。そして、その全體の存在は、彼は、何時も何時も知覺して居たのであつた。彼の言語や行爲は香氣が花から出て來ると恰度同なじやうに滑かに、避け難く、そして、自然に、彼から流れ出るのであつた。彼は、個別に見た行爲や、言語に、何か價値があり、意義があるといふことは、少しも分らなかつた。



(十四)

自分の兄が、ロストオフ家の人々と共に、ヤロスラアヴルに居ると聞いて、公爵嬢マリイヤは、止めやうとする伯母の努力に拘らず、直ぐに行かう、而も、單獨では無く、甥を伴れて、行かうと支度した。これが困難なことであつたか、無かつたか、それが能きべきことであつたか、無かつたか、公爵嬢は、其様なことは聞き合はせも爲無ければ、知らうといふ氣も無かつた。自分の——死にかゝつて居るかも知れぬ——兄の傍に隨いて居るばかりで無く、兄の息子を兄の所へ伴れて行く爲めに、能き得る有ゆる手段を盡すのが、自分の義務であつた、で、公爵嬢は出立の支度を爲した。

公爵アンドレー自身から何の消息も無かつたとすれば、公爵嬢マリイヤは、それは、彼が餘り弱つて居て手紙が書け無かつた爲めか、で無くば、彼が公爵嬢及び彼の息子には長旅が餘りに困難でもあり、危険でもあると考へたからなのか、孰かなのだと極めたのだ。

二三日のうちに、公爵嬢マリイヤは、旅行に最早何時でも出られるやうに爲つた。公爵嬢の乗り物は、自分とヴォロネエスへ来る時に乗つて来た非常に大きい四頭馬車と、車蓋のある小馬車と、荷馬車とであつた。隨いて行く者は、マドモアゼル・ブウリアンヌに、ニコルウシカ、家庭教師、年取つた乳母に、三人の女中、ティフォン、若い侍僕と、それに、伯母が公爵嬢に附けてよこした使丁であつた。

莫斯科への通例の路で旅することは思ひも寄ら無かつた。で、公爵嬢マリイヤが、リベツスク、リヤザア、ン、ヴラディミル、及び、シウヤを経て取らざるを得無かつた迂回路は非常に長かつた。驛馬の缺乏の爲めに困難であつた。その上に、佛蘭西人が現はれ始めたといふリヤザア附近では、實際危険であつた。

この困難の旅の間、マドモアゼル・ブウリアンヌも、デッサレも、公爵嬢マリイヤの僕婢たちも、公爵嬢の意志や精力の不撓なのに驚かされた。公爵嬢は何時も誰よりも一番遅く休み誰よりも一番早く起きるのであつた。そして、何様な困難も公爵嬢を弱らし得無かつた。公爵嬢の活動力と、精力とのお蔭で——さういふ物が公爵嬢の随行人に傳染つたのだ——公爵嬢は、二週目の終頃には、ヤロスラアヴルに餘程近くなつて居た。

ヴォロネエスでの逗留の終り時分は、公爵嬢マリイヤの生涯での一番幸福な時期であつた。ロストオフに對する戀愛は、その時分には、公爵嬢に取つては苦惱又は動搖の原因では無かつた。その戀愛は、その時分には、最早、公爵嬢の靈全體に満ち、公爵嬢自身のうちの引き離すことの能き無い一部となつて居た。で、公爵嬢は最早それに反抗し無かつたのだ。此頃では、公爵嬢マリイヤは、自分は戀して居ると同時に戀されて居るのだと——公爵嬢は其様な多くの言語で、決して、瞭然と自分ではそれを認めては居無かつたけれども——確信して居た。公爵嬢は、ニコライとの最後の會見——ニコライが、公爵嬢の兄がロストオフ家の人々と一緒に居ると知らせに来た時の會見——に依つて、さう確信させられたのであつた。

ニコライは、公爵アンドレーとナタアシヤとの婚約が(公爵アンドレーが全癒した場合には)今は又結ばれるかも知ぬといふことに就ては、それを暗示するやうな一語をも云は無かつた。けれども、公爵嬢マリイヤは、ニコライの顔容で以つて、彼がそれを知つて居り、且そのことを考へて居るのを見た。

が、それに拘らず、公爵嬢に對するニコライの——親切な、優しい、そして、愛情に富んだ——態度は變るところでは無く、反つて彼は、今は、自分と公爵嬢マリイヤとの血族的關係のやうなものが、自分に、彼の戀愛的友情(公爵嬢マリイヤは時々さういふ風に思つた)をもつと自由に言ひ表はすことを許して呉れ

るのを、非常に喜んで居るらしく見えた位であつた。公爵嬢マリイヤは、それが自分の生涯での戀し始めてあると同時に戀してしまひであることを知つた、そして、自分は戀されて居るのだと、感じた、で、その關係に於て、幸福で、心が平和であつた。

が、公爵嬢の精神上的の状態の一方に於けるこの幸福は、兄の事に就て非常に烈しい悲嘆を公爵嬢が感じるのを、妨げる所では無かつた。反つて、其方の方での精神的平和は、公爵嬢をして、兄に對する感情にもつと十分に身を委ね得るやうにさせたのであつた。

ヴォロネエスから發足した時のこの感情の強さは、公爵嬢の隨員は、誰も彼も、公爵嬢の心配寔れのした絶望した顔を見て、公爵嬢は必定途中で病氣になるだらうと、信じた位であつた。が、途中の困難や心配(公爵嬢はさういふものをば非常な精力で巧く處分して行つた)が、その當分悲愁から公爵嬢を救ひ、そして、公爵嬢に力を與へた。

何時も、行旅といふものが左様である通りに、公爵嬢マリイヤは、行旅その事の外何にも思はず、その目的が何ういふものであつたかといふことなどは、全く忘れて了まつた。が、ヤロスラアヴルに近づいて、何ういふ事が——多くの日の終末の今で無く、全くその晩——自分を待つて居るだらうかといふことが、再び公爵嬢の心に明瞭になつて來るといふと、公爵嬢の心の動搖はその極限に達した。

ロストオフ家はヤロスラアヴルの何處に宿を取つて居るのか、それから、公爵アンドレーエーは何ういふ容態なのか、確めて來る爲めに、先きへ遣られた使丁は、市の門で大きい旅行馬車を迎へた時に、その馬車の窓から出て彼を見た恐しく蒼い顔に驚かされた。

「悉皆分りましてございます、閣下、ロストオフ家は、廣巷の、ブロンニニコフといふ商人の家において

でございます。最早遠くはございません、ヴォルガの直ぐ岸で」と、使丁は云つた。

公爵嬢は、何故使丁が、自分の肝腎の間、「兄は何うなのか?」といふのに、答へ無かつたのか、それが合點が行かずに、怖けた尋問の態で、使丁の顔を見た。マトモアゼル・ブウリアンヌが、公爵嬢の爲めに、その問を出した。

「公爵は何ういふ様子?」と、マトモアゼル・ブウリアンヌは尋いた。

「閣下は、彼方のお方たちとご一緒の家においでです」

「では、生きておいでだね」と、公爵嬢は思つた。で、低聲で尋いた、「何ういふ様子なの?」

「下の者たちの申しますのでは「未だお異りが無い」といふのでございます」

「未だ異りが無い」とは何ういふ意味であつたのか、公爵嬢は尋ね無かつた、そして、自分の前に坐つて居る、町が見えたので嬉しがつて居る小さい七歳のニコルウシカをば、誰も氣が付か無い位に一寸と横眼で見つて公爵嬢は、頭を垂け、重い馬車——轟き、ガタ／＼動き、左右に揺れる——がピタリと止つて了まふまで、頭を擧げ無かつた。馬車の踏み段がバタリと下された。

馬車の戸が開けられた。左方に、水——廣い河——があつた、右方には、入口の昇降段があつた。入口には人々——僕婢と、黒い髪の厚い巻の、薔薇色の顔の娘と——が居た、そして、その娘が厭な氣取つた風(公爵嬢にはさう見えた)で、公爵嬢マリイヤに向つて微笑んだ。

それはソオニヤであつた。

公爵嬢は昇降段を駆け、上つた、娘は、態とらしい態で微笑んで、「此方へ、此方へ」と、云つた、そして公爵嬢は立關の間に入つて、東洋型の顔の年取つた婦人とバツタリ顔を合せた、その婦人は、感動した様子

で、急いで公爵嬢の方へとやつて来た。

それは伯爵夫人であつた。

伯爵夫人は公爵嬢の抱擁し、そして、接吻した。

「わが兒よ」と、伯爵夫人は云つて、「私は貴女を愛して居ます、私は貴女を長い間知つて居ますよ」

自分の感情が昂まつて居たに拘らず、公爵嬢は、それが伯爵夫人であつて、自分はそれに何とか云は無ければ、不可なりといふことを、知つた。何うそれをやつたのか殆ど夢中で、公爵嬢は、先方から話しかけられたのと同じ調子で、何か可憐な佛蘭西語を云つて、それから、「何ういふ様子ですか」と、尋いた。

「醫者は、少しも危険は無いと、云つて居ます」と、伯爵夫人は云つた、が、さう云ひながら、伯爵夫人は溜息して、眼を上方へ向けた、で、この身振りが、言語を取り消した譯になつたのだ。

「何處に居りますか？逢へますでせうか、逢へますか？」と、公爵嬢は尋いた。

「今直ぐ、今直ぐ、貴女。これがお息子さんですか？」と、伯爵夫人は、デッサレに連れられて入つて来たニコルウシカに振り向いて、云つた。「何方の部屋も直き造らへますよ、家は大きいんですから。おや、まア眞個に可愛らしいお兒さんですことねえ」

伯爵夫人は公爵嬢を客室へと連れ込んだ。ソオニヤはマドモアゼル・ブウリアンヌと話を爲だした。伯爵夫人は小兒を愛撫した。老伯爵が公爵嬢に挨拶しに部屋へ入つて来た。

彼は、公爵嬢マリヤが最後に逢つた以來、非常に變はつて居た。その時分には、彼は、機嫌の好い、陽氣な、自信して居る老紳士であつたのだが、今は、可憐な、オドクした人間であつた。公爵嬢の談話を爲て居るうちも、彼は、自分の爲て居ることはそれで宜いのかと誰にも尋くかのやうに、絶えず四邊を見廻し

て居た。莫斯科の滅亡と、自分の財産の無くなつた事との後、自分の此れ迄慣れ來つた路から追ひ出されて了まつて彼は自分が重要な人間であるといふ感を明に失つて了まつた。そして、自分は人生に於て何の用も無い人間なのだ、感じたのであつた。

時を移さず兄に逢ひ度いといふ唯だ一つの願望に拘らず、唯だ兄に逢ふばかりが望であつたその時に、人が自分に對して甥を賞めて唯だ習俗的な款待振りを爲るのが、もどかしくつて堪まら無かつたに拘らず、公爵嬢は四邊で行はれて居る事件を悉皆觀察した。そして、自分が入つた新しい状況に從つて居るのは、其所暫時何うして避け得られ無いことだと、感じた。公爵嬢は、總て此は避け得られ無いことだと、知つた。そして、それは公爵嬢に取つては辛かつた。が、公爵嬢はそれに對して少しも怨はし無かつた。

「これは姪でございます」と、伯爵夫人は、云つて、ソオニヤを引き合せた、「ご存じぢやア無かつたでせうね。公爵嬢？」

公爵嬢マリヤは、ソオニヤへと振り向いた、そして、その娘を見ると共に自分の胸の裡に起つて來た敵對の感情を押しつけやうと骨折りながら、その娘に接吻した。が、公爵嬢は、自分の周圍に居る誰もの氣分が、如何にも自分の胸に満ちて居た事件と適應無いのを感じて苦しかつた。

「兄は何方ですか？」と、公爵嬢は悉皆に向つて、今一度尋いた。

「階下です、ナタアシャが附いて居ます」と、ソオニヤが、顔を赤くして、云つた。「尋きに遣りました。お疲れでせう、ね、公爵嬢？」

もどかしさの涙が公爵嬢マリヤの眼へ出て來た。公爵嬢は傍を向いた、そして、兄が何處に居るのか、伯爵夫人に今一度尋かうと爲た、と、その途端に、公爵嬢の耳には如何にも快活らしく響いた軽い熱心な足

音が戸口で聞えた。公爵嬢は振り返つた、と、殆ど駆け込むやうに入つて来るナタアシヤを見た——餘程前に莫斯科で逢つた時に彼れ程嫌ひであつたそのナタアシヤが。が、公爵嬢マリイヤは、ナタアシヤの顔を瞥見無いらちに、眞實に自分と悲痛を共にして呉れる、そして、それだから、自分の眞の友である者が其所へ来たことを、解した。公爵嬢は飛んで行つて、ナタアシヤを迎へた。そして、抱擁して、ナタアシヤの肩へ頭を凭たせて泣き出した。

公爵嬢マリイヤの來たことを聞くや否や、公爵嬢マリイヤには如何にも快活らしく聞えた彼の速い歩調で、竊然と部屋を出て、公爵嬢に逢ひにと駆けつけた。

ナタアシヤが部屋へ駆け込んで來た時には、ナタアシヤの動揺した顔は、唯一つの表情——愛の表情、公爵嬢に對する愛、公爵嬢に對する愛、ナタアシヤが愛して居た人に近い總ての者に對する愛の表情——憐愍、他人の爲めに苦しむこと、他人を助けることに全く身を委ねてしまはうといふ熱烈なる願望の、表情を帯びて居た。その刹那には、ナタアシヤの心に、自我といふ考想、公爵嬢に對する自分の關係に就ての考想が少しも無かつたのは、明瞭であつた。

公爵嬢マリイヤは、特質の精到な直覺で、ナタアシヤの顔を瞥見するや、否や總てさういふ事を見て了まつた。そして、悲しい安堵でナタアシヤの肩で泣いたのだ。

「さア、行きませう。マリイ」と、ナタアシヤは、云つて、公爵嬢を次の部屋へと引張つた。

公爵嬢マリイヤは、頭を擧げ、涙を拭き、そして、ナタアシヤに振り向いた。公爵嬢は、ナタアシヤから何も彼も知り、何も彼も理解しやうと思つた。

「何様な……」と、公爵嬢は云ひ始めて居たが、パタリと止まつた。公爵嬢は、何様な問も何様な答も言語には出せ無いことを感じた。ナタアシヤの顔と眼が、もつと瞭乎と、もつと深く總ての事を、必定自分に話して呉れるだらう、と思つたのだ。

ナタアシヤは公爵嬢を見た、が、自分が知つて居る事を悉皆云つて宜いか、悪いか、恐れ且疑がつて居た。ナタアシヤは自分の心の底まで徹るやうなその輝いた眼の前では、自分が見たまゝの全體、全くの眞實のことを、話さずには到底居られ無いと感じたやうであつた。ナタアシヤの唇が不意にピク／＼した、醜い皺が口の周圍へ出て來た。そして、ナタアシヤは、獻歎き爲だして、顔を手で隠した。

公爵嬢マリイヤは、何も彼も知つた。

が、公爵嬢は未だ希望を捨て無かつた。そして、斯ういふ言語——その言葉には公爵嬢自身何の信用も置いて居無かつたが——で尋いた——

「でも、傷は何うなんです？。全體としての容態は何うなんですか？」

「ま……まア、行つて見てください」といふのが、ナタアシヤの云ひ得た總てであつた。

二人は、階下で、公爵の部屋に近い所で、涙を制して、何氣無い顔で彼の所へ入つて行かうと、少時坐つて居た。

「始から容態は何うでしたの？。最早長いこと篤くなつて居るんですか？。何時斯う爲つたんですの？」と、公爵嬢マリイヤは尋いた。

ナタアシヤは、始めは、炎及び非常な疼痛の爲めに危険があつたのだが、その危険は、ツロイツァで通り過ぎて了まつて、醫者は唯だ一つ——壊疽——を虞れて居たことを、公爵嬢に話した。が、その危険も、

又、殆ど越して了まつた。ヤロスラアヴルに着いた時分には、傷が化膿し始めた（ナタアシヤは、化膿や其他の言語を悉皆知つて居た）、で、醫者は化膿は順調を追つて来たのだと、云つて居た。熱が出だした。醫者は、この熱は大したことは無いと、云つて居た。「でも、二日前」と、ナタアシヤは、云ひ始めて、「全く不意に、この變化が起つたんです……」。ナタアシヤは、泣くまいと骨折つた。「何故だか分りませんの、でも、ご覽なされば、その變化が分ります」

「弱くなつたの？。瘡たの？……」と、公爵嬢は、尋ねた。

「いゝえ、左様では無いんです、でも、驚くなつたの。ご覽なされば直ぐ分るのよ。あゝ、マリイ、彼の方は眞個に善い人よ、彼の人は、到底生きては居られ無い、何故だと、云へば……」

(十五)

ナタアシヤが、慣れた手で戸を開けて、公爵嬢を先へ入らせた時に、公爵嬢マリイは、歎息が咽喉へ突き上つて来るのを感じた。何れ程覺悟は爲て居ても、何れ程自分を落ち着かせようと骨折つても、公爵嬢は、涙無しに兄を見ることは能き無いらうといふことを知つて居た。

公爵嬢は、ナタアシヤが何ういふ意味で「二日前この變化が来た」といふ言語を云つたのか解つて居た。公爵嬢は、それは公爵が不意に物柔かになつた、そして、その柔かになつたこと、その優しさが、死の前兆なのだといふ意味だと、解釋したのであつた。戸へ近づきながら、公爵嬢は、自分が小兒の時分に知つたやうな、小さいアンドルウシヤの、極く稀であり、そして、非常に強く公爵嬢を感動させたやうな、優しい、溫和しい、和かになつたその顔を、最早想像の裡で見たのであつた。公爵嬢は確に、彼が、父親がその知死期

の床で云つた彼の言語のやうな和かな、優しい言語を公爵嬢に云ふであらう。さうすると、公爵嬢はそれを堪へて居られ無いで泣き出すであらうと、感じた。

が、晩かれ、早かれ、それは左様なら無ければなら無いのであつた。で、公爵嬢は部室へ入つて行つた。自分の近視眼で、公爵の姿をだん／＼瞭乎と見分けるに従がつて、歎息がだん／＼高く咽喉へ上つて来るやうな氣がした。と、やがて、公爵嬢は公爵の顔を見、公爵と眼を見合はせた。

彼は、栗鼠皮裏の寝衣を着て、敷褥で支へられて、寝椅子の上で臥て居た。彼は、瘡で、蒼かつた。一方の瘡は透明るやうに、白い手で、手巾を持ち、今一つの方で、長く伸びて居た細い口髭を捻つて居た彼の眼は、二人が入つて来るのを見詰めて居た。

彼の顔を見、彼と眼を見合すといふと、公爵嬢マリイは、自分の歩調の速さを緩めた、そして、涙が乾き、歎息が止まつたのを、感じた。公爵嬢は彼の顔と眼の表情を見とめるといふと、不意に恥かしく、濟ま無い事を爲た氣がした。

「でも、何う私が悪るいのだらう？」と、公爵嬢は自ら問うた。

「生きて居る、生きて居る人間のことを考へて居るのが悪るい、が、俺の方は……」と、公爵の冷たい、嚴酷な眼が答へるやうに見えた。

彼が、ツク／＼と妹とナタアシヤを見て居る時の、深い、外方では無く、内部を見て居る凝視の裡には殆ど敵對と云つて宜い位の何物かあつた。習慣通りに、彼は、妹の手に接吻し、妹は兄の手に接吻した。

「何うかね、マリイ、何うして此所まで來られたね？」と、彼は、彼の眼の裡の様子と同なじの、落ちて着

いた、親みの無い聲で、云つた。若し、彼が絶望の金切り聲を出したところで、その金切聲の方が、公爵嬢マリイヤに取つては彼の聲のその音よりは、恐ろしく無かつたらう。

「ニコルウシカを伴れて来たかね？」と、彼は、物を憶ひ起すのが如何にも勞らしい態で、依然落ちて緩然と云つた。

「貴下は如何です？」と、公爵嬢は云つたが、自分の云つて居ることに自分ながら驚いたのであつた。

「それは、お前、醫者に尋か無きやア」と、彼は云つた、そして、今一度優しく爲やうと確に骨折つて居るらしく、彼は、唇だけで、云つた(彼が自分の云つて居ることを考へて居無かつたことは明瞭であつた)

「有り難う、お前、来て呉れて」

公爵嬢マリイヤは公爵の手を握り締めた。彼は、公爵嬢が手を締めたのに對して、極く微弱に顔を撃めた。公爵嬢は黙まつて居た、何を云つて宜いか分ら無かつた。公爵嬢は、二日前に公爵の上へ起つた變化を解した。彼の言語に於て、彼の聲調に於て、取り分け彼の眼——その冷たい、殆ど敵意を持つたやうな眼——に於て、公爵がこの世の有ゆる物を超越して居る事(生きて居る者には實に恐ろしい事)が、感じ得られたのであつた。彼には、生きて居る物を解することが、なかく骨が折れるらしかつた。が、彼が生きて居る物を理解し得無かつたのは、彼が、理解する力を失つた爲めでは無くして、彼は、生きて居る人が理解も爲無かつたし、又理解することも能き無かつた他の何物かを理解して居て、それが、彼の心を全く吸収して居た爲めであるらしかつたのだ。

「左様、實に不思議な運命が再吾々を一緒にならせたものぢやア無いか」と、彼は、沈黙を破つて、云つ

て、ナタアシヤに指し爲た。「その女が私の看病を爲て呉れて居るんだ」

公爵嬢マリイヤは公爵の言語は聞いた。が、彼が何を云つて居るのか解し得無かつた。彼、即ち、精到な優しい直覺力のある公爵アンドレーエが、何うして、まア、彼が愛し、又彼をも愛して居る娘の前で、其様な事が云ひ得られるものだらうか。若し、彼が生きて居るといふ考察を少しでも持つて居たのであつたら、其様な輕しめたやうな冷たい調子でその事を云ひ得る筈が無いのであつた。若し、彼が、自分が死んで行きつゝある事を知つて居るので無かつたのであつたら、何うして、彼が、その女を可憐さうだと思はずに居られたらうか、何うして、彼が、その女の前で其様な風に云へたのだらうか。それには、唯だ一つの説明があり得るきりであつた——即ち、今は最早其様な事は悉皆彼に取つては何でも無い事であつたのだ。それより他のもつと大切な何物か、彼に啓示されたのであるから、其様な事は、全く何でも無い事であつたのだ。談話は、冷々として居て、續かず、途切れ勝であつた。

「マリイはリヤザンの方から来たのですよ」と、ナタアシヤが云つた。

公爵アンドレーエは、ナタアシヤが彼の妹をばマリイと呼んだことには、氣が付か無かつた。そして、ナタアシヤは、公爵の前で公爵嬢をその名で呼んでから、始めて、自分でもそれに氣が付いた。

「それで？」と、公爵アンドレーエが云つた。

「莫斯科が、全く、悉皆、焼けて無くなつて了まつたといふ話を聞いたんださうです。その話では、それは、宛然……」

ナタアシヤは止まつた。話を爲ることは到底能き無かつた。彼は、確に、聞いて居やうと骨折つて居るのだが、聞いて居ることが何うしても能き無いのらしかつた。

「左様、焼けたといふことだね」と、彼は云つた。「實に残念な事だね」で、彼は、自分の前方を真直に見詰めて、指を口髭の邊へ何の氣も無しにさまよはせて居た。

「では、お前は伯爵ニコラアイに逢つたのだね、マリイ？」と、公爵アンドレエーは、二人を喜ばすやうな事を何か云はうと骨折つて居るらしく、不意に、云つた。「彼の人は、お前が非常に好きになつたといふことを手紙に書いてよこしたよ」と、彼は、自分が生きて居る人々に對して持つたさまざまな複雑な意義を覺ることが明かに能き無いらしく、唯だ何でも無く、落ち着て、言語を續けた。「若し、お前の方でも先方を好いて居るのなら、それは、至極宜からう……結婚するのが」と、彼は、自分が探して居た言語を到頭見出したのが嬉しいらしい態で、前よりもつと速い位に、云ひ足した。

公爵嬢マリイヤは彼の言語を聞いた、が、それは、彼が今は生きて居る有ゆる物から何れ程恐しく離れて居るのかといふことを示めすものとしての外、公爵嬢にとつては何の意義も持つて居無かつた。

「何故私のことなんぞ仰しやるの？」と、公爵嬢は平氣で云つて、ナタアシヤを一寸見た。ナタアシヤは公爵嬢の眼が自分に向けられて居ると感じて、公爵嬢を見無かつた。

再、三人とも黙まつて了まつた。

「アンドレエー、ねえ、貴下……」と、公爵嬢マリイヤは、不意に、震へる聲で云つて、「ニコルウシカに逢つてやつてくださるの？彼の兒は、何時も貴下の事を云つて居ますの」

その時始めて、公爵アンドレエーは、極く微弱に微笑んだ、が、公爵嬢マリイヤは、それが、喜悅の微笑でも無く、息子に對する愛情の微笑でも無くして、妹が、彼を感情にまで喚び覺ます爲めの最後の方法だと信じて居る所のものを、試みたのに對する平氣な、穩かな皮肉の微笑であるのを見て、慄然とした。

「左様、私はニコルウシカに逢ふのは大變嬉しいよ。彼の兒は健康かね？」

小さいニコルウシカが伴れて來られるといふと、彼は、オド／＼と父親を見詰めて、誰も泣いては居無かつたので、自分も泣きは爲無かつたのだが、公爵アンドレエーは彼に接吻した、けれども、息子に何を云つたものかそれが分ら無かつたらしかつた。

小兒が伴れ去られるといふと、公爵嬢マリイヤは、今一度、兒の所へ行つて、彼に接吻した。で、最早堪へられ無くなつて泣き始めた。

公爵アンドレエーは公爵嬢を凝乎と見て居た。

「お前はニコルウシカの爲めに泣くのかね？」と、彼は尋いた。

公爵嬢マリイヤは、涙の間から頷いた。

「マリイ、お前は福音……」と、彼は云ひ始めた、が、不意に止まつた。

「何と仰しやたの？」

「何でも無い。此所で泣いちゃア不可」と、彼は云つて、同なじ冷たい眼で公爵嬢を見た。

公爵嬢マリイヤが泣いた時に、公爵嬢は、ニコルウシカが父親の無い子に爲つて了まふことを泣いて居たのであるのを、公爵アンドレエーは、知つて居た。

非常な努力で、彼は再人生へ戻つて、自分をば公爵嬢たちの見地へ置かうと骨折つた。

「左様だ、彼者等には悲しく思はれるのは道理だ」と、彼は思つた。「が、實に單純なことだな」

「『稼す積す……されども神はなほ此等を養ふに』と、彼は、心の裡で云つた。で、彼は、それを一人に云ひ度かつた。「けれども、いや、彼者等は、彼者等自身の風に、それを解してしまふだらう、彼者等には解ら無からう。彼者等に解ら無いのは、彼者等が貯へて置く種々な感情——吾々には非常に重要であるらしく見える總ての吾々の感情、總て此等の考想——さういふ物が悉皆俺には無用だと云ふことなんだ。彼者等と俺とは何うしても理解し合へは爲無いんだ」で、彼は黙まつて居た。

公爵アンドレーエーの小さい息子は七歳であつた。彼は字が讀め無かつた——彼は何にも知ら無かつた。彼は、その日以後、さまざまのことに遭遇つて、知識や、觀察や、經驗を増した。が、彼が、その後になつて得た心的能力の全體をその時持つて居たにしたところで、彼は、自分の父親と、公爵嬢マリイヤと、ナタアシヤとの間に行はれた有様の總ての意義をば、彼がその時解した以上に、もつと真正に、もつと深く解することは能き無かつたのだ。彼は、さういふ事を全然解して居た。で、泣ずに、部屋を出て去つて、自分に隨いて出て来たナタアシヤの傍へ黙まつて、行つて、恥かしさうに美しい、夢みるやうな眼でナタアシヤを一すつと見た。彼の舉つた、蔷薇色の上唇が顫へた、彼は、頭をナタアシヤの身體へ凭せて、泣き出した。その日からといふものは、彼は、デッサレを避け、彼を可愛がるのだつたらう伯爵夫人を避け、一人で坐つて居るか、さうで無ければ、公爵嬢マリイヤや、ナタアシヤへ彼はその女の方が伯母より好きであつたらしかつた)に、一緒になつて、彼等に恥かしさうな、溫和しい甘え方を爲るかであつた。

公爵嬢マリイヤは、兄の傍を離れるといふと、前にナタアシヤの顔が自分に告げた事柄が全然解つた。公爵嬢は、最早、公爵の生命を助ける希望に就てナタアシヤに話しは爲無かつた。公爵嬢もナタアシヤと交代の方へ、心では、訴へて居た。

(十六)

公爵アンドレーエーは、自分が死ぬるであらうといふことを、知つて居たばかりで無く、實際、自分が死んで行きつゝあるのを感じて居た。彼は、最早半分死んで居たのを感じて居た。彼は、この世の有ゆる物から超越した感を経験し、自分の身體ちうに於て、不思議な、愉快な輕さを覺えた。焦れもせず、苦しみもせずに、彼は、それから來べくあつた物を待ちながら、臥て居た。恐ろしい物、永遠なる物、知られざる物、そして、遠き物——その存在をば、彼は、自分の生涯ちう一度も感じ止ま無かつた——その物が、今自分の直近くに來て居たのだ、で、その物が——彼が経験した、自分の身體全體の不思議な輕さに依つて——殆んど解し得られ、觸れ得られる物になつて居たのだ……

過去に於ても、彼は、最期を恐れたことがあつた。二度、彼は、死、即ち、最期の恐怖のその恐しく苦しい感を経験したことがあつた、が、今はそれを解し無くなつて居た。

一番最初に彼がその感を経験したのは、破裂音が彼の前で廻轉して居て、彼が刈株を見、灌木の叢を見、空を見て、死が自分に面して居ることを知つた時であつたのだ。



負傷を受けた後で、我に歸るといふと、それから、直ぐ、人生の痛い束縛から釋放されたかのやうに。彼の靈の裡には永遠な、自由な、そして、この人生に依屬して居無い愛のその花が咲き出るといふと、彼は、最早死の恐怖を更に持たず、最早死の考想を更に持た無かつた。

彼が、それから後送つた孤獨中の苦痛や、半譫妄のさういふ時間に、彼が、自分に向つて啓示された永遠の愛のその新しい原素へと、考想の裡で、入つて行けば行く程、知らずくの間、ますます遠く此の世の生活を離れるのであつた。

何物をも愛すること、何人をも愛すること、愛の爲めに何時でも自己を犠牲に爲ること、さういふ事は誰をも愛さ無いのと同じ事であり、この地上の生活を爲無いといふことになるのであつた。で、彼が愛のその原素へ遠く入つて行けば行くほど、ますます彼はこの人生を捨て、そして、愛が生と死との間に建て上げたその恐しい障壁をばますます全く無くなしてしまふのであつた。

最初の時分には、何時でも、自分が死ぬるのだといふことを憶ひ起すといふと、一人で斯う云つた、「いやその方が宜い」

が、ミイティンチイでの彼の夜、彼の半譫妄の裡で、彼が逢ひ度いと思つて居たその女が、彼の前に現はれ、彼の手へ唇を着けて、彼が、和いだ、幸福な涙を滾ほした時から以來は、極まつた一人の女に對する愛が、知らずくの間に、彼の心へ忍び込んだ。そして、彼をば再人生へ縛り付けた。で、それと共に、心を攪き亂す喜ばしいさまぐな考想が、彼の心へと歸つて來始めた、野戰病院で、彼がクラアギンを見た刹那を憶ひ起しても、彼は、その時の感情には戻ることが能き無かつた。彼は、自分が生きて居るか何うかといふ疑問で心を悩まされた。が、彼は、それを自問することを敢てし得無かつた。

彼の病氣は、その形體上の常列通りの経過を爲して居た、が、ナタアシヤが「この變化」と呼んだものが、公爵嬢マリイヤが着く二日前に、彼の上へ來た。それは、生と死との最後の精神上の争闘であつて、それでは、死の方が勝利を得たのであつた。それは、生命が、ナタアシヤに對する彼の愛の形に於て、依然彼に取つては貴いといふ不意の知覺と、知られざる物の前での恐怖の、最後の、そして、打勝たれたる突撃とであつたのだ。

それは、夕方起つた。彼は、晝食の後では大抵さうであつた通りに、少し熱の出た状態であつた、そして、彼の考想が殊に明瞭して居た。ソオニヤが卓子の所に坐つて居た。彼はトロくとした。彼は、不意に幸福な感を感じた。

「あゝ、彼女が來たな」と、彼は思つた。

ナタアシヤが、實際、音の爲無い歩で、その時恰度入つて來て、ソオニヤに代つて坐つて居たのだ。

ナタアシヤが彼の看病を爲だして以來は、彼は何時もナタアシヤが居れば、その居ることに就ての前に云つたやうな肉體的の感を感じるのであつた。

ナタアシヤは、彼の傍の低椅子で、靴足袋を編みながら、彼から蠟燭の光をかこふやうな風に、坐つて居た。ナタアシヤは、公爵アンドレーエが、或る時、靴足袋を編んだ年取つた乳母程良い看護婦は無いし、又編むことを見て居ると何と無く心の落ち着くものだと、いふことを、ナタアシヤに話した以來、編み物を覺えたのであつた。ナタアシヤの細い指が、針を、微弱な音を爲せて、速く動かした、そして、ナタアシヤの垂れた頭の夢見るやうな横顔が、公爵アンドレーエに見えた。ナタアシヤは一寸と動いた、糸の毯が膝から轉がり落ちた。ナタアシヤはハツとした、一寸と公爵を見返つた、そして、手で燈火を遮りながら、靜か

な、撓やかな、正確な舉動で身體を屈めて、毯を拾ひ上げて、前と同じ姿勢に戻つた。

彼は、少しも身動きせず、ナタアシヤを凝視して居た。そして、ナタアシヤが、動いた後で、深い呼吸を爲やうとしたが、さうは爲すに、注意深く堪へく呼吸を爲たのを見た。

ツロイツァ修道院で、二人は過去のことを話し合つた、そして、彼は、若し自分が生きて居られたら、二人を左様一緒に爲て呉れた自分の負傷に對して、何時までも神に感謝する、といふことをナタアシヤに話した、が、それ以來、一度も將來のことを話さ無かつた。

「さうなのだらうか、それとも、さうで無いのだらうか？」と、彼は、今ナタアシヤを見守り、針の微弱な鋼の音を聞きながら、思ひ惑つて居た。「運命が、俺を死なせる爲めにのみ、吾々を斯う不思議と一緒に爲たのであらうか？……人生の眞理が、俺に人生を虚偽で送つて了まはせる爲めにのみ、啓示されたのであらうか？。俺はこの世の何物よりもナタアシヤを愛するのだ。が、愛したところで、何うなるんだ？」と、彼は云つた、と、不意に、彼は、我知らず、自分が苦痛の時には何時もさう爲るやうに爲つて居た習慣で、唸つた。

その聲を聞くと、ナタアシヤは靴足袋を措いて、彼の顔へ少し近く身體を寄せた、と、不意に公爵の眼の輝つて居るのが見えたので、軽い歩で、彼の傍へ行つて、屈んだ。

「眠ては居無かつたの？」

「いや、私は、長い間お前を見て居た。私は、お前が入つて来ると、直ぐさう感じたんだ。お前より他には、同なじ和やかな平和……同なじ光を、私に與へて呉れる者は無いな。私は、嬉しさと泣き度かつた」  
ナタアシヤは、彼の傍へ尙近く寄つた。ナタアシヤの顔は、歡喜的の嬉しさで晴々として居た。

「ナタアシヤ、私はお前を餘まり愛し過ぎて居るんだ。この世の何物より多く」

「で、私？」。ナタアシヤは、寸時顔を背けた。「何故、愛し過ぎると云ふんです？」と、ナタアシヤは云つた。

「何故、愛し過ぎるといふのかね？……うん、お前は何と思ふね。お前の心で、お前の心全體で、何う感じるね。私は生きて居られるだらうか？、お前は何う思ふね？」

「それは確かだわ、それは確かだわ」と、ナタアシヤは、殆ど叫んで、熱烈な手眞似で彼の兩手を撃つた。彼は寸時黙つて居た。

「さうだつたら、何様なにか宜からう」。で、ナタアシヤの手を撃つて、彼はそれに接吻した。  
ナタアシヤは、幸福で、深く心を動かされて居た、が、直ぐ、それでは不可なかつて、彼は靜にさせて置か無ければならぬことを、憶ひ起した。

「でも、貴下眠無いんですね」と、ナタアシヤは、喜悅を抑へ付けて、云つた。「眠やうと爲てご覧なさい……何卒、ね」

彼は、ナタアシヤの手を握り締め、そして、放した。ナタアシヤは、蠟燭の傍へ戻つて、前と同じ所へ再坐つた。二度、ナタアシヤは、公爵を一寸と見返つた。その眼を迎へた公爵の眼は輝いた。ナタアシヤは靴足裂へ一生懸命に掛つた、そして、それを終まふまでは、何うしても見返るまいと、思つた。

彼は、實際直ぐその後で、眼を閉り、そして、睡いつて了まつた。彼は、長くは睡無かつた、そして、驚愕の冷汗で不意に眼を覺ました。

彼は、眠つて行きながら、始終考へて居た事——即ち、生のことや、死のこと——を依然考へて居たのであつ

た。で、一番多く死ぬことを考へて居たのであつた。彼は、自分が今死に餘程近くなつて居たことを感じた。

「愛？。愛とは何だらう？」と、彼は思つた。

「愛は死を妨げる。愛は生だ。俺が、理解する總ての物が、俺に理解の能きるのは、唯だ俺が人を愛するからなんだ。總ての物が在り、總ての物が存在するのは、唯だ俺が人を愛するからなんだ。總ての物は、唯だ愛の爲めにのみ結び付けられて居るんだ。愛は神だ、で、死ぬることは、俺に取つては、愛の微片であり愛の普通の永遠の根源へ戻つて行くことであるんだ」

さういふ考想は、彼に取つては、心持の好いものであつた。が、さういふものは唯だ考想に過ぎ無かつた。何物かが、さういふ物の裡には缺けて居た、その裡には、偏つた、個人的な、何物か、智力的な何物かがあつた。さういふ物は、自明で無かつた。そして、其所には、又、不安があり、曖昧があつた。

彼は睡いつた。

彼は、自分が實際臥て居たその同なじ部屋に臥て居るのだが、病は無く、全く健全であることを、夢に見た。さまざまの種類の人々、別に左したる所も無い無關心な人々が其所に居た。彼は、さういふ者どもと何か下らぬ事に就て、言ひ争つて居た。彼等は、何處かへ向けて出立しやうと爲て居るらしかつた。公爵アンドレーは、總て其様な事は何でも無い下らん事であつて、自分は、もつと大切な他の事で考へ無ければならぬことがあるといふ臆氣な感を持つて居た。が、尙且、何か空な警句を吐いて、彼等を驚かして居た。だんくくと、さういふ人々が、居無くなり始めた。で、最早その上、爲べき事で残つて居るのは、唯だ一つ戸を閉める事きりであつた。

彼は、起ち上つて、戸を閉めて、貫を下さうと、戸の方へ行つた。何も彼も、彼が戸を閉める間があ

るか、無いか、唯だそれ次第で、決するのであつた。彼は、行かうと爲て居た、急いで居た、が、脚が動か無かつた。で、彼は、戸を閉める間も無いことを知つた。が、それでも、さう爲やうと、苦しうにあらゆる努力を爲て居た。と、非常に苦しい恐怖が彼を襲つた。で、その恐怖は死を怖れる心であつた。戸の陰に「それ」が立つて居たのだ。

が、彼が、爲方無けに、拙態に戸の方へと挽いて行かうと爲て居るうちに、その恐しい何物かが、最早戸の彼方側を推して、戸を無理やりに開けやうと爲て居た。人間的で無い何物か——死——が、戸を無理やりに開けやうと爲て居て、彼は、戸を抑へて居無ければなら無かつた。彼は、最後の力を振つて、戸を掴んだ——それを閉めることは到底能き無かつたが、責めてそれを抑へて居やうと爲たのだ——けれども、彼の力は弱く、ぶきつちやうであつた。で、その恐しい物の推す力の爲めに、戸が開いたが、直ぐ又閉まつた。

今一度、「それ」は、外から戸を推しだした。彼の最後の、超人的の努力も無効である。戸の兩扉が音も無く開く。「それ」が入つて来る、で、それは死なのだ。

で、公爵アンドレーは死んだ。

が、夢の裡で死んだその途端に、公爵アンドレーは、自分が睡て居たことを憶ひ起した、で、自分が死につ、あつたその途端に、彼は努力を爲て、眼を覺ました。

「左様だ、彼が死だ。俺は死んだ。そして、眼が覺めたんだ。左様だ、死は眼覺めることなんだ」

さういふ考想が、不意の光を以つて、彼の心へ、閃めいた、そして、その時までは知られざる物を隠して居た幕帷が、彼の精神上的の視線の前で、掛けられた。彼は、云はば、彼を拘束して居た或る力から釋放されたやうに、感じたのであつた。そして、身體全體のその不思議に輕くなつたことに、氣が付いた。その輕く

なつた感じは、その時以来、彼の心を離れ無かつた。彼が冷汗を掻いて覺きて、臥椅子の上で動くといふと、ナタアシヤが傍へ来て、何うしたのだと、彼に尋いた。

彼は、返答し無かつた。で、ナタアシヤの云ふことが解らずに、不思議な眼容で、ナタアシヤを見た。それが、公爵嬢マリイヤが着く二日前に、公爵アンドレーエの上に来た變化であつたのだ。醫者は、身體を衰弱させて行く熱が、その日から、油断のならぬ徴候を呈したことを、云つた。が、ナタアシヤは、醫者の言語などには一向構は無かつた。ナタアシヤは、恐しい精神上の徴候を見た。それが、ナタアシヤに取つては、一層變に確なものであつたのだ。

その日、眼が覺めたと一緒に、公爵アンドレーエに取つては、生からの覺醒が始まつた。で、生の長さは夢の長さに對する睡からの覺醒より長いものでは無いやうに、彼には思はれたのであつた。

この比較的に緩い覺醒には、烈しいとか、恐しいとかいふことは何も無かつた。

公爵アンドレーエの最後の日及び時間は、何でも、無い平凡な風で過ぎた。彼の傍を少しも離れ無かつた。公爵嬢マリイヤもナタアシヤも、それを感じた。二人は泣きも爲さず、慄へも爲無かつた。で、末期に近くなると共に、二人とも、公爵アンドレーエに侍して居るのでは無く（彼は最早居無くなり、彼は、自分たちからずつと遠方へ行つて了まつて居て）彼に最も近い記念物——即ち、彼の屍骸——の傍に附いて居るのだと、いふことを感じた。

二人のさういふ感情は非常に強くつて、死の外形的な、恐しい側が、二人の心を動さず、そして、二人は自分等の悲痛を起させることを必要だと思は無かつた程であつたのだ。二人は、彼の前でも、彼の側を離れた所でも、泣か無かつた、二人は、決して、彼のことを話し合ひも爲無かつた、二人は、相互に了解して居

た事柄は、言語で云ひ表はせるもので無いのだと、感じて居た。

彼等は、二人とも、彼が、緩然と、自分たちから、だん／＼遠ざかりつゝあるのを、見た。そして、それが左様あるべき事であると共に、又善い事であるのを、知つた。彼は、贖罪式も、最後の塗膏式も受けた、誰もが、彼に最後の別れを告げに来た。

彼の息子が伴れて來られるといふと、彼は、その子に唇を接し、そして、傍へ向いて了まつた。が、それは、彼に取つて、それが苦しかつたとか、悲しかつたとか、いふのでは無くして（公爵嬢マリイヤとナタアシヤには、それが左様だと解つたのだが）、唯だ、彼は、自分が他から爲せられることを悉皆爲つて了まつたと想像したからであつたのだ。が、彼は、息子に祝福を與へると、告げられた、彼は、その爲ると云はれた事を爲した。そして、未だその他に自分が爲無ければならぬことが、何か有るのか、何うか、尋かうと爲るかのやうに、四邊を見返つた。

靈魂の去つた肉體が、その最後のものがきを終つて了まひつゝあつた時に、公爵嬢マリイヤとナタアシヤも、傍に居た。

「お亡くなりだ」と、身體が暫時動か無くなつて、自分たちの前で、冷たくなりだしてから、公爵嬢マリイヤが云つた。ナタアシヤは傍へ寄つて、死んだ眼を一寸と見、そして、急いでそれを隠らせやうと爲した。ナタアシヤは、その眼を隠らせた、それに接吻は爲無かつた。が、公爵アンドレーエに最も近い記念物であつた物の所で、依違つて居た。

「何處へ彼の人は行つて了まつたんだらう？。彼の人は今何處に居るんだらう？……」  
遺骸が衣服着せられ、洗はれて、卓子の上の棺の中に横はつて居た時に、誰もが、彼に、別を告げに来た、

そして、誰もが泣いた。  
 ニコルウシカは、彼の胸を掻き裂くやうに苦しめて居た何うして宜いか分ら無い心持の爲めに、泣いた。  
 伯爵夫人とソオニヤは、ナタアシヤを愾然に思つたが爲めに泣き、公爵アンドレーが亡くなつて了まつた悲哀の爲めに、泣いた。  
 老伯爵は、自分も亦直きに同なじ恐ろしい路へ行か無ければなら無いことを感じたが爲めに、泣いた。  
 ナタアシヤと公爵嬢マリヤも、今は泣いた。が、二人は、自分等自身の悲愁の爲めに泣いたのでは無かつた。二人は、自分たちの眼前で爲し遂げられた死の單純な嚴肅な神祕に對して、自分等の心を満した感情と畏怖との爲めに泣いたのだ。

### 第三章

(一)

諸現象のさまざまな原因の結合は、人間の智力の擱み得る限りでは無い。が、原因を求めやうとする衝動は、人間の心の裡に天然に在るものなのだ。で、人間の智力は、一現象の條件と爲つて居る諸事情が非常にさまざまで複雑であることを少しも覺らずに（その事情の何れ一つを取つても、別々にその現象の原因だとして受け納れることが能きるので）、手當り次第の一番解り易い最も原因らしい物を捉まへる。そして、これこそ原因なのだといふのだ。

一體、歴史上の事件では——それでは、人間の行爲が觀察の主題になるのだが——其所では、何が原因だといふことになる、その最も原始的な觀念は、神の意が原因だといふのであつたが、それから、その次の時代になると、その原因は、歴史的の前景に立つて居る人々——即ち、歴史上の大人物等の——意志だといふことになつて居た。

が、如何なる歴史上の事件でも、その表面の下を見さへすれば、即ち、その事件に與かつた人々の全集の運動を見さへすれば、誰にでも、歴史上の大人物の意志は、集群の行爲を制驭するどころでは無く、反つて集群に始終制驭されて居ることが、直ぐ分るのだ。

歴史上の事件が、その孰れの風に解釋されやうとも、何うでも宜いことでは無いかと、思ふ人はあるだらう。が、ナポレオンがさう爲せやうと思つたが爲めに、西の人民が東へと進軍したのだと云ふ人と、さういふ

運動は、それが来らざるを得ないことであつたが爲めに、起つたのだと云ふ人との間の、差違は、地球が制止して居て、他の行星が地球を廻るのだと主張した人々と、自分等は、何ういふ理で地球がその場所に置かれて居るのかは知らぬが、地球の運動や他の行星の運動を支配する法則があることは知つて居ると、云つた人々との間の差違と同一なものだ。

歴史上の諸事件の諸原因といふものは、總ての原因に對する一原因といふ外には、何も無いし、又有り得るものでも無いのだ。が、さういふ諸事件を支配する法則はある。その法則は、一部分は未だ知れて居無いものだが、一部分は吾々の窺ひ得るものなのだ。斯ういふ法則を発見することは、吾々が一人の人の意志のうち、歴史上の事件の原因を見出さうと爲ることを全く廢めて了まふ時になつて、始めて能き得ることになるのだ。それは、丁度行星の運動の法則を発見することが、人々が地球が靜止して居るといふ觀念を捨て、了まつて以來、始めて能き得ることとなつたのと、同一な譯であるのだ。

ボロディノオの戦の後、莫斯科が陥つて、焼けてから後、歴史家の考想では、千八百十二年の戦争の最も重要な事件は、露西亞軍が、リヤザン海道からカルウガ海道へ、それから、タルティノオ陣營へと、行つた行動、即ち、所謂のクラスナアヤ・バアフラの後方での斜行運動だといふのである。

歴史家等は、天才のこの一措置の功をばさまぐな人に歸せしめて居り、そして、誰にその功が眞正に歸するのといふことに就て、論戰して居る。外國の、而も、佛蘭西の、歴史家たちさへ、この側面行進のことを云ふ時には、露西亞の將軍等の天才を承認するのだ。

けれども、軍事の著者等及びその説に率られる人々が、何故、この斜行運動が、或る一人の人が、露西亞

を救ひ、ナポレオンを滅す爲めに、深く計畫んだ策略であつたのだと、推定したのであらうか、これは實に解ら無いことである。

第一に、何ういふ點に、この行進の深い智慧や天才があるのだか、一向解ら無い。何となれば、軍が、攻撃されて居無い時に、居るべき一番良い地位が、糧食の供給が一番多い場所であるのだといふことを推測するのは、別に大した智力上の努力を要することでは無いからなのだ。所で、誰にでも、十三歳の愚鈍な男の兒にでも、莫斯科から退却した後での、千八百十二年の軍に取つての一番利益の多い地位は、カルウガ海道に在つたことは、推測し得られた筈なのだ。で、第一に、歴史家等が、何ういふ結論に導かれて、この運動のうちに何か深い智慧を認めたものなのか、誰にも解し得られ無いことなのだ。

第二には、何故、歴史家等が、この運動にまで、露西亞の救はれた事と、佛蘭西軍の覆滅とを歸するのであるか、それは更に一層解ら無いことなのだ。何となれば、他の諸事情が、それに先立ち、若くは伴ひ、若くは次いだのであつたら、この側面行動が、尙且露西亞軍の全滅となり、佛蘭西軍を救ふこととなつたに違ひ無いのであつたからなのだ。露西亞軍の地位が、實際、その行進の時分から良くなり始めたところ

で、それが爲めに、その良くなつたことはその行進の結果なのだとは、決して云へ無いのだ。

それ以外の事情が無かつたとしたら、その斜行運動は、單に無益であつたばかりで無く、それが爲めに、露西亞軍の滅亡を來したかも知れ無いのだ。

莫斯科が焼け無かつたら、何う無つただらうか？。ミュラアが露西亞軍を見失は無かつたら、何うだつたらうか？。ナポレオンが不活動で居無かつたら、何うだつたらうか？。ベニグセンや、バルクレエーが勸たやうに、露西亞軍が、クラスナアヤ・バアフラ附近で戦を開いたとしたら、何うだつたらうか？。

それから、露西亞軍がニアフラの後方へ行進して居る時に、佛蘭西軍が露西亞軍を攻撃したのであつたら、何う無つたのだらうか？

又後になつて、ナポレオンが、タルティノオに達して、彼が、スモオレンスクで露西亞軍を攻撃した精力の十分の一でも、露西亞軍を攻撃したら、何うだつたらうか？

佛蘭西軍が、彼得堡へ行進したら、何う爲つたらうか？……！

斯ういふ假定の孰が事實であつても、その斜行運動は、安全の方へどころか、滅亡の方へ導くものであつたのだ。

一番解ら無い第三の點は、下の如きものだ。即ち、史學者等は、この行進が、誰でも一人の功に歸すべきもので無いことや、誰も如何なる時にもその行進を先見した者の無かつたことや、この運動は、フィイリへの退却と同じで、實際、全體としては一度も誰にも考案されずに、一步一步に、一事件一事件を追ひ、利那利那を追つて、最もさまざまの事情の無數の集團から起つて来て、それが、能きあがつた事實となり、過去の事件と爲るに至つて、始めて全體として觀念されたことなどを、認めることを故意に拒んで居るやうである。

フィイリの會議では、露西亞人間に受け容れられて居た考案——實際勿論のこと、されて居た方針——は、直線に後へ、即ち、ニイジニ海道へ、退却することであつた。この證據は、その會議での投票の大多数が、その方針を賛成して居たことなのだ。それに、會議の後での、總司令官と、兵站部長のランスキイとの名高い談話が、その尙一層著しい證據なのだ。

ランスキイは、軍に對する重なる糧食が、オーカ川に沿うて、ツウラやカザンの諸縣に貯へられて居るのだから、若し、軍がニイジニ海道を退却して行くのであつたら、オーカ川を超える輸送は初冬には不可能であるので、軍はその川の爲めに糧食から斷り離されて了ふことになるといふ意見を總司令官の前へ提出した。

これが、最初には一番自然な方針らしく見えたもの、即ち、ニイジニ海道に依つての退却の策を、捨て無ければなら無かつた第一の證據なのだ。

軍は、その糧食の供給にもつと近く、リヤザン海道に依つて、もつと南の方を辿つたのであつた。

その後になつて、佛蘭西軍が露西亞軍を見失つて、不活動になつて了まつたことや、ツウラの武庫を守り度いといふ考慮や、それから、取り分け、糧食の供給地方に近く居るといふ利益が、軍をば尙一層南方、即ち、ツウラ海道へと向はせたのであつた。

ニアフラの後方をツウラ海道へと、強行進で、横斷してから、露西亞軍の將軍たちは、ボドオルスクに止まつて居る積りであつて、タルティノオ陣地のことは、少しも考案に無かつたのであつた。けれども、無數の事情、その中で、佛蘭西軍のその地方への再現や、戦を開かうといふ計畫や、就中、カルウガに於ける糧食の饒多、我軍をば、尙一層南方へ向はせ、ツウラから、カルウガ海道へ、それからタルティノオ、即ち糧食の供給地との聯絡線の眞中の地位へ、行かせたのであつた。

何日莫斯科が放棄されたかといふ間に答へたることが不可能であるのと恰度同様に、タルティノオへと軍を動かすことが、何日決せられ、又、誰に依つて、決せられたかといふことを、瞭乎云ふことも不可能なのだ。

軍が、無数な無限小な力の働の爲めに、タルティノオへ持つて來られて了まつてから、始めて、人々は

それが自分等の望んで居た方針で、それがすつと前から然るべき方針だと先見して居たものなのだと、自身で論断し始めたのだ。

(一)

名高い斜行運動といふのは、唯だこれだけのものであつた——  
 即ち、佛蘭西軍から眞直に退却しつゝあつた露西亞軍は、佛蘭西軍の攻撃が止むや否や、その方向から外へ向き、そして、自分の方が追蹤されて居無いのを見て、糧食の供給が饒多であるので、彼等が引き寄せられる地方へと、自然に動いたのだ。

吾々が、露西亞軍の頭に天才の將軍たちが一人も居無くつて、軍が何人にも率ゐられずに單獨で行動したと假定して見たところで、さういふ軍は、必要品の最も善く具はつた、そして、糧食が最も饒多であつた地方をば、半圓を爲して、行進して、莫斯科の方へと再動き戻るより外何も爲無かつたらうと思はれるのだ。

ニイジニ海道から、リヤザアン、ツウラ、カルウガ海道へと行くこの斜行運動は實に自然なものであつて、その方向は、露西亞軍から逃げ出した劫掠者の諸隊が取つた方向であるし、又、彼得堡の官憲がクツウゾフに取れと主張した方向であつた位であつたのだ。

タルティノオで、クツウゾフは、リヤザアン海道へ軍を動かすことに對して、皇帝から殆ど譴責のやうなものを受けた。で、彼は、カルウガに面した所に陣地を占めろと命ぜられたのであつたが、皇帝のその手紙がクツウゾフに達した時分には、彼は、最早恰度その陣地に就いて居たのだ。

全戦役の間、及びボロディノオの戦で、受けた衝動の方向へと、跳ね返つて、露西亞軍なる球は、その

打撃の力が自然に盡きて了まつて、新たな力が少しも來無くなるといふと、自分に取つて自然であるところの方向を取つた。

クツウゾフの功績は、所謂軍事上の天才といふやうなものうちには少しも無く、何等の軍略的行動に在つたのでは無くして、唯だ、彼一人が、起つて居た事件の意義を掴み得たといふ事實に在つたのである。

唯だ、彼のみが、その時でさへ、佛蘭西軍の不活動の意義を掴んで居た。彼のみが、ボロディノオの戦が勝利であることを、主張し續けて居た。彼のみ——が總司令官としてその地位からして、熱心に戦を望む第一の人であるべきものと思はれる人でありながら——彼のみが、彼の力の有らん限りを盡して、無益な戦を爲せぬやうに、露西亞軍を抑へて居るやうに爲て居たのであつた。

ボロディノオで傷を負つた野獸は、飛んで行く獵人が、彼を置いて行つた場所に横はつて居たが、生きて居るのか、強いのか、それとも、弱きを裝つて居るのか、獵人は知ら無かつた。  
 不意に、呻吟が、その動物から聞えた。

その負傷の野獸、即ち、佛蘭西軍の、爲方の無い苦境に立つて居ることを漏したその呻吟は、和議の申込を以て、クツウゾフの陣營へ、ロオリストンの差遣されたことであつた。

ナポレオンは、正當なことが正當だといふのでは無く、自分の頭へ出て來た事なら何様な事でも正當な事であるといふ確信で以て、自分の頭へ出て來放題の言語、即ち、何の意味も無い言語を、クツウゾフへと書いた。

「モシユウ・ル・フランス・クツウゾフ」と、彼は書いて、「予は、種々の有益なる問題に就て、足下と



語しめんが爲めに、足下の許へ、予の副官の一人を差遣する。予は、殿下が、彼が云ふところの物を、殊に彼が、予が足下に對して長く抱き居るところの尊敬と、特別の尊重との感情をば云ひ表はす時に、それを信ぜられんことを望む。この手紙はそれ以外何の目的も無きものなるを以て、予はこゝに、神が足下をその神聖なる、全能なる保護の下に置き給はらんことを、神に祈り置くものである。

ナポレオン（自署）

莫斯科にて、千八百十二年、十月三十日

「如何なる種類の和議でも、その和議の最初の煽動者と予が見なされるのであつたら、予は後世の爲めに呪はるべし。斯の如きものが、我國民の實際の精神である」と、クツウゾフは答へた、そして、依然全力を盡して、軍を進撃させ無いやうに抑へて居た。

莫斯科を劫掠すること佛蘭西軍が送つた一月、タルティノオで靜に陣して居ることで露西亞軍が送つた一月は、兩軍の關係的の力に於ての變化を持ち來した。そして、それは精神及び兵數の變化であつて、それが悉く露西亞軍の利益であつた。

佛蘭西軍の地位及び兵數は、露西亞軍には知れて居無かつたけれども、兩軍の相對的の力が變化するや否や、多數の徴候が、攻撃を爲す事の何うしても避け得られ無いことを示めし始めた。

この結果を來らせることに與かつた諸原因のうちには、ロオリストンの使命もあれば、タルティノオで糧食の饒多であつた事もあれば、佛蘭西軍の不活動と紀律の弛廢とに關して八方から來つゝあつた諸報告もあれば、新募兵に依つて我軍の補充された事もあれば、好天氣もあれば、露西亞兵が長く休息した爲めもあれ

ば休養の後では何時でも軍隊間には起つて來る、それを爲る爲めに自分等が集められた爲事を爲度くつて堪まら無くなる心持もあれば、自分等が最早長いこと見無かつた佛蘭西軍を見度いといふ好奇心もあれば、露西亞の前哨隊が、タルティノオに陣して居た佛蘭西軍の間へ突撃を行つたといふやうな勇猛の元氣もあれば、農夫等や、野武士等の集團が佛蘭西軍に對して得た勝利の報知もあれば、それで起された羨の念もあれば、佛蘭西軍が莫斯科に居る限りは誰の心にも抱かれて居た復讐の念もあつたのだが、就中、最も強かつたのは兩軍の相對的の力が變はつて了まつて、我軍の方が優勢であるのだといふ、何の兵卒の心にも育ちつゝあつた漠然とした感であつたのだ。

兩軍の相對的の力が實際變つて居たのだ、で、進撃は何うしても避け得られ無いことに爲つた。で、直ぐ針が字板を一巡するといふと、時計の鐘が打つて、奏し始めるのが確であるのと全く同様に、この變化は、高い連中の輪の中の輪の増し行く活動や、忙しさが、動きの裡に、反射させられたのであつた。

（三）

露西亞軍は、クツウゾフ、彼の幕僚、及び、彼得堡から皇帝に因つて、統率されて居た。

莫斯科放棄の報知が未だ彼得堡へ達し無かつたうちに、全戦役に對する詳細な方略が、書きあけられて、それに依つて行動しろといふので、クツウゾフの許へ送られた。この方略は、莫斯科が未だ我軍の手に在るのだといふ假定の下に立てられたものであるに拘らず、それが、參謀部で可決されて、實行されるべき方略だとして受け容れられたのだ。

クツウゾフは、唯だ、遠方からの指令は何時も實行し難いものであることを、書いて遣つた。で、何等か

の困難が起つた場合には、それを解く爲めだといふので、新たな命令が新たな人々に携さへられて、やつて来た。そして、さういふ人々の任務は、クツウゾフの舉動に注意して居て、それを報告することであつた。さういふ新たな権能者を外にしても、露西亞軍の幕僚の將軍たちが全く變つて了まつて居た。殺されたバダラアチオンや、怒つて退隠したバルクレエーの地位が補充されなければなら無かつた。

AがBの地位に置かるべきか、BがDの地位に置かるべきか、若くは、他方では、DがAの地位に置かるべきか、などいふ問題が、さういふ移動がAや、Bや、Dやの満足以外何物かに影響でもあつたかのやうに、非常な眞面目さで、熟考された。

自分の幕僚長のベニグセンとクツウゾフが仲の悪るかつたことや、皇帝の信任を得た顧問の居たことや、それから、以上のやうな新命任の爲めとで、本營に於ける諸黨派の争は、非常に複雑であつた。AはBの地位を覆がへさうと爲、DはCの地位を覆へさうと爲て居るといふ風で、誰も彼も、有らゆる有り得べき結合や、錯列で、働いて居たのであつた。

さういふ相尅する潮流の裡で、陰謀の目的は、大抵の場合、戦を統率しやうとすることであつたのだ。で、實際は、戦は、さういふ人々の行動とは全く無關係な避け得られ無いそれ自身の進路——さういふ人の計畫とは決して一致無いで、群集の裡で相互に働き合つて居る諸力の結果であるところの進路——に従がつて行きつゝあるのに、さういふ人々は、誰も彼も、自分等が戦争の進行を制馭して居るのだと、想像して居るのであつた。相互に妨げ合ひ、矛盾し合つて居るさういふ總ての諸計策が、起るべき筈であつた事柄の正確な反射だとして、高い連中の裡では、受け容れられて居た。

「公爵ミハイール・イラリョオノヴィイチ」と、皇帝は、十月二日に書いた——その手紙は、クツウゾフが、タルティノオの戦の後に受け取つたのだ——

「九月の二日から、莫斯科は敵の手にあるのだ。足下の最後の報告は二十日附である、所で、それ以來、今に至るまでも、敵に向つて行動して、古都を救はうとする企畫は少しも施されずに、足下は、反つて、足下の最後の報告に依れば、尙遠く退却して居る。セルブウホフは、今は、敵の一枝隊の爲めに占領されて居る、で、名高い武庫があるので、我軍に取つては、非常に大切なツウラも危険である。

將軍ウインツェンゲロオデから来た報告に依れば、十萬の兵數の敵軍が、彼得堡海道をば行進して居るといふのである。何千かの一軍が、最早既にツミイツロフの附近に達した。第三の軍は、ヴラディミール海道を進んで居る。それから、第四の侮どるべからざる兵數の軍が、ルウザとモザアイスクとの間に駐軍して居る。ナポレオン自身は二十五日には、莫斯科に居つた。

敵の兵力が、斯ういふ諸枝隊に割られ、ナポレオン自身は、彼の親兵を率て莫斯科に居る、斯ういふ事實でありながら、足下に對峙して居る敵の兵力が、足下に攻勢を執らせ無いほど強いといふことが、有り得ることなのか？

又更に、足下は、敵の枝隊の爲めに、で無くも、高々、足下の率て居る軍に負つた軍團の爲めに、追撃されて居るのだと、思ふ者も、何うしても有りさうに、思はれるのだ。

足下は宜しく、斯ういふ諸事情に乗じて、足下の軍には兵力の甚しく劣つた敵軍を攻撃して、彼等を殲滅するか、さ無くも、彼等を退却させて、今敵軍に占領されて居る地方の大部分を吾々の手に保ち、そして

それに依つて、ツウラ及び國內の他の諸市より總ての危険の虞を除くべきでは無かつたらうか？  
 若し、敵が、吾々の方に於ては多數の兵をば備ふることの不可能なこの都を脅かす爲めに、彼得堡へ侮り難き兵を送り得るとしたらば、その罪は足下の當然負ふべきものである。何となれば、足下の率ゐる軍を以てして、熱心に、斷乎たる行動を執らば、斯の如き災厄を避くるの資は、十分足下の手中に在る筈であるからである。

記憶せよ、足下に、莫斯科の陥落に就ては、屈辱を被りたる國に對して、尙責を負はざるべからざることを。

予が足下に賞を與ふるに躊躇し無かつたことは、足下の既に經驗した所である。予のその躊躇せざる心は今も尙少しも減じて居らぬ。けれども、露西亞と予とは、足下の智力や、足下の軍事上の才能や、足下の統率せる軍隊の勇氣が吾々に對して保證するところの有らゆる精力と、決斷と、成功をば、足下に向つて、豫期する權利を有つて居るのだ。

が、兩軍の相對的の力の變化が、今では、彼得堡での意見の裡に、現はれて居ることを證明するこの手紙が、未だ途中にあるうちに、クツウゾフは、軍を抑へて居ることは能き無くなつて、戦が既に行はれて居た。

十月の二日に、哥薩克兵のシヤボヅァーロフが、偵察に出て、一匹の兎を撃ち、今一匹に傷を負はせた。シヤボヅァーロフは、獲物を追つ駈けるのに、氣を取られて、つい森の奥まで入り込んで行つたが、彼は、其所で、前哨をも置かずに、陣して居たミユアラの軍の左翼へ行き掛つた。

その哥薩克兵は、今一歩で佛蘭西人に捕虜にされる所であつたといふ物語を、大笑で、朋輩に爲た、その物語を聞いた少尉が、又それを上官に話した。

その哥薩克兵は喚び出されて、尋かれた。哥薩克兵の將校等は、それに乘じて、佛蘭西軍から幾匹か馬を奪はうと思つたが、そのうちの一人、軍の上長官の或る人々と親しかつたのが、總司令部の一人の將軍に、その事件を話した。

總司令部では、その頃での状態は緊張し切つて居た。二三日前にエルモオロフは、ベニグセンの所へ行つて、總司令官に對する彼の勢力を用ひて、敵軍攻撃が始まるやうに爲て呉れと頼んだ。

「私が若し貴下が何ういふ人だか知ら無かつたとしたら、私は、貴下がさういふ結果を望ま無いので、斯う頼んでおいでなすつたのだと思つたでせう。私が殿下に一つの方針を勧めれば殿下は必定それとは反對な方針を採用されるのですから」と、ベニグセンは、答へた。

哥薩克兵が齎らした報知は、偵察隊に依つて確められて、時機が熟して居たことを全然證明した。張り切つて居た糸が斷れた、時計の齒車がクル／＼廻つた、そして、鐘が打ち始めた。總て彼の——持つて居ると想像されて居た——力や、彼の智力や、彼の經驗や、彼が人間といふものを知つて居たことなどに拘らず、クツウゾフは、皇帝へその問題に就て、自分から直接の報告を出さうとして居たベニグセンからの書面や、その攻撃開始が何の將軍の願望であつたことや、それが皇帝の望であると彼等が推定して居たことや、それから、哥薩克兵の齎した報知などを考量して、最早その上、その避け得られ無かつた行動を抑止して置くことは能き無かつた。で、自分では無益な有害なことだと思つて居た事件をば實行する命令を出した——即ち、實際は、最早出來あがつて居た事實に對する承認を與へたのだ。

(四)

ベニグセンが提出した伺ひ書や、敵の左翼が何等の警戒も爲て居らぬといふ哥薩克兵の齎した報告は、進撃の合圖を爲る事の何うしても避け得られ無いことを示して居た最後の徴候に過ぎ無かつた。そして十月の五日に進撃する手筈になつたのであつた。

四日の朝、クツウゾフは、兵の配置に署名した。トオルは、それをエルモオロフに讀んで聞かせて、それを實行することに關するそれから先の命令を統轄して呉れとエルモオロフに頼んだ。

「宜しい、宜しい、だが、今は時間が無い」と、エルモオロフは云つて、家の外へ急いで出て行つた。トオルが建てた諸隊の配置は、非常に立派なものであつた。その配置は、アウステルリッツでのやうに、書かれて居た——但、獨逸語では無かつたが——

「第一隊團は、かくくの所に進軍し、第二隊團は、此の所を占領する」といふやうな風に。

紙上では、さういふ隊團は悉皆、極められて居た時間に、その豫定地點に就いて、敵を全滅したことになる。何れも彼も、總ての斯ういふ場合と同じやうに、綿密に前以つて考へてあつた。所が、總ての斯ういふ場合と同じやうに、一隊團も、正當な時間に、正當な場所へ達したものが無かつたのだ。

方略の寫が十分な數だけ出来るといふと、一人の將校が喚び出されて、エルモオロフが、それに従つて命令を出すやうに能きる爲めに、エルモオロフの許へ遣られた。

クツウゾフの附將校であつた近衛騎兵のその若い將校は、自分に托されたその任務の重要なのに大喜びになつて、エルモオロフの宿舍へと向つた。

「お居でになりませんよ」と、エルモオロフの從僕がその將校に云つた。

近衛騎兵の將校は、エルモオロフが屢く行つて居た他の將軍の宿舍へと向つた。

「いや、お居でになりません、家の將軍も不在です」と、云はれた。

將校は再馬に乗つて、又他の將軍の許へと乗り去つた。

「いや、お居でになりません」

「遅延の爲めに、俺に責任が出来さへし無ければ宜いけれども。何うも困まつたな」と、將校は思つた。

彼は、陣地ぢやを乗り廻した。一人は、エルモオロフが他の將軍たちと一緒に馬で出掛けて居るのを見た。と、云ひ、今一人は、エルモオロフは、今頃は最早宿へ歸つて居るに違ひ無い、と云ふのであつた。

將校は、晝食を食ひに止まりも爲ずに夕方の六時までエルモオロフを探し廻つた。エルモオロフは、何處にも居無かつた。誰も彼が何處に居るか知つて居る者が無かつた。將校は同僚の許で、大急ぎで食事をしてミロラアドヴィイチに逢はうと、前衛へと駆け戻つた。

ミロラアドヴィイチも、宿に居無かつたけれども、將校は其所で、ミロラアドヴィイチは將軍キイキンの宿での舞踏會に行つて居るし、又、大抵エルモオロフも其所へ行つて居るだらうといふことを、聞いた。

「が、其は何處ですか？」

「エチキノオです、彼方」と、哥薩克兵の將校は、云つて、遠くの方にある田舎家を指して見せた。

「彼所ですか。我軍の戦線外の」

「仲間二聯隊が、前哨へ出されて、今は、騒ぎの眞最中さ、盛んな事だね。樂隊が二團と、謠歌手の三團が行つてゐるんです」

將校は、我軍の戦線を越えて、エチキノオへと乗つて行つた。餘程遠くから、彼は、合唱して居る兵卒の舞踏樂の賑かな音を聞いた。

「牧場で……牧場で」と、いふのが、聲々の叫びに消される笛や、糸の樂器の音と共に、聞こえた。

將校の元氣も、又、その音で、昂つた。が、彼は、自分が托されて居たその重要な使命を果たすのに其様な隙どつたのが、自分の罪にされては大變だと、甚く恐れて居た。

最早、やがて晩の九時であつた。彼は、馬を下りて、佛蘭西と露西亞の兩戦線の間で、損害を受けずに居た大きい領主館の入口へ歩いて行つた。従僕等が、立關の室や、飲食室で、酒や食物を持つて駈け廻つて居た。合唱隊が、窓の下に立つて居た。

將校は戸口へと案内された。と、彼は、倏忽、軍の重立つた將軍たちを見た——その中に、エルモオロフの大きい、堂々とした姿も見えた。總ての將軍たちは、半圓を造つて立つて、皆制服の釦を外し、顔が赤く勢付いて、聲高く笑つて居た。部室の真中で、赤ら顔の、奇麗な背の低い將軍が、勢好く、好い姿勢でツレバクを踊つて居た。

「は、は、は。えらいぞ、ニコラアイ・イヴァノヴィチ。は、は……」

將校は、其様な場合へ、重要な用事を以つて、飛び込むのは、重ねく悪るいことだと感じた。で、待つて居るところであつた。が、將軍の一人が彼を見付けた、そして、來た用向を聞いて、エルモオロフに話した。エルモオロフは、顔を擧めて、將校のところへ出て來て、彼の物語を聞いて、何とも云はずに、書面を將校から取つた。

「彼の男が宿に居無かつたのは、偶然だつたと、君は思ふかね？」と、總司令部附であつたその將校の同僚が、その晩エルモオロフの物語を爲ながら、云つた。

「それは悉皆實に馬鹿々々しいことなんだ。彼事は、故意とやつたことなんだぜ。コノヴェニツインを困まらせる爲めだつたんだ。見給へ、明日は餘つほど面白いことになるから」

(五)

よほくの老人、クツウゾフは、次の日夙く起して貰つた。で、早朝、祈禱を云ひ、衣服を着、それから自分は賛成し無い戦で命令し無ければなら無いといふ不愉快な知覺を以つて馬車に乗り、そして、タルテイノオの後方五露里のレタアシエフカから、攻撃する諸隊團が集合する筈であつた場所へと、馬車を驅つた。クツウゾフは、馬車を進めながら、睡いつて、再起きた、そして、右の方の音は、砲の音だか、何うだか、戦鬨が未だ始まら無いか、何うだか聞かうと、耳を澄まして居た。

が、何も彼も、未だ閑然として居た。濕つほい、曇つた秋の日は、明けかゝつて居た。タルテイノオに近づいて居るといふと、クツウゾフは、自分を通つて居る路を横ぎつて、騎兵が、川へと彼等の馬を引いて行つて居るのを認めた。クツウゾフは、その騎兵等を見て、馬車を止めて、何の聯隊の者だか、尋ねた。その騎兵等は、すつと先頭で埋伏して居るべき筈であつた隊團の者であつたのだ。

「間違かも知れん、多分」と、年取つた總司令官は思つた。が、もう少し先方へ行くといふと、クツウゾフは、歩兵の數聯隊が、武器を地に組み合せ、兵卒等が下袴だけになつて、粥をこしらへたり、薪料の木を取つて來たりして居るのを見た。

彼は、彼等の將校を喚びにやつた。將校は、進めといふ命令は少しも與へられて居無いのだと答へた。「何の命令も……」と、クツウゾフは云ひ始めた、が、直ぐ言語を止めて、主任の將校を喚び出させた。馬車から下りて、彼は、頭をうな垂れて、苦しうな息使で、黙まつて、彼方此方と歩いて居た。彼が喚びにやつた總司令部附の將校エイチエンがやつて來るといふと、クツウゾフは、憤怒で眞赤になつて、振り向いた、が、それは、その失策がその將校の罪であつたが爲めでは無く、唯だその將校が、クツウゾフがそれに向つて憤怒を漏す目的とするに足るだけの地位の者であつたが爲めなのであつた。

で、蹣跚しながら、息を切らしながら、老人は、彼が時としては狂亂の體で地面に轉がることのあるやうな憤激の其様な烈しい状態になつて、エイチエンに跳び掛つて、拳固を振り廻し、無頼漢の使ふやうな悪口を怒號つた。其所へ出て來合せた今一人の將校、大尉プロオジンも少しも咎は無かつた者であつたのに、尙且同なじ運命を受けた。

「悪黨どもは、この次には何を爲るだらう？。奴等を銃殺しろ。悪漢ども奴」と、クツウゾフは、聲を嘎らして叫んだ、拳固を振り廻して、蹣跚けた。彼は全くの肉體上の苦痛を受けて居る状態に在つたのだ。彼、即ち、總司令官殿下たる彼、露西亞では彼が持つたやうな權力を持つた者は未だ嘗て一人も無かつたと、誰からも保證された彼その人が、此様な有様に置かれたのだ——全軍の笑柄にされたのだ。

「種々と心配し、今日のことを祈禱し、一夜も寝ず、何も彼も考へて——それが、悉皆何にもならんのだ」と、彼は自分の事に就て、さう思つた。「俺がホンの少年將校であつた時分でも誰も、此様な風には、俺を笑柄には爲得無かつたのだ……それなのに、今は」

彼は、體刑でも受けたかのやうに、肉體上の苦痛の状態に在つた。そして、その苦痛をば、怒つた苦しさ

うな絶叫で、云ひ表はさすには居られ無かつたのだ。が、直きに、彼の力が盡きた、で、四邊を見廻して、不公平なことを随分云つたことを感じて、馬車に乗つて、黙まつて歸途に就いた。

一度出し切つた彼の憤怒は、再と出ては來無かつた。で、クツウゾフは、弱々しさうに瞬きを爲ながら、人々の云ひ分や、自己辯護を聞き（エルモオロフ自身は、次の日まで、影を見せ無かつた）、それから起ら無かつた。戦をば、次の日には必らずやるといふベニグセンや、コノヴニツインやトオルの熱心な主張を聴いて居た。で、今一度クツウゾフは承知し無ければなら無かつた。

（六）

次の日、諸隊は、晩方までにそれぐの場所へ集められて、夜前進して居た。

それは、紫色がかつた黒い雲で曇らされた空ではあつたが、雨の降る虞の無かつた秋の夜であつた。地は濕つて居たが、泥濘つては居無かつた。そして、諸隊は、砲兵から起る時々のヂヤカヂヤカいふ少し高い音の外は、音無く進んで居た。彼等は、高い聲で話を爲ることや、烟草を飲むことや、火を打つことを、禁ぜられて居た。馬は嘶か無いやうにされて居た。企畫の祕密なことが、その興味を更に加へた。兵は快活に行進して居た。五六の隊團は、銃を組合せて、目的地へ達したのだと想像して、冷たい地面で横になつた。他の諸隊團（大多數）は、徹宵行進した。そして、何處だか、確に、行くべき筈の地點では無かつた場所へ、到着した。

伯爵オロフ・デニソフが率ゐて居た哥薩克兵（軍の中の少しも主要で無かつた分隊）ばかりが、豫定の時刻に豫定の場所へ達したのであつた。この分隊は、スツロオミロヴァの村からツミツロオフスコエに至る路

にあつた森の極く端に止まつて居た。

曉明前に、その時睡いつて居た伯爵オルロフは起された。佛蘭西の陣營からの脱營者が、彼の前へ伴れて來られた。それは、ポニヤトオフスキの軍團の下士官であつた。この下士官は、自分は、佛蘭西の軍中で侮辱されたが爲めに脱營した、即ち、自分は何人よりも勇敢であつて、最早餘程前に將校に爲れるべき筈であつたのに、一向昇級させて呉れ無いたので、彼等を捨て、了まつて、彼等に復讐してやらうと思つて、逃て來たのだと、波蘭語で説明した。彼は、ミユアが、その露西亞軍から一露里の所に、その夜は陣して居るのだから、若し、彼に百人の兵を附けて呉れ、ば、必定ミユアを捕虜にして見せると、云つた。

伯爵オルロフ・デニソフは、同僚と協議した。さういふ非常な誘惑的な提言は何うにも拒み得られ無かつた。誰も彼も、行かうと騒ぎ立てた、誰も彼も、その策をやつて見ると、勧めた。多くの争論や、相談を経た後で、少將グレコフが、哥薩克兵二聯隊を率ゐて、その波蘭の脱營者と一緒に行くことに極まつた。

「こりや、覺えて居れよ」と、伯爵オルロフ・デニソフは、その波蘭の脱營者を去かせる時に、それに向つて云つて、「若し、お前が虚偽を云つたのであつたら、お前を犬のやうに銃殺するぞ。けれども、お前の云つた事が眞實であつたら、百クラウンだぞ」

脱營者は、その言語には何とも返答し無いで、勢ひ込んだ態で、馬に乗つて、急いで集められたグレコフの兵と共に乗り去つた。

彼等は森の裡へ入つて去つて了まつた。

伯爵オルロフは、明けて行く朝の寒さで震へながら、自分だけの責任でやり出した企畫で昂奮して、グレコフと一緒に、森を出て、近寄つて來る曉明と、消えかゝつて居る燎火との物をまぎらす光の裡で今は海り

見えだして居た敵陣を熱く見始めた。

伯爵オルロフの右手の開けた森には、我軍の諸隊團が見え無ければならぬ筈であつた。伯爵オルロフはその方向を見た、が、随分遠方までも見える明るさであつたのに、さういふ隊團は一向見え無かつた。伯爵オルロフは、それ等の兵は、佛蘭西軍の陣營へと動き始めて居るのだと想像し、非常に遠視の利いた彼の副官が、確にさうだと斷言した。

「いや、勿論、後れたな」と、伯爵オルロフは、云つて敵陣を凝視めた。

吾々が一端人を信じて、その人が目前に居無くなるといふと、その人を疑ひだすことが屢々ある通りに、伯爵オルロフには、不意に、その脱營者が自分等を欺まして居るので、彼は自分等に虚言を云ひ、そして、その二個聯隊を、何處へだか、伴れて行つて了まつて、その攻撃全體の邪魔を爲やうとして居るのに過ぎないことは、如何にも知れ切つた見易いことであるやうな氣がした。軍隊の彼様な群團の裡からその將帥を捕虜にするなどは、途方も無い話では無いか。

「必定、彼奴は虚言を云つたのだな、彼の惡漢は」と、伯爵は云つた。

「呼び返したら何うです」と、幕僚の一人が云つた、その男は、敵陣を眺めて居るうちにその企畫に對して伯爵と同じやうな疑念を感じたのだ。

「あゝ。左様……君等は、何う思ふね、この儘にして置かうか？。それとも？」

「では、歸れとご命令になりますか？」

「歸れ、左様だ、歸れなんだ」と、伯爵オルロフは、不意に決心して、云つて、懐時計を見た、「最早後れた、全然明るくなつて了まつた」

で、副官が、グレコフの後を追つて、森へ駆け込んで行つた。グレコフが歸つて來るといふと、伯爵オルロフは、その企畫を捨て、了まつたことや、幾ら待つても歩兵の隊團の出て來ぬことや、敵軍が其様な近いこと（彼の分隊では誰も彼も同なじやうに感じて居た）などの爲めに、氣が昂つて、又攻撃しやうと決心した。

耳語で彼は命令した、「馬に乗れ」

兵は、その居場所々に就いて、十字を切つた……「神の名に於て、行け」

「萬歳」が、森の裡で轟いた、そして、哥薩克兵等は、槍を下して、宛然袋からでも射ち出されたかのやうに、百宛相續いて、川を渡つて、敵陣へと、勇しく、飛んで行つた。

哥薩克兵を見た一番始めの佛蘭西人の一つの絶望的な、怖ぢた叫聲、すると、陣營の裡の、衣服を脱いで居る、半眠の誰も彼もが、砲も、銃も、馬も棄て、了まつて、逃げ去りだした。

若し、哥薩克兵等が、佛蘭西人が自分の四方に又後方に捨て、行つた物には構はずに、佛蘭西人を追撃したのであつたら、ミユアは元より、其所に居た全體の兵を捕虜に爲ることが、能いたのであつたのだ。彼等の司令將校等は勿論左様爲やうと爲たのであつた。が、哥薩克兵等が、戦利品や捕虜を得てからは、最早何うにも、彼等を一寸でも動かしやうは無かつたのだ。誰も號令などは耳にも入れ無かつた。

彼等は、千五百の捕虜と、三十八門の砲と、旗と、それから、哥薩克兵等の眼には極く大切なものであつた物、即ち、馬や、鞍や、馬衣や、その他の種々な物を、取つた。彼等はさういふ總ての物を始末しやうと思つた、捕虜や、砲を確に取り、戦利品を分割し、分捕品に就て、怒號つたり、相互に腕力で奪ひ合ふことさへ、爲るのであつた。で、總てさういふ事が哥薩克兵等の注意を吸収して居た。

佛蘭西人は、その上追撃され無いのを見て、集まり始めた、彼等は隊伍を整へて、射撃し始めた。オルロフ・デニソフは未だ依然他の隊團が來るものと思つて居た、で、それから上には進撃し無かつた。

が、一方で其様なことがあつて居るうち、第一隊團は斯う進む云々といふ配置に従つてベニグセンに統率されトオルに指揮されて居る後れた諸隊團の幾つかの歩兵聯隊は、然るべき順序で出發して、何處かへ達した。唯だ、その何處かは、達すべき筈の場所無かつたのみである。

で、又、例の如く、勢、好く出發した兵卒等は、駐まり始めた。で、不満の喧嘩があり、混亂の感があり、そして、彼等は、或る地點まで、行進し戻つた。

副官等や、將官等が、彼方此方と駆け廻り、怒號つたり、喧嘩したり、自分等は全く間違つた所へ來て、全然後れて了まつたのだと、云ひ放つたり、誰かを叱責したり、など爲たのであつた。で、到頭、衆皆絶望して、その責任は自分には無いのだと、極めて了まつて、唯だ何處か知らへ達する爲めに行進した。

「吾々は、遅かれ早かれ、何處か知らへ達し無ければなら無い」

で、勿論、彼等は、何處かへ達したが、其所は、彼等が行つて居なければならぬ場所であつたのでは無かつたのだ。尤も、目的地へ達した隊はあるにはあつたのだが、それは、最早非常に後れてのことであつて、彼等が其所に達したのは、何の役にも立たず、唯だ無益に敵からの射撃を受けたのみであつたのだ。

この戦では、アウステルリッツの戦でのウアイエロオテルの役廻であつたトオルは、不撓の精力で、戰場の一方から他方へと駆け廻つたが、何處でも、物がチグハグになつて居るのに、出會つた、で、一例を擧げると、彼は、夜が明け切つてから、バゴウウトの軍團が森へ來て居るのに、出會つた、が、その軍團は、餘程前に其所へ來て、それから、オルロフ・デニソフに援助しに行つて居るべき筈のものであつたのだ。さ



ういふ失敗に失望し、又それが爲めに、激昂し、それから、それは誰かの咎であるに違ひ無いのだと想像して、トオルは、軍團の司令官の將軍へと駈け付けて、その將軍を嚴重に譴責して、銃殺するに足るべきものだ、云ひ放つた。

穩かな氣質の、心の確乎した老將軍バゴヴウトも、又一切の遅延や、混乱や、矛盾した命令などで、ムシヤクシヤして居たので、意外にも（誰にも）彼は、彼の性質とは全然反對な、烈しい腹の立て方を爲た。そして、トオルに向つて、餘程甚いことを云つた。

「我輩は、誰からも、我輩の義務を教へて貰はんでも宜しい、我輩は誰にも劣らず、死に面し得るのだ」と、彼は、云つた。で、一分團で前進した。

勇敢なるバゴヴウトは、激昂したが爲めに、今唯つた一分團で戰鬥に進むといふことが果して何かの役に立つのか何うかといふことを考ふるに違無くして、自分の部下を敵の砲火の下へ幕地に率ゐる進んだ。危険と、破裂弾と、銃弾とが、彼がその憤激の際に於いて、要した物その物であつたのだ。眞最初の銃弾の一つが、彼を殺し、他の弾が、彼の部下の多くを殺した。で、彼の分團は、何等の目的も無しに、唯だ無益に、暫時敵の砲火の下に残つて居た。

(七)

その間に、今一つの隊團が、佛蘭西軍の中央を突く筈に爲つて居た、が、この隊團はクツウゾフが率ゐて居た。彼は、自分の意に反して始められたこの戦は混亂に終るのみだといふことを知つて居た。で、彼の力の及ぶ限り、自分の兵を抑へて居た。彼は動か無かつた。

クツウゾフは、彼の鼠色の馬で黙まつて乗り廻りながら、攻撃を開いたら何うかといふ意見に對して氣の無い返答を爲た。

「攻撃を開始しろと云ふのは宜いが、君等は混み入つた行動を爲ることを知らんでは無いか」と、彼は、攻撃を開かせて呉れと頼んで居たミロラアドヴィイチに云つた。

「吾々は朝のうちにミユアを捕虜にし得無かつたし、又、正當な時機に定めぬ地點へ達することも能き無かつたのだ。斯うなつては、最早何うにも爲やうがあるものか」と、彼は、今一人の者に云つた。

佛蘭西軍の後衛、即ち、哥薩克兵の前の報告では何も居無いといふのであつた場所に、實際は、波蘭人が二大隊居るのだといふ報告がクツウゾフの許へ齎らされるといふと、彼は、後に居たエルモオロフを横眼でジロリと見た——彼は前の日以来その時までエルモオロフには一言も口をきか無かつたのだ。

「誰も、彼も、種々な方策を出して、攻撃を開始しろと頼むのだが、いよく爲事に掛つて見るが最期、何の用意も出来て居らんで、敵の方は、前以つて警戒されて、相當の方策に出るのだ」

エルモオロフは、眼を半睡りに爲た、そして、この言語を聞くといふと、微弱に微笑んだ。彼は、暴風雨は彼の頭上をば最早吹き過ぎて了まつて居て、クツウゾフはその當てこすりより以上には出無いのだと知つた。

「我輩を冷嘲かして凹ましたのだぜ」と、エルモオロフは、低聲で云つて、自分の傍に居るラエーフスキイを膝で突つ突いた。

その直ぐ後で、エルモオロフは、クツウゾフの前へと出て行つて、恭やしく、意見を述べた——  
「未だ時機は過ぎ去つて居りませんが、殿下、敵は未だ退いて了まつて居りません。攻撃の命令をお

出しになつては如何でせうか？。左様でございませんと、近衛は烟を見る事ができますまいから」  
 クツウゾフは、何とも云は無かつた。が、ミュアの軍が退却して居るといふ報知が來るといふと、彼は、  
 進撃の命令を出した。けれども、百歩毎に、四十五分休憩した。

戦は、唯だオルロフ・デニソフの哥薩克兵が爲つたものゝみであつた。軍のその他の部分は、唯だ無益  
 に二三百の兵を失つたに過ぎ無かつたのだ。

この戦の結果として、クツウゾフは、金剛石勳章を授けられ、ベニグセンも、金剛石と十萬留を以て  
 賞せられ、それから、その他の將軍たちも、それ〴〵階級に従つて、心持の好い賞に預かつた。そして、總  
 司令部では、又新たにさまざまな移動が行はれた。

「何時でも斯ういふ風なんだ、何も彼も顛倒だね」と、露西亞の將校や將軍等がタルテイノオの戦の後で  
 云つた。それは恰度今日人々が、自分等ならば何うにか巧くやつたものを、誰か間拔けな奴があつて、何も  
 彼も滅茶にしてしまつたといふ臆断で、さういふのと同なじ譯なのだ。

が、さういふ風に云ふ人々は、自分等の云つて居る事柄を十分に理解して居無いか、若くは、故意に自  
 ら欺むいて居るのか、孰かなのだ。

何の戦でも——タルテイノオでも、ボロディノオでも、アウステルリッツでも——それに對する方略を立  
 てた人々が、さう爲やうと思つた通りには、ならぬものである。それは何うしても避け得られ無きことな  
 のだ。

戦場といふものは、人々に取つては、生死の問題であるのだから、人が戦場に於ける程自由な場合は何處  
 でも無いのであるが、その戦場では、自由に働くさま〴〵の力の無数な集合が、戦の取る方向に影響を及  
 ぼすのであつて、さういふ方向は、前以つては決して知り得られるものでは無く、又、孰れか一個の力の方  
 向とは決して合致するものではないものなのだ。

多くの力が或る物體の上に同時に違つた方向に向つて働く場合には、その物體の運動の方向は、さういふ  
 諸力のうちの何れの方向とも合致し無いで、何時でもその中間の方向、即ち、さういふ諸力の總括の方向を  
 取るものだ。それを、機械學では、力の平行方形と云つて居るのである。

歴史家等、殊に佛蘭西の歴史家等の吾々に與へる叙説に於て、吾々が、戦争や、戦は前以つて定めた方  
 略通りになつて行くものゝやうだといふことを見出すにしても、吾々がその説から演繹し得る決論は唯ださ  
 ういふ叙説は虚偽であるといふことに過ぎ無きのだ。

タルテイノオの戦は、明白に、トオルが企畫で居た通りの目的を達し得無かつた。即ち、彼の兵の操縦法  
 通りに軍を戦鬪に率へて行くことも能き無ければ、伯爵オルロフ・デニソフが持つて居たらうと思はれる目的  
 通りにミュアを捕虜に爲ることも能き無かつたし、又、ベニグセン其他の人々が持つて居たらしい一撃の下  
 に敵の全軍團を全滅させやうといふ目的も達せられ無ければ、敵火の下で拔群の働を爲やうと思つて居た  
 將校等の目的も達せられ無かつたし、それから又、自分が得たより以上の戦利品を得度がつて居た哥薩克兵  
 の目的も達せられ無かつたのだ。

が、實際それに依つて成し就けられたものとして、又、總ての露西亞人の願望であつた事（露西亞國內か  
 ら佛蘭西軍を追ひ出す事及びその軍を全滅させる事）として、その戦の目的を考へるとすれば、タルテイノ  
 オの戦は、全くその鏡棒なものであつたが爲めに、恰度戦役のその時期に必要であつたものであつたこ  
 とは、全く明白なことであるのだ。その戦の實際の結果より以上に前に云つた目的に協ふその戦の何様

な結果をも想像することは、困難であるか、若くは、不可能であるかである。非常な混乱に拘らず、全く最少の努力で、そして、最も僅な損害で以つて、その全戦役中の最も重要な結果が得られたのだ——即ち、この戦に依つて、退却から攻撃へと變り、佛蘭西軍の弱さが顯はれ、それから、ナポレオンの軍を遁逃させるのに必要であつた撃動が與へられたのであつた。

(八)

ナポレオンは、所謂莫斯科川の花々しい勝利で莫斯科へ入る、佛蘭西軍が戰場を領有して居るのだから、その勝利であつたことには、更に疑點が無いのだ。

露西亞軍は、退却して、莫斯科——糧食や、武器や、諸機具や、無量の富の具つた莫斯科——をナポレオンの手に委してしまふ。

佛蘭西軍の兵力の半分しきや無い露西亞軍は全く一月の間更に攻撃しやうとし無い。

ナポレオンの地位は實に華々しいものである。二倍の兵力の軍で、露西亞軍を襲つて、それを全滅し、そして、有利な平和を結ぶことも、若くは、その平和の談判が拒絶されれば、彼得堡へ向けて脅迫的な進軍を爲し、又若し、それが失敗すれば、スモレンスクかヴイルナへ歸るか、それとも、莫斯科に居るかして、要するに佛蘭西軍が今有して居る光榮ある地位を維持して居ることも、さういふことを爲るには、別に大した天才の要るのでは無かつたのだ。

さういふ事を爲るには、極く單純な、極く容易な方法を取りさへすればそれで宜かつたのだ、即ち、兵卒に掠奪を爲せ無いやうに爲るとか、冬の衣服(莫斯科でのその供給は、全軍に對して十分有り餘る程で

あつた)を用意するとか、それから、糧食——これも、莫斯科での供給が、佛蘭西の歴史家等の示めて居るところでは、全軍を六個月間養ふに足りたといふのだから——それを規則正しく集めるとか、先づさういふ事を爲さへすれば、それで宜かつたのだ。

所が、歴史家等の確言する所に依れば軍に對して絶対の権力を持つて居たといふ、總ての軍事上の天才のうち最も豪い人であつたナポレオンは、さういふことを寸毫も爲ら無かつた。

左様いふことを寸毫でも爲るどころでは無く、彼は、彼が自由に執り得た總ての種々な方針のうちから一番馬鹿々々しい、一番有害な方針を選ぶやうに、自分の権力を用ひたのだ。

ナポレオンが爲し得た總ての種々な事の中で——即ち、莫斯科で冬籠を爲るとか、彼得堡へ行くとか、ニイジニイ・ノヴゴロッドへ行くとか、クツウゾフがその後取つた路に依つて、今少し北か南かへ戻るとか、總てさういふことの中で——ナポレオンが實際採つたもの以上に、彼の軍に取つて(その結果が證明した通り)不幸な方針は、誰にも到底想像し得られ無いのだ——

即ち、それは、十月まで莫斯科に止まつて居て、軍隊をして町を劫掠するに委して置いて、それから、思ひ切り悪く、守兵を後に残して置いて、莫斯科から行進し出て、クツウゾフと會戦しやうとして行きながら、而も戦を開かずに、右方へ轉じて、マレエ・ヤロスラアヴェツツまで行き、其所で再戦をやつて見るのを嫌つて、到頭、クツウゾフが取つた路では無く、モザアイスクに出で、スモレンスク海道に依つて、荒された地方を通つて退却するに至つたまでの方針なのだ。

ナポレオンの目的が彼の軍を全滅させるのにあつたと假定して置いて、最も熟練な軍略家をして、露西亞軍が取り得る如何なる方法をも全く別にして、ナポレオンが取つた方針程確に佛蘭西軍全體を殲滅させ得る

やうな行動の如何なる連続でもを考案させて見るが宜い。それは、到底ナポレオンのやつたやうに巧く行く氣遣は無いのだ。

その通りに、ナポレオンは爲つたのだ。が、ナポレオンが、さう爲度かつたので、若くは、彼が鈍漢であつたので、自分の軍を覆滅させたのだと云ふことの不當なことは、ナポレオンが、莫斯科へ彼の軍隊を入れやうと思つたので、莫斯科へ兵を入れたのだとか、彼は極く伶俐な、偉大な天才であつたが爲めに、さう爲たのだとか云ふことの不当と同一なのだ。

両方の場合とも、個人たる彼の活動は、一兵卒の個人的活動以上の力は更に無いのであつて、それは單に事件を決定する法則と合働したに過ぎ無いのであつた。

ナポレオンの諸能力が、莫斯科に遲滞して居たと、歴史家等が云つて居るのだが、それは全く間違である（歴史家が左様いふ説を立したのは、單に、ナポレオンの行爲が、後の結果で見ると、一向それだけの効力が無かつたからに過ぎ無いのだ）。

その以前、及び、その後の千八百十三年ちうと全く同なじやうに、ナポレオンは、自分並に自分の軍の爲めに、彼の有らゆる権力及び有らゆる能力を以つて盡した、ナポレオンの此の時分の活動は、埃及の時にも、伊太利の時にも、奥地利の時にも、又、普魯西亞の時にも、少しも劣らず驚嘆すべきものであつたのだ。

埃及でのナポレオンの大功績なるものは、唯だ佛蘭西人に依つて吾々に傳へられて居るのみであるから、所謂四十の世紀が彼の偉大を見下して居た埃及でのナポレオンの天才なるものが何れまで實際のものであつたのか、吾々には確には更に知りやうが無い。

吾々は又、奥地利や、普魯西亞でのナポレオンの働に就ての物語は佛蘭西と獨逸との根源から引き出さ

れ無ければなら無いのであるから、その兩國でのナポレオンの天才に就ても確な判断を下すことが能き無い。で、戦はずに、兵の幾軍團もが、理由も無く降服したとか、攻圍も無くして、幾つもの城塞が理由も無く開城したとか、いふことが、獨逸で行はれた戦争の唯一の説明として、ナポレオンの天才といふことを持ち出させるやうに、獨逸人をさせるのに違ひ無いのだ。

けれども、吾々は、有り難いことに、ナポレオンを天才だと主張して、吾々の恥辱を隠くす必要を少しも持た無い。吾々は、事實をば率直に面も背けずに見る権利を得る爲めには可なりの犠牲を拂つて居る、で、その権利は、吾々は何うしても棄て無いのだ。

莫斯科でのナポレオンの活動は、他の何處でもの場合と同なじに驚くべく、又同なじに天才に満ちて居たものであつた。命令は命令に續き、方略は方略に續いて、ナポレオンが莫斯科へ入つた時から其所を去る時に至るまで、絶えずナポレオンから出たのであつた。市民の居無いことも、その代表者の來無かつたことも、それから、莫斯科の焼けたことさへも、ナポレオンを屈せしめることは能き無かつた。彼は、一刻の間も、自分の軍の安寧とか、敵軍の行動とか、露西亞の人民の安寧とか、巴里に於ける政治上の處分とか、平和の條件に對する外交的の談判とかいふことを、少しも忘れて居はし無かつたのだ。

(九)

軍事の方で云へば、ナポレオンは莫斯科へ入ると直ぐ、露西亞軍の行動に注目して居れといふ嚴重な命令を將軍セバステヤニに與へ、各海道へ分遣隊を遣り、それから、クツウゾフの所在を發見することをミユラアに命任する。それからして、ナポレオンは、クレムリンに設堡することに就ての綿密な命令を與へ、又、

それから、露西亞の地圖全體に涉つて、その後の戦役に對する方略を定める、全くそれは天才の爲事であつたのだ。

外交の方面で云へば、ナポレオンは、莫斯科で所有物を盗られて了まつて、乞食のやうにされ、何うしても莫斯科を出られ無かつた大尉ヤコヴレフを、自分の前へ喚び出して、彼に向つて、自分の政略や、寛大の意志を詳細に説明し、それから、皇帝アレクサンドルに宛て、ラストオブチンの莫斯科に於ての職務の盡くし方は甚だ悪いものであつたことを自分の友たり且兄弟たるアレクサンドルに知らせるのが自分の義務だと思ふといふ手紙を書いてから、その手紙を持たせて、彼得堡へと、ヤコヴレフを遣る。彼は、又、同なじやうな詳細で自分の意見と、寛大の意志とをツウトルミンに説明して、平和談判を開く爲めに、その老人を彼得堡へ遣る。

司法の方面で云へば、火事が起つた後直ぐに、犯人等を發見して處刑しろといふ命令が出された。それから、悪黨のラストオブチンを罰する爲めに、彼の家を焼いて了まへといふ命令が出た。市會が組織され、そして、次のやうな宣言が出された――

「莫斯科の市民等よ。」

爾等の災厄は残酷なものであつた、然れども、皇帝にして王なる陛下は、その災厄を止ましめんことを欲せられる。

如何に、陛下が、犯罪と、規律の違犯を罰せらるゝかといふことに就ては、恐るべき實例が、爾等に教へる所があつた。嚴重な處分が、素亂の状態を止め、一般の安寧を恢復する爲めに施されたのである。

爾等の中より選ばるゝ長老的會議が、爾等の自治制度即ち市會を組織するであらう。それが、爾等の爲めに注意し、爾等の必要、爾等の利害の爲めに、盡くすであらう。

その議員は、徽章として、赤き平紐を肩より懸くべく、市長はその上に、飾帶を帶ぶることにする。然れども、職務執行の際以外は、彼等は左腕に赤き平紐を着けるのみである。

市警察は、前日の根據の上に設けられる、而して、彼等は、既に秩序の恢復に着手して居る。政府は二人の總司、即ち、二人の警務長と、二十人の司官、即ち、警視を命任して、後者をして、市の各部に駐勤せしめて居る。その徽章は、彼等が左腕に帶ぶる白き平紐である。

種々の名稱の五六の寺院開かれ、而して、禮拜の式は、障礙無く其所にて行なはれて居る。爾等の同市民は、日を追うて、續々各自の住家に歸り來りつゝあり、而して、彼等をして其所に於て、災厄の爲めに必要となつた救助と保護とを得せしむるやうにせよといふ命令が出て居る。

これ等が、政府が、秩序を恢復し、爾等の窮苦を輕からしめん爲めに取つた處分である、然れども、その目的を達せんが爲めには、爾等は、是非共、政府と協力し、能き得るならば、爾等が罹りたる災厄を忘れ、その如く残酷ならざる運命の來るを希望を以つて待ち、又、爾等の身體若しくは爾等の棄て、去りたる財産に對して、暴力を振ふ罪を犯す者をば、恥辱多き死が必らず待つことを信じ、従つて、爾等の身體及び、財産を保護するは、君主中の最も偉大にして最も公平なる陛下の意志なるを以つて、それ等のものゝ保護されることには、決して疑を挾まずに居らなければならぬ。

兵士等及び市民等よ、爾等は、如何なる國民に屬するを問はず、國家の繁榮の根源たる公共の安心を恢復せよ、兄弟の如く生活し、以つて相互に相扶助し、相保護せよ、悪心ある者の計策を混亂せしむるやう協力

せよ、而して、文武の官憲の命を守るべし、しかせば、やがて爾等の涙も流れざるに至るのである』  
兵站の方では、ナポレオンは、總ての軍隊に順々に、掠奪的に便宜糧食其他を徴發する爲めに、莫斯科へ入り込み、其方法に依つて、軍が將來の供給品を供へらるゝやうにせよといふ命令を出した。  
宗教の方では、ナポレオンは、僧等に歸つて來させて、禮拜式が再び寺院で行なはるゝやうにと、命じた。商業を奨勵し、軍隊に對する供給品を備ふる目的で、次のやうな布告が各所に貼り出された。

「布告」

爾等、動亂の爲めに市外に逐はれたる莫斯科の平和なる住民等、職人等、労働者等、及び、爾等、今尙根據無き恐怖の爲めに野を出づる能はざる地の散在せる耕作者等よ、聞け。

平穩がこの都に返りつゝある、秩序がその中で恢復されつゝある。

爾等の同國人は、彼等が尊敬を以て取り扱はるゝを見て、今や、大膽に各自隠れ所より歸り來たりつゝある。

彼等の身體若くは財産に對する暴行は如何なるものにも速に罰せらるゝ。

皇帝にして王なる陛下は、彼等を保護し、且、陛下は、彼の命令に背く徒輩の外は、彼等のうちの何人も、彼の敵とせらるゝことは無い。

陛下は、爾等の窮困を止ましめ、爾等をして、爾等の家及び家族へ歸らしむることを欲せられて居る。

陛下の仁愛なる企畫に協力せよ、而して、恐虞無く吾々に來れよ。

市民等よ。

安堵して、爾等の住所に歸れよ、爾等は、各自の缺乏を満足さする手段を速に發見するであらう。

職工等及び勤勉なる手工等よ。

爾等の職に歸れよ、家も、店も、將爾等を保護する爲めに番兵も、爾等の歸るを待ちつゝある。而して、爾等各自の勞力に對する正當なる報酬を受け得られる。

而して、又、爾等、農民等よ、爾等が囊に怖れて隠れたる森より出で來り、保護を得ることには十分に信頼して、各自の小舎に歸れよ。

農民等が、各自の餘分の貯藏及び田園の産物を持ち來り得る市場が、市のうちに開かれた。

政府は、彼等農民に對して售賣の自由を確めん爲めに次の如き方法を設けた——

(一) 今日より以後、農民、耕作者等、及び莫斯科郊外の住民等は、何等の危険無く、如何なる種類の物品をも、二個の指定市場——即ち、モホヴァヤ及びオホトニー・リヤアド——へ持ち來り得られる。

(二) 物品は、賣方及び買方が雙方一致し得るやうなる價に於て、彼等より買ふべし、然れども、若し、賣方が、正當なる價として請ふところのものを得られざる場合には、彼が、その物品を村へ持ち歸ることは、全く自由であつて、何人も、如何なる辭柄の下にも、それを妨たけることは能きぬ。

(三) 毎日曜及び水曜をば、毎週の市日と定める、その爲めとして、軍隊の相當なる數が、入り來る荷馬車を保護し得るやうなる市からの距離に於て、總ての公道に沿うて、水曜及び土曜には、駐屯せしめられる。

(四) 荷馬車及び馬を以て農民が、何等の障碍無く、歸路に就き得べきやう、前項同様の處置が施されるべし。

(五) 普通の店舗を再興する爲めの處置も時を移さず施されるであらう。

市及び田園の住民等、及び如何なる國籍に屬するにもせよ、爾等勞働者、手工等よ。  
爾等は、皇帝にして王なる陛下の仁愛なる企畫を實行せざるべからず、而して、爾等は公安を維持せんが爲めに陛下に協力し無ければならぬ。

爾等の尊敬と信任を陛下の足下に致せよ、而して、遲滞無く吾等に合同せよ」

軍隊及び人民の元氣を維持しやうといふ積りで、閱兵式が絶えず行なはれ、そして、褒美が分配された。皇帝は街々を乗り廻つて、住民を面白がらせた。そして、國事で絶えず心を占領されて居たのに拘らず、自分の命令で起した劇場へ親臨んだ。

又、慈善事業——征服者の榮冠中での最も美しい寶石——に關しても、ナポレオンは、彼の權内で能き有ゆることを爲た。

慈善事業の建物には、「我母之家」といふ銘を掲げさせるやうに命じた。即ち、それに依つて君主としての壯大なる徳へ持つて行つて、如何にも殊勝な孝心の情緒を合一させたのであつた。

彼は、孤兒院——ヴォスピタテルニイ・ドム——を見舞つた。そして、彼が救つて孤兒等に自分の白い手に接吻させながら、ツウトルミンと優渥な物語を爲た。

それから、ティエールが雄辯に物語つて居る通りに、彼は、自分の偽造した質の露西亞の紙幣で、兵士等の給料を分配させることを、命じた——

「彼及び佛蘭西軍に應適しき行爲に依つて、これ等の方法の効力を援助して、彼は、火災の爲めに損害を受けたる徒輩に對して救助を分配せしめた。けれども、糧食は、大部分敵であつたところの外國人に與ふるには餘り貴重であつたので、ナポレオンは、外より彼等に物が供給され得るやうにと、金錢を彼等に供給

することに爲た。そして、彼等の間へ紙幣の留を分配させるやうに命じた」

軍の中に規律を維持する目的で、命令が、軍務の怠慢を嚴重に罰する爲め、及び、劫掠を止める爲めに、絶えず出されて居た。

(十)

が、不思議なことには、斯ういふ一切の處置、斯ういふ努力、斯ういふ方略は、それまでの同なじやうな場合にやつたものと寸毫も劣つたものでは無かつたに拘はらず、事件の根柢に更に觸れ得無かつた。それ等のものは、機械から離された時計の字板の上の劍のやうに、齒車には掛らずに、當ても無しに、不規則に廻つて居たのだ。

戦役方略、即ち、所謂天才の爲事——それに就ては、ティエールが、ナポレオンの天才は、未だ嘗て、それよりも甚深な、それよりも巧妙な、それよりも賞嘆すべき、何物をも爲無かつたのだと云ひ、又、モシウ・ファンと激烈な論戦をやつた際には、天才のこの爲事の構成は、十月の四日には無く、十五日のだと見無ければ不可ぬといふことを、證明したのだが——その方略は、一度も實行され無かつたし、又、實行し得られるものでも無かつたのだ。何故だと云へば、それは、當時の状態の實際の事實と何等共通の點が無かつたからなのだ。

内廓の設堡を爲るのには、回教寺(ナポレオンは、ヴァンイリ・ブラジニニをさう呼んだのだ)を是非とも取り崩さ無ければなら無かつたのだが、その築城は全く無益なものであつた。

内廊に地雷装置を爲ることは、唯だナポレオン一個の希望を實行するだけの用しきやし無かつた。ナポレオンは、自分が轉んで身體を痛くした床を打つ小兒のやうに、内廊を爆裂させると、莫斯科を去る時に命じたのだ。

ナポレオンが非常に重く見て居た露西亞軍を追撃することは、未聞の結果に立ち到つた。佛蘭西の將軍たちは、六萬の露西亞軍を見失つて了まつたのだ。そして、それが失した留針でもあるかのやうに、六萬の軍を艱然見出し得たのは、ミュアの熱練と、又、何うもその天才との、お蔭だといふのである——ティエールの言辭に従へば。

外交の方面では、ツウトルミン並にヤコヴレフ（後者は重に自分の着る大外套の工面や、旅行に對する車馬を得ることに心を注いで居た）に對してナポレオンが爲つた寛大と公平の一切の説明は、何の効も無いことに爲つた。

アレクサンドルは、さういふ使者等を受け付け無かつた。そして、その使者等が齎した使命に對して何の返答も爲無かつた。

法の方面、治安の方面では、放火犯だと想像された者どもが處刑された後で、莫斯科の餘の半分が焼けて了まつた。

市會の開設が、掠奪を防ぎ得無かつた。そして、誰の益にも爲ら無かつた。唯だ、その議員になつた數人が、秩序を保つといふ辭柄の下に、各自勝手に莫斯科を掠奪するとか、或は、各自の財産の掠奪を免がれるとか、であつたばかりであつた。

宗教の方面では、埃及では、問題が、ナポレオンが回教寺を訪問したことのみで、解決されたのであつた

が、それが此所では、同なじ處置が、更に何の結果にも達し無かつた。莫斯科で見付けられた二三人の僧は、ナポレオンの望みを實行しやうと爲たには爲た。が、そのうちの一人は、禮拜式をやつて居る最中に、佛蘭西の兵卒に顔を殴りつけられた。それで、今一人に對しては、次のやうな報告が佛蘭西の官吏から出た——  
「私が、見付けて、祈禱を云ふことを開始する爲めに伴つて來た僧は、寺院を掃除して閉めて了まつた。夜になると、彼等は再、内部へ侵入する爲めにやつて來て、錠を破毀し、書籍を破ぶり、その他の亂暴を爲た」

商業の獎勵の方はといふと、「勤勉なる職人及び農民」に對する布告には、更に何の答も無かつた。勤勉なる職人は、莫斯科には最早一人も無かつた。農民は、その布告を携つて市から餘り遠方へ出過ぎるやうなことを爲た使者等を襲つて、それを殺した。

演劇で、人民や、兵士を樂ませやうといふ企畫も同じく不成功であつた。内廊やボズニヤアコフの邸でやり出した演劇は、再直きに止まつて了まつた。それは、俳優や女優がその衣裳、所有物等を、兵卒等の爲めに、奪はれて了まつたからであつた。

慈善事業さへ、所期の結果を齎さ無かつた。莫斯科は眞實ともに紙幣が非常に多かつた、で、札は少しも價が無かつた。分捕品を貯へて居る佛蘭西人は、唯だ黄金ばかり奪つて行つた。ナポレオンが彼れ程惜し氣無く不幸な者等に遣つた贖札は、何の價も無かつた。それから、銀さへ、黄金に比べてその標準價以下に下落した。

が、官憲がやつた總ての努力の無効力であつたことを見せる最も著しき實例は、掠奪を止め、規律を維持しやうとするナポレオンの盡力の無益であつたことなのだ。



軍事の方の官憲からは、斯ういふ報告が出た——

「掠奪は、それを止めろといふ命令に拘らず、市で依然行はれて居る。秩序は未だ恢復されぬ。そして、正當な風で商賣を営む商人が一人も居無い。けれども、酒保等が、掠奪の獲得を賣るやうなことを爲して居る」  
「私の管區の一部は、第三軍團の兵士の掠奪の犠牲に始終爲つた居る。その兵士等は、地下室へ逃げ込んで暮して居る極くくの貧民等から、彼等の僅に残して居る物を強奪するばかりに満足せずに、私が目撃した五六の實例に依れば、彼等を劔で斬るまでの悍猛の行爲をすまして居る」

「別事無し、唯だ、兵等は盗取と掠奪に耽り居るのみ。十月九日」

「盗取と掠奪は依然行はれて居る。吾等の管區には強盗の一隊横行す、これを捕縛するには、強き番兵を要す。十月十一日」

「皇帝は、掠奪を止めよといふ命令に拘らず、近衛より出でたる掠奪者の隊が、絶えず内廊へ來りつゝあるのを、非常に怒り居る。古親兵間では、無秩序と掠奪とが、昨夜より本日に掛けて、益々烈しくなつて居る。皇帝は、陛下御自身を守護する爲めの、他の模範となるべき筈の選抜兵が、軍の爲めに設けてある地下室や、貯藏所へ亂入する程までに規律を失つて了まつたことを、遺憾とせられて居る。他の諸兵は、哨兵及びその將校の命を聽かず、彼を罵り、彼等を毆打するまでに、墮落して了まつた」

「式部長官は、禁止の旨の繰り返して達せられたのに拘らず、兵士等が、依然、何處の前庭でも、而かも、皇帝のお居室の窓の前でさへ、喧しく騒いで居ることに、甚どく困却して居る」

軍は、野性に立ち戻つた家畜の群のやうになり、そして、飢餓から自分等を助け得る糧秣を蹂躪つて、散散になりだし、莫斯科に居るうちに、毎日々々自分等の破滅へと近づきつゝあつた。  
が、軍は動か無かつた。

それは、スモレンスク海道で、輜重の奪られたこと、タルティノオの戦とで、狼狽な恐怖に襲れるといふと、始めて駈け出し始めたのだ。

タルティノオの戦の報知は、閱兵の最中に於て、思ひも掛けず、ナポレオンに達した。そして、彼の心に——ティエールの、吾々に告げる所では——露西亞人を罰しやうといふ意志を喚び起した、で、彼は、全軍がやれと騒ぎ立て、居た處分を執れといふ命令を下した。

莫斯科からの逃走に於て、兵卒等は、彼等が集めて居た總ての掠奪物を携つて行つた。

ナポレオンさへ、彼自身の寶を携つて行つた。軍の掠奪物を積んだ荷馬車の大きい列を見て、ナポレオンは驚いた（さうティエールは吾々に告げて居る）。が、彼の軍事上の經驗に依つて、彼は、莫斯科への途中で或る元帥の荷物を焼たやうには、物品を積んだ總ての不必要な荷馬車を焼くことを命じはし無かつた。彼は兵卒等の一杯乗つたさういふ荷馬車及び乗用馬車を眺めた。そして、それは結構であつて、さういふ乗り物は、糧食や、病人や、負傷者等に役に立つやうになるだらうと云つた。

軍の陥つて居た窮境は、自分の死ぬる時が近よつて居るのを感じて、自分が何を爲て居るのか解らずに居る負傷の獸の窮境であつたのだ。

莫斯科へ入つた時から、その軍の破滅の時に至るまでの、ナポレオンの複雑なる運動と方略を研究することは、致命傷を受けた獸の死際の奮闘ともがきとを見て居るのに餘程似て居る。負傷の獸は屢く、そよぎを

聞くと、獵人の弾に出會ふやうに突進し、前方へ駆け、又後へ戻り、そして、我からと自分の最期を速める。ナポレオンは、彼の軍の要求の下に、それと同等なことを爲した。

タルテイノオの戦の風説で、狼狽させられて、野獸のやうに、軍は、彈の方へと突進し、獵人に達し、そして、再駆け返つた、で、到頭、有らゆる野獸のするやうに、自分に取つては一番悪い、一番不幸な路であつた前から慣れて居た路を執つたのだ。

吾々から見れば、斯ういふ總ての運動に於ける統率者としてのナポレオンは、船の進路を導びく力があるのだと、野蠻人が思ふ船首の木像と同等なのだ。總て斯の時分の活動に於けるナポレオンは、馬車の裡に乗つて居て、その内にある紐を引張るのみで居ながら、それで、自分がその馬車を駆けさせて居るのだと想像する小兒と同等であつたのだ。

(十一)

十月の六日の朝早く、ピエールは、小舎の外へ出た、それから、再返つて、戸口に立つて、長い彎脚の、紫が、つた鼠色の犬の、自分の周圍に飛び跳ねて居るのを、相手にして居た。

この犬は、俘虜等のその小舎に居て、カラタアエフの傍に寝るのであつたが、それでも、時には、自分で町へ行つて、再歸つて来るのであつた。

それは、誰の犬でも無いしあつた。今は飼主も無く、名も無かつた。佛蘭西人はそれをアゾールと呼んだ、物語をするのが好きであつた兵卒は、それをフェムガルカと呼んだ、カラタアエフは、それを、「鼠色」と呼んだり、「跳ね者」と呼んだりした。

飼主の無いことも、名の無いことにも、何種とも云ひやうの無いことにも、いや、その外極まつた色の無いことにさへも、紫が、つた鼠色の犬は更に困まつて居無かつた。その綿毛の後尾は、飾羽毛のやうに、圓くツンと立つて居た、その彎つた脚は、實に善く利いて、度々、四脚で歩くのを嫌ひするかのやうに、形好く後脚一本で立つて、三本脚だけで、極く速く、巧く駆けるのであつた。何様な物でも、彼に取つては、満足の源であつた。或る時は、嬉しがつて吠え、その次には、夢みるやうな、考へ込んだ態で、日向ほつことを爲し、又その次ぎには、木の切や、藁を玩にして、跳り廻るのであつた。

ピエールの服装は、今は、彼の前からの服装のなかの唯だ一つの残り物であるところの汚れた襤褸になつた襯衣や、裾の所をばカラタアエフの勸言で脚首の周圍へ紐で縛り付けた兵卒の下袴や、農夫の大外套や、農夫の帽子から、成り立つて居た。

外形的には、ピエールは此時分の間に、甚く變はつて了まつた。彼は、ベズウホフ家の者の特質である所のガツリしたこと、力の強いことの様子は依然持つて居たが、最早肥つて居るやうには見え無かつた。彼の顔の下の部分には、口髭や、顎鬚が一杯生えて居た。風のうぢやうぢや生いて居た彼の長いもつれた髪は、額の上で、捲髪を編んだ産を成して居た。彼の眼には、これ迄ピエールの顔では決して見られ無かつたやうな、確乎したこと、落着と、少しも油断せぬ様子が表はれて居た。それ迄は彼の眼の裡にさへ表はれて居た彼のグヅグとした態は、全然、今は、直ぐ實行や、抵抗に取りかゝらうといふ力強い、勢込んだ様子に變つて了まつた。

彼の足は跛であつた。

ピエールは、その朝荷馬車や、馬上の人々などの通つて居る牧場を見渡し、それから、河の、彼方の遠く

の方を見、それから、本気で彼に噛み付かうとするかのやうにして居る犬を見、それから又、自分の跣の足を見た所で、その足をば、彼は、汚れた、厚い大きい足指を動かしながら、嬉しさうに、互ひちがひに踏み代へて居たのであつた。で、彼が自分の跣の足を見る度毎に、熱心な満足の微笑が、彼の顔の面をチラ／＼通つた。さういふ跣の足を見るとき、彼の心には、彼がその頃遭遇して知つた總ての事柄が、憶ひ起されるのであつた。そして、その考案が、彼に取つては、非常に好い心持であつた。

天氣は、その五六日といふもの、朝薄い霜が降りて居たのみで、靜で、麗かであつた——即ち、「祖母さんの夏」なるものであつた。

戸外でも、日向は暖であつた。そして、その暖さは、朝の霜の身體を引き締めるやうな清爽さが未だ空氣の裡に残つて居るので、殊に好い心持であつた。

何物の上にも、近い、遠い、總ての物の上に、秋のその時分で無ければ何うしても見られ無い彼の魔術的な、水晶のやうに澄み渡つた麗かさが横たはつて居た。遠方には、雀、丘が、村や、寺や、大きい白い家と共に、見えて居た。それから、葉の無い樹々や、砂や、石や、家々の屋根や、寺の青い塔や、遠方の白い

家の角などが、悉皆、澄み渡つた空氣の裡で、不思議な程瞭然とした非常に精妙な輪廓で浮き出て居た。直ぐ傍に、佛蘭西の兵卒等に占領されて居た半焼の邸の見慣れた破れかゝりがあつて、その柵の傍に未だ濃緑のライラックの灌木叢があつた。所が、天氣の悪い時には、甚く心持悪く見えたこの焼け焦けた、破

れかゝつた家が、今は、澄み渡つた靜な麗かさの裡では、人の心を慰め落ち着かせるやうな小奇麗な風を持つて居た。

喫烟帽を着、樂々と上衣の釦を外して、短い烟管を啣へた佛蘭西の伍長が、小舎の角から出て来て、親し

氣な胸を爲て、ピエールへと近寄つて來た。

「好い天氣だね、もし、モシユウ・キリイル？」（ピエールのことをば、佛蘭西の兵卒等は誰も、斯う呼んで居たのだ）。「宛然春のやうだね」

で、伍長は戸に凭かゝつて、ピエールに自分の烟管をさし出した、彼は何時もピエールに向つて左様するのであつたが、ピエールは何時もそれを斷つたのだ。

「斯様な天氣に行軍するのだつたら」と、伍長は云ひ始めた。

ピエールは、伍長が佛蘭西人の出發に就て何ういふことを聞いて居るのか、それを尋ねた。すると、伍長は、殆ど軍隊全部が、出發しかけて居て、この日に、俘虜に關する命令が出る筈であるといふことを、ピエールに話した。

ピエールが居る小舎では、ソコオロフといふ露西亞兵の一人が、危篤であつた。で、ピエールは、その兵卒に對して何とか爲て遣るべきであることを、伍長に話した。

伍長は、左様いふ病者に對しては、行旅的の病院もあれば、駐定的病院もあつて、實際、何ういふ場合に對しても、當局ではその備が爲てあるのだから、安心して居るやうにと、ピエールに話した。

「それに、モシユウ・キリイル、貴下は、大尉に一語話なさりやア宜いんだ、ね。え、彼の人は、決して何様なことでも忘れ無い人なんですからね。巡回して來た時に、大尉にお話しなさい、左様すりやア、彼の人が貴下の爲めに、何でも爲て呉れませアね」

伍長が云つたその大尉といふのは、屢く何時もピエールと長談話を爲るのであつて、ピエールの爲めに、種々親切に爲て居たのであつた。

「何うだ、サン・トマス」と、彼の人は、先日私に云ひましたね、「キリイルは、佛蘭西語の話せる教育のある男なんだ、彼の男は、露西亞の貴族でありながら、今は彼様な災難にかゝつて居るんだ、けれども、彼の男は眞正の男なんだ。だから、彼の男は解つて居る……何か欲しい物があるやうならば、それを聞いて呉れ、何でもやつてやるからな。誰でも學問を爲した者は、教育を好くんだ。ね、自分の良い人々を好くものなんだ」と、斯う云つたんです。私は、貴下の益になるやうにとこの話を爲るんはず、モシユ・キリイル。先日の彼の一件の時、貴下が居なさら無かつたら、随分甚い事になつたらうと思ふんです」

(伍長は、一三日前にあつた露西亞の俘虜と佛蘭西の兵卒等との喧嘩のことを云つて居たのだ、その時には、ピエールが自分の朋輩を静めたのであつた)。それからもう少時饒舌つて居てから、伍長は去つて了まつた。

俘虜のうちの五六人が、ピエールが伍長と話して居るのを聞いて居た、で、彼等は、伍長が何を云つて居たのか尋く爲めに、直ぐやつて來た。ピエールが、莫斯科からの出發に就ての伍長の物語を、朋輩に話して居るうちに、瘡せた、顔の蒼い、襤褸の服の佛蘭西の兵卒が、小舎の戸口へとやつて來た。

敬禮するやうな風で、恥しやうな、速い手付で、彼は額へ指を着け、そして、ピエールに向つて自分の襦衣をこしらへて呉れて居るプラトオシといふ兵卒が、その小舎に居るか、尋いた。

佛蘭西の兵卒等は、一週間前に、麻布と皮を渡された、で、自分等の靴や襦衣をこしらへて呉れるやうにと、材料を露西亞の俘虜に渡したのであつた。

「出來てる、若い者、出來てる」と、カラタアエフは、云つて、丁寧に疊んである襦衣を携つて出て來た。熱くもあつたし、又働き易くする爲めもあつて、カラタアエフは下袴と、地のやうに黒いほろくの襦衣

との外、何にも着て居無かつた。彼は、職人が爲るやうに、髪の周圍へ木皮の細い片を結んで居た。そして、圓い顔がますます圓く、ますます機嫌好ささうに見えた。

「約束を違へ無いことが、良い商賣の兄弟だ。私は金曜日には出來ると云つた、で、私は、その通りやつて置いた」と、プラアトンは云つて、微笑みながら、自分がこしらへて置いた襦衣を廣げた。

佛蘭西人は、不安さうに四邊を見た。そして、幾らかの躊躇に打勝つて居るかのやうに、手早く制服を脱いで、襦衣を着た。彼は制服の下には襦衣を着ては居無かつた。唯だ、彼の裸の、黄色い、瘡せた肌へ直接に、長い、脂染み、花模様、絹の直衣を着て居たらしかつた。

佛蘭西人は、自分を見て居る俘虜等が、自分を笑ひはしまいかと虞れて居たらしかつた、で、彼は、大急ぎで、襦衣の裡へ頭を入れた。俘虜は誰一人として何とも云は無かつた。

「全く、キツチリ適ふね」と、プラアトンは言語を挾れて、襦衣を引き下した。佛蘭西人は、頭と腕を通してから後で、襦衣を見下し、そして、眼を擧げずに、縫ひ目を調べた。

「ねえ、若い衆、此所は裁縫師では無いんだ。ねえ、だから、チャンとした裁縫道具も無いんだ、チャンとした道具が無ければ、正式には虱も殺せ無いと、云ふぢやア無いかね」と、カラタアエフは、云つて、依然、自分のこしらへた物を賞で見て居た。

「結構だ、有り難う、だが、布が幾許か残つて居るだらう……」と、佛蘭西人が云つた。

「お前さんの身體に馴染、ばますく心持好くなる」と、カラタアエフは、依然、自分の作品を賞でながら云つた。「さア、お前さんは、心持が好からう」

「有り難う、有り難う、老爺さん、でも残餘は……？」と、佛蘭西人は、紙幣をカラタアエフに渡して、

云つた。「残つてる布片をお呉れよ」

ピエールは、ブラアトンには、佛蘭西人の云つて居る事を解しやうと爲る氣の無かつたことを見た。で、彼は、語を挟れずに傍觀して居た。カラタアエフは、一留に對して、佛蘭西人に禮を云つた。そして、依然自分の作品を賞で、居た。佛蘭西人は、依然、残つて居る物を呉れと言ひ張つた。そして、自分の云つたことを通譯して呉れと、ピエールに頼んだ。

「布片を何うしやうといふんだらう？」と、カラタアエフが、云つた。「俺には、立派な脚絆が出来るんだがなア。うゝん、爲方が無い、持つてけ」

で、急に、銷沈つて、陰氣になつて、カラタアエフは懐から残り布の束を取り出し、そして、それを、先方の顔を見ずに、佛蘭西人に渡した。「あゝあ」と、彼は叫んだ、そして、歩み去つた。

佛蘭西人は、麻の布を見た、彼は躊躇し、ピエールを尋くやうに見、そして、ピエールの眼が彼に何事かを告げたかのやうに――

「おい、ブラトオシ」と、彼は、不意に赤くなつて、甲走つた聲で叫んだ。「これを取つて置けよ」と、彼は云つた、そして、ブラアトンに残り布を渡して、向き返つて、出て去つた。

「おい、何うだ」と、カラタアエフは、云つて、頭を振つた。「人はよく奴等は基督教徒で無いと云ふんだが、奴等だつて靈魂はあるんだ。老人たちの屢く云つたことは眞實だなア、汗を出して手は、物を惜まぬ手だが、汗の出無い手は、握つた拳だといふのは。彼の男は自分の背部が裸であるのに、それでも、俺にこれを呉れたんだ」。カラタアエフは、一寸と止まつて、夢みるやうに微笑んで、麻布の小片を見て居た。

「だが、これで、俺には上等な脚絆が出来らア、お前」と、彼は、小舎へ引返しながら、云ひ足した。

(十二)

ピエールが捕虜になつてから、最早四週間経つた。佛蘭西人たちは、普通の俘虜の小舎から將校の小舎へ移してやらうと云ふのであつたけれども、ピエールは、それを斷つて、依然最初通り小舎に残つて居た。

火事と掠奪とで荒されて了まつた莫斯科で、ピエールは、人間が堪へ得る缺乏の殆ど最極限までの困苦を経た。けれども、彼の身體の非常に健全であつたこと、體格の好かつたこと、(彼は、その時まで、さういふ事には寸毫も氣が付かずに居たのだ)のお蔭で、それから又、尙一層、さういふ缺乏が、何時始まつたのだとは、何うしても云ひ得無い程徐々と彼の上へ來たといふ事實の爲めに、彼は、平氣なばかりでは無く、尙又全く嬉しい心持で、自分の地位に堪へ得たのだ。

で、彼が、それを得やうと思つて幾ら努めても駄目であつたその平和と、自分に對する満足とを得ることゝが能きたのは、全くこの時であつた。彼の生涯の長い年の間、彼は、自分がボロディノオでの兵卒等の間でそれを見て驚かされたやうなその平和、その自分との調和をば、さまざまな方面に求めたのであつた。彼はそれをば、慈善事業の裡に求めた。共済組合の裡に求めた、交際社會の遊蕩の裡に求めた、酒の裡に求めた、自己を犠牲にする勇者的の働きの裡に求めた、ナタアシヤに對するロオマンティックな戀愛の裡に求めた、彼は、それをば、思想の路に依つて求めたのであつた。が、彼の總ての探究、總ての努力が悉く無効であつたのだ。

所が、今は、自分自身の方では何の考想も無くして、彼は、その平和と、自分との調和とをば、唯だ、死の恐怖のお蔭で、困苦のお蔭で、それから、彼がカラタアエフのうちで見た事のお蔭で、得たのだ。

彼が處刑の間経た彼の恐しい利那が、云はば、嘗ては彼に取つて非常に重要な物に見えて居た心を亂す思想や感情をば、彼の想像及び記憶の裡から、常久に洗ひ去つて了まつたのだ。露西亞に就ても、戦争に就ても、政治に就ても、ナポレオンに就ても、何の思想も彼には起ら無かつた。總てさういふ物は、自分には何の交渉の無い物であつて、自分は、總てさういふ物を判断する義務は無いのだから、それを判断することができ無いのだといふことが、如何にも當然なこと、彼には思はれた。

「露西亞と夏とは、何うしても仲好く能きぬ」

彼は、カラタアエフのその言辭を繰り返した、そして、その言辭が不思議な風に彼の心を慰めた。

ナポレオンを殺さうといふ彼の計畫や、密教的の数の計算や、黙示録の獸の計算などが、今は、不意に、全く解し難い、全く可笑しいものに思はれた。妻に對する彼の憤怒や、自分の名が妻の爲めに汚されては大變だといふ恐怖などは、彼に取つては、實に下ら無いことで、可笑しいことのやうに思はれた。その女が自分を離れて何處かでその女自身の趣味に適ふやうな生活を爲て居たところで、それが自分に何の關する所があらう？。佛蘭西人等が、彼等の俘虜の名が伯爵ズウホフであることを發見しやうが、しまいが、それが、誰に取つても——殊に、彼に取つては——何であらう。

ピエールは、今、公爵アンドレーと談したことを度々考へた、そして、彼は、その談話に少し異つた解釋を加へて居たけれども、その朋友の言語を全く道理だと思つたのであつた。

公爵アンドレーは、幸福といふものは消極的なものだ、云ひもし、又さう思つて居た、が、彼は、絶望した様子と、皮肉な態とで、それを云つたのであつた。それは、宛然、彼はさう云つて居ながら、反つて、今一つ他の考へ——即ち、積極的な幸福を得やうとする吾々の總ての努力は、吾々には生れながらにしてあ

るものなのだが、それは悉く吾々を苦しめ悩ます爲めにのみ吾々に與へられて居るのだといふ考へ——を、云つて居るかのやうであつたのだ。

が、ピエールは、さういふ下流になつて居る感情には氣が付かずに、表面の考へが眞理であることを認めただのだ。苦みの無いことや、缺乏を満たすことや、それに續いて、爲事を選ぶ自由、即ち、生活の方法を選ぶ自由を有することなどが、ピエールには、人間の最高の、そして、最も確な幸福だと思はれたのだ。

此の場所で、そして、今、生涯始めて、ピエールは、自分が飢て居る時に食ふことの樂、渴して居る時に飲む樂、眠い時に眠る樂、寒い時に暖になる樂、人と話を爲たり、人の聲を聞き度く思ふ時に人間と話を爲る樂を、十分に認めたのだ。自分の缺乏を満たすこと——即ち、良い食物や、清潔や、自由——は、自分が今さういふ物を奪れて居て見ると、ピエールには、全くの幸福のやうに思はれた。そして、爲事を選ぶ自由、即ち、生活の爲事を選ぶ自由は、その選擇の自由がそれ程制限されて居て見れば、彼に取つて非常に容易な事柄であるやうに思はれた。即ち、彼がさう思つたが爲めに、人生に於ける種々な便利な物の餘分にあることは、物質的缺乏を満たすことから得られる總ての幸福を無くしてしまふものであるのと共に、爲事を選択する自由の多いこと、即ち、教育や、富や、社會上の位置が自分に與へるその自由の多いことは、爲事的選擇をば非常に難かしいものにして爲事を得やうといふ願望その者をさへ無くならせ、爲事の有り得るといふ事をも無くならせて了まふものだといふことを、彼は忘れた程であつた。

ピエールの總ての夢は、今は、彼が俘虜の境遇から釋放される時の方へと向いて居た。が、それでも、後年には始終、ピエールは、拘禁されて居たその一月のことや、決して又と再び感じるこの能き無かつたそれ等の甚深な、嬉しい感覺のことや、殊に、その十分な精神的平和のことや、彼がその時分になつて始めて

経験したその完全な心内的の自由のことなどをば、熱心に話したのであつた。

最初の日に、朝早く起きて、小舎から、薄明の裡へと出て来て、暗い裡に静に立つて居る聖母の新修道院の圓屋蓋や、十字架を見、長い草の上に下りて居る白い霜を見、雀の丘の坂を見、紫の遠方へ消えて行つて居る曲りくねつた川の木の茂つた岸を見た時に、それから、彼が新鮮な空氣との接觸を感じ、莫斯科から野を横断つて飛んで行く白嘴鴉の羽音を聞いた時に、それから又、光の閃きが東から不意に輝き出、そして、太陽の縁が雲の蔭から勢よく浮び出て、圓屋蓋や、十字架や、白霜や、地平線や、川が、喜ばしさうな光で、キラ／＼した時に、ピエールは、彼がそれ迄は一度も経験したことの無いやうな、人生に於ける喜悦と強さの新たな感を覺えたのであつた。

で、その感は、彼の拘禁の全期間彼を離れ無かつたのみならず、反つて、彼の地位の苦しみが増すに随つて彼の心の裡でますます發達して行つたのであつた。

その感——即ち、何事をも直ちに爲し得る感、精神的敏速の感——が、彼が小舎へ入つてから直ぐに彼の朋輩等から非常に尊敬されたが爲めに、ピエールの心の裡で、強められたのだ。

外國語を彼が知つて居ることや、佛蘭西人から彼が尊敬を表されることや、請はれる物は何でも他人に遣る彼の人の好いことや、(彼は、俘虜の中の將校に與へられる一週三留の手當を貰つて居たのだ)、それから、壁へ釘を打ち込むので示した彼の力の強さや、朋輩に對する彼の擧作の溫和なことや、何にも爲すに、ピエールとも動かずに坐つて、考慮に沈んで居る——朋輩等には實に不可思議に見えたところの——彼の能力、總てさういふ事が、彼をば、自分等よりも莫然高い階級のなか／＼不思議な人間なのだ、兵卒等に思はせたのであつた。

彼が往時生活して居た社會では、煩悶の源では無いにしても、當惑の源であつたその性質——即ち彼の力や、人生の便利な物に對する彼の侮蔑や、彼の放心や、彼の人の好いこと——さへ、此所では、斯ういふ人間の間では、殆ど勇者のやうな主權をば、彼に與へた。ピエールは、自分がさう見られて居るが爲めに、自分にはそれに對する義務が生じたことを、感じた。

(十三)

十月六日の夜、退却する佛蘭西軍の行進が始まつた。炊事場や、假小舎が取り崩され、荷馬車に荷物が捆けられ、そして、軍隊や、輜重の列が動き始めた。

朝の七時に、軍帽を着、銃を持ち、背囊を負ひ、大きい袋を携つた行軍状態の佛蘭西兵の護送隊が、小舎の前に立つた。そして、怒號り聲の混つた熱心な佛蘭西語の談話の盛な交換が、隊列中に互つて續けられて居た。

小舎の裡では、人々は、衣服を着、帯を占め、靴を穿いて、全然支度を爲て、唯だ號令のかかるのを待つて居るばかりであつた。

顔の蒼い、瘠せた、眼の周圍に青い圈の出来て居る病兵のソコロフは、靴も穿かず、戶外衣も無しで、彼の居場所に一人で坐つて居た。顔の瘠て居るが爲めに、飛び出して居るやうに見えた彼の眼は、彼などには一向構ひ付けずに居る彼の朋輩たちをば、尋くやうに見詰めて居た。そして、規則正しい間を置いて、低い呻吟聲を出して居た。彼がさう呻いたのは、確に、病苦——彼は痲痺で惱んで居た——の爲めといふよりは寧ろ、捨て、行かれる恐怖と悲痛との爲めであつたのらしかつた。

ピエールは、上靴を穿いて居たが、それは、カラタアエフが、佛蘭西人が自分の長靴の底にして呉れると云つて、彼の所へ持つて来た茶箱の皮蓋から、ピエールの爲めに造つて呉れたのであつた。帯の代りに紐で胴を結めたといふ態で、ピエールは病兵の所へ行つた。そして、その傍に蹲んだ。

「さア、ソコロフ、衆皆去つてしまふのぢやア無いぢやア無いか。此所に病院があるんだ。吾々よりか、お前の方が、必定、宜いことになるだらうからね」と、ピエールは云つた。

「あゝあ。私はそれぢやア死んぢまふんだね。あゝあ」と、兵卒は一層高い聲で叫んだ。

「いや、今直ぐ今一度尋いてやるから」と、ピエールは云つた、そして、起つて、小舎の戸口へへ行つた。ピエールが戸口へと向つて居るうちに、前の日ピエールに烟管をさし出したその同なじ伍長が、兵卒を二人率ゐて外方から入つて来た。伍長も兵卒も、背囊を負ひ、軍帽を冠り、革紐の釦を締めて、行軍支度であつたが、それが、何時も見慣れて居る彼等の顔を異つたやうに見せた。

伍長は、自分に與へられた命令に従つて、戸を閉めやうと、戸口へ来たのであつた。俘虜等を出て去かせる前に、その數を數へる筈であつた。

「伍長、病人を何うしたら宜からうかね？」と、ピエールは、云ひ始めた。が、彼は、自分がさう云つたその刹那に、それは、彼が知つて居る伍長なのか、それとも、誰か見知らずの人なのか、何方だかと疑つた——伍長は、その刹那には、更にその人らしい所が無かつたのだ。その上に、ピエールが物を云ひ出した途端に、太鼓の音が不意に兩側でしだした。

伍長は、ピエールの言語を聞くと顔を顰めた、そして、何だか分らぬ罵り聲を出して、戸を叩き付けるやうにドンと閉めた。

今は、小舎の裡は薄暗かつた、太鼓が兩側で、急調の點呼の調子を打ち立て、病人の呻吟が消されてしまつた。

「また彼物が来た……また彼物だな……」と、ピエールは一人云つた、そして、我にもあらぬ戦慄が背部を走り降つた。

伍長の變つた顔のうちに、彼の聲の響のうちに、太鼓の人の心を刺戟する、耳を聳する音のうちに、ピエールは、人間をば、その意志に反して、同人類を殺させるやうにさせる所のその神祕な無同情の力を認めた。ピエールは、その力の効果をば、前の處刑の時に見たのであつた。

その力を恐れ、その力を避けやうと爲ることや、その力の道具となつて居る人々に向つて懇願や説得で訴へることは、全く無益なことであつた。

それをピエールは今知つた。唯だ、辛抱して待つて居るより他爲方が無いのであつた。

ピエールは、それから、病人の所へ行か無かつた。彼はその方を見返ら無かつた。彼は、黙まつて、顔を顰めて、戸口に立つて居た。

小舎の戸が開けられて、俘虜等が羊の群のやうに相互に犇と團まつて、入口で群れて居た時に、ピエールはその間を推し分けて、眞先に出て、伍長の話では、ピエールの爲めなら何様なことでも爲て呉れるといふのであつたその大尉の傍へ行つた。

大尉は、行軍支度であつた、そして、その顔からも又、ピエールが伍長の言語のうちや、太鼓の音のうちで認めたその同なじ「彼物」が覗き出して居た。

「行け、行け」と、大尉は、酷しさうに顔を顰め、そして、身邊に群れて居る俘虜等を見ながら、云つて



居た。

ビエールは、自分の骨折は無益であらうと知つて居た。が、それでも、彼は大尉の傍へ行つた。

「え、何だ？」と、將校は云つて、ビエールをばその人を認め無いかのやうに冷然としてツクツク見た。

ビエールは病氣の俘虜のことを話した。

「歩いたら宜いんだ、篋棒な奴だな」と、將校は云つた。

「行け、行け」と、彼は、ビエールを見ずに、依然云つて居た。

「いや、彼者は苦しんで居る……」と、ビエールは、云ひ始めた。

「黙まれ……」と、大尉は、意地悪るさうに、顔を擧めて、怒號つた。

「ツラム……ダ……ダ……ダ……ダム……ダム……ダム」と、太鼓が鳴つた。と、ビエールは、その不可思議な力が最早それ等の人々の心を全く占領して了まつたことを知り、そして、その上何を云つたつて最早無効だといふことを知つた。

俘虜の間の將校等は兵卒等から分けられた、そして、先頭を進むやうに命ぜられた。

將校の数は——その中にビエールをも加へて——三十人であつた。兵卒は三百人であつた。

他の小舎々々から出て来た將校等は、衆皆ビエールには見えず知らずの人々であつた。そして、彼等はビエールより豊然良い服装であつた。彼等は、異様な脚絆を穿いて居るビエールを、蔑視すやうな疑ふやうな、眼で、見て居た。

ビエールから餘り離れて居無い所を、肥つた、蒼い、短氣さうな顔容の少佐が歩いて居た。その男は、亞麻の帯布を帯にして、カザン長上衣を着て居て、朋輩の俘虜たちから誰からも尊敬されて居るらしかつた。

彼は、懐へ押し込んである烟草嚢を隻手で抑へ、今一つの手では、烟管の柄を握つて居た。この少佐は、フウ／＼喘ぎながら、誰に向つても、彼に觸りもせぬのに、彼を推したと云つて、口小言を云ひ、急ぐ必要も無いのに無闇に急ぎ、何にも驚ろく程の事も無いのに驚いて居た。

今一人の、瘡た小さい將校は、誰にも話を爲かけて、自分たちが何處へ伴れて行かれるとか、その日は何處まで行くとかいふ、推量を爲て居た。

粗毛布の長靴で、兵站部員の制服を着た一人の文官は、莫斯科の火事の結果を善く見やうと彼方此方と駆け廻つて、何ういふ所が焼けたのだといふことに就て、聲高く意見を述べ、それから見えて来るに従つて、其所が市の何處だとか彼處だとか、云つて居た。

誰で見ると波蘭生れらしい第三の將校は、兵站官と議論を爲て、莫斯科の種々な焼跡が何處だとか彼處だとかいふ兵站官の認定は間違が多いといふことを、兵站官に對して證明しやうと爲て居た。

「何故、議論するんだい？」と、少佐は腹立しさに云つた。「それが、聖ニコラだらうが、ヴラスだらうが、何方でも構はんぢや無いか。見る、何も彼も焼けて居るんだ、唯だそれだけぢやア無いか……おい、何故左様押すんだ、路は廣いぢやア無いか？」と、彼は、腹立しさに後の人に向いて云つた。が、その人は唯だ少佐の後を歩いて居たのみで、寸毫も彼を押しはし無かつたのだ。

「あ、あ、あ、あ、酷いことを爲やアがつたぢやア無いか？」と、俘虜たちが、焼けた區域を見るといふと、諸方で叫ぶ聲々が聞えた。

「ザモスクヴォリエチエー（向ふ河岸）も、ズボボヴォも、それから内廓も……」

「見る、半分も残つちやア居らん」

「おい、ザモハクヅオリエチエー全體が無くなつたと君に云つたぢやア無いか、見給へ、全くその通りだ」  
 「おい、焼けたのは分つて居るぢやア無いか、では、何故、それを議論するんだ？」と、少佐が云つた。  
 ハモオヴニキイ（莫斯科で焼け残つた僅かな地区の一つ）の寺院の傍を通つて居るうちに、俘虜の群は、不意に片側へ押し込まれた、そして、恐怖と厭惡の叫聲が聞こえた。  
 「悪黨ども。邪教徒ども。左様だ、死人だ、死人だ、左様だ……奴等は何物かで、顔を塗り汚しやがった。ピエールも又、さういふ叫聲を呼び起した物の有つた所の寺院へと近寄つた、と、彼は、寺院の地面の柵へ凭り掛つて居る何物かを漠乎と識別けた。彼よりも善く物が見えた彼の朋輩等の言語に依つて、彼は、それが、柵へ立つた姿勢で凭せかけてある、煤で顔を塗り汚した男の屍體であることを、知つたのだ。  
 「行け、やい、畜生。行け、野郎ども」……と、彼等は、護送兵等が怒號るのを聞いた、そして、佛蘭西の兵卒等は、急に腹を立て、死人を見やうとグヅついて居る俘虜等を追つ立てやうと、劔の平を用ひた。

(十四)

ハモオヴニキイの横町をば、俘虜等は、護送隊と共に進み、護送隊の兵卒等のものであつた小荷馬車や、大荷馬車の列がその後から續いた。が、彼等が食料の店々のある所へ出て來るといふと、艱然と動いて、私有的の輜重馬車と混じつて居た砲兵の長い列の真中へ何時の間にか入つて了まつて居た。  
 橋の所では、全群集が止まつて、最先頭の越して了まふのを待つた。橋からは、俘虜等は、前面及背後の輜重馬車の断れ目の無い列を見ることができた。  
 右の方、カルウガ海道がネエクウチニ園の傍を曲つて居る所では、軍隊や荷馬車の断れ目の無い列が、遠

方へと伸びて居た。それは、何の隊よりも前に出發したポオアルネエの軍團であつた。  
 後方は河岸に沿ひ、カアメンニイ橋を越えて、ネエの軍團の兵と輜重とが延びて居た。  
 俘虜等が屬して居たダヴウの兵は、クリミヤ渡頭を渡つて居て、その一部は最早カルウガ街に入つて居たが、輜重の列は非常に長くつて、ネエの兵の前衛が最早ボルシヤアヤ・オルディンカから出て居るのに、ポオアルネエの軍團の最後の荷馬車は未だ莫斯科からカルウガ街へ出て居無いらしい位であつたのだ。  
 クリミヤ渡頭を越してから、俘虜等は二三歩づゝ動いて、直ぐ止まり、やがて又前へと動いた、そして、車や人間の群集が八方でだんく甚くなつて來た。橋をカルウガ街から別つて居る二三百歩の場所を通るのに一時間の餘もかゝり、それから、ザモスクヴオリエチエーの街々がカルウガ街へ合して居る所まで行つて、俘虜等は、ギツチリ止まつて居る群集の裡へ閉ぢ込められて了まつて、十字街で數時間立たされて了まつた。  
 八方で、海の號叫のやうな、轟く車輪や、踏む軍隊や、怒と聲高い悪口の絶間の無い叫などの、止み間の無い音がして居た。ピエールは、焼け焦けた家の壁へ押し付けられて立つて、さういふ音に聞き入つて居たが、さういふ音は、彼の想像の裡では、太鼓の音へと溶け込むのであつた。  
 露西亞の將校のなかの五六人が、四方をもつと善く見やうと思つて、ピエールが立つて居る傍の焼けた家の壁へかき登つた。

「混雜だな。何といふ群集だらう」……「砲へまで物を積んでるぞ。見ろ、大數な毛皮ぢやア無いか……」  
 と、彼等は、云つて居た。「やア、毒蟲奴等、奴等は掠奪をやつて居たんだぜ」……「彼奴が後の、荷馬車の上に載せてる物を見ろよ」……「やア、彼等やア聖像だぜ、實に何うも」……  
 「彼奴等は獨逸人に違ひ無いぜ」……「や、露西亞の農夫だ、實に何うも」……

「あゝ、悪黨奴等」……「見ろ、彼の背負込んで居ることつたら、艱然動いて居るんだせ。あ、おい、小馬車だ、彼様な物まで奪りやアがつたんだぜ」……

「見ろ、彼女は箱の上に乗つて居る。何うも實に」……「や、喧嘩を始めた」……

「左様だ、左様だ、顔を殴ぐれ」……

「此様な風ぢやア夕方なら無ければ此所を出られはし無からうぜ」……

「見ろ、見ろ……や、彼りやア確にナポレオンに違ひ無いぜ。何うだ彼の馬どもは、組合文字と王冠が附いてるぜ」……

「彼物は携帯自由な家と云つて宜い位だね」……「あ、見ろ、彼奴は囊を落として、氣が付かずに居るぜ」……

「再、喧嘩だ」……「幼児を抱いた女だ、なか／＼別嬪だぜ」……

「左様だ、何うも、お前たちを通さ無いのは此様なことの爲めなんだ」……

「見ろ、おい、間斷無しだぜ、露西亞の賣女ども奴、確に左様なんだ」……

「見ろ、奴等の馬車の裡に樂々として居やがることつたら」……

再、一般の好奇心の波が、ハモオヴニキイの寺院の傍でのやうに、路の方へ俘虜等全體を前方へと運去つた、で、ピエールは自分の背の高いお蔭で、他の人々の頭を越えて、俘虜等の好奇心を引付けた物を見た。

馬車が三輛彈藥車の間に挟まつて止まつて居た、そして、その裡に、燃え立つやうな色の服装で飾られた、顔を赤く化粧した女が幾人か、一緒に推し詰められて坐つて居て、金切り聲で何か叫んで居た。

ピエールが彼の不可思議な力の表現を認めた刹那から、何様な物も、彼には、異様にも、恐しくも、見え

無くなつたのだ、冗談に顔を煤で塗られて居た屍骸も、急いで行くさういふ女等も、莫斯科の焼け跡も、彼に取つては、最早何でも無かつたのだ。ピエールが見たさういふ總ての物は、今は、最早彼の心には何の印象も與へ無かつた——それは、宛然、彼の心が、烈しい奮闘に對して用意されて居るが爲めに、それを弱めるやうな印象は何ういふものでも受け取るのを拒むのであるかのやうであつた。

女どもの馬車は、傍を通り過ぎて了まつた。その後には、小荷馬車、兵卒、大荷馬車、兵卒、乗用馬車、彈藥車、それから又、兵卒、そして、時たまに女ども、といふ風に續いて來た。

ピエールは、人々を別々に見はし無かつた、彼は、唯だ全體の動きを見たのみであつた。

總てさういふ人間や馬どもは、云はゞ、或る見え無い力の爲めに追ひ立てられて居るやうであつた。ピエールが彼等を見守つて居る時の間、彼等は悉皆能きるだけ速く先方へ行かうといふ誰も彼も同なじの唯だそれだけの希欲で以つて、諸方の街から拂ひ去られて居た。彼等は悉皆、誰も同なじに、他の者の爲めに止められたので、怒つて、喧嘩を爲したのだ。同なじ罵言が何處でも彼處でも交換され、白い歯が燦めき、それから、睨み付ける何の顔も、その朝、太鼓が鳴つて居る間に、伍長の顔の裡でピエールを驚かした向ふ見すの決心と冷い残酷との同なじ様子を、帯びて居た。

護送隊の司令の將校が部下の兵を集めて、叫聲や、怒號聲で、輜重車の列の裡を無理やりに推し分けて出たのは、最早殆ど晩方になつてからであつた、で、俘虜たちは、八方を圍まれてカルウガ海道へ出て來た。

彼等は、止まらずに、非常に速く行進して、日が落ち出してから、始めて止まつた。輜重馬車は、相互に近接き合つて動いた、で、人々は夜に對する支度を爲た。誰も彼も不機嫌で不満足らしかつた。罵り聲や、怒號聲や、喧嘩が、深更まで、聞こえて居た。護送隊の後から隨いて來た一個の乗用馬車は、荷馬車の一個

へ乗り掛けて、それへ車轅を突き込んで了まつた。五六人の兵卒が八方から荷馬車へと駆け付けた、或る者は、乗用馬車の馬を傍へ引き向けたが、その頭を撃ち、他の者は相互に殴り合つた。そして、ピエールは、劔の平打を受けて頭に甚い傷を負つた一人の獨逸人を見た。

秋の夕方の寒い黄昏の裡で、廣々とした田舎の真中で、止まつた今、總てさういふ人々は、出發の時に彼等總てを運び去つた只管前方へ行かうといふ急ぎと熱心な衝動とから覺醒する不愉快な同様な感情を経験しつつあるかのやうであつた。今、止まつて了まふといふと、誰も彼も、自分等が何處へ行きつゝあるのか知ら無いといふこと、及び、その行旅には自分等に取りつて、その先非常な骨折と困苦があるといふことを、覺つたやうであつた。

この駐止所で、俘虜等は、護送隊から、出發の時よりも尙一層手荒く取り扱はれた、彼等は、その時始めて馬肉を與へられた。

將校から最下級の兵卒に至るまで、護送隊の誰ものうちに、俘虜のうちの誰にも對して個人的憎惡を持つて居る様子が表はれて居た。そして、その様子は、前に雙方の間に存在して居た親密な關係に對しては、著しい對照を爲して居た。

この憎惡は、俘虜の數を勘定すると、莫斯科から出る混雜の裡で、一人の露西亞兵が、疝痛に罹つたと云ひ立て、巧く逃げ逃せて了まつたことが、發見されるといふと、一層烈しくなつた。

ピエールは、路を餘り遠く離れたが爲めに一人の露西亞の兵卒を無慘に殴つて居る佛蘭西人を見た。それから、自分の朋友であつた大尉が、俘虜が逃たことに對して下士を譴責して、軍法會議へ廻すと嚇して居るのを聞いた。

その俘虜は病氣で、歩け無かつたのだと、下士が辯明するといふと、將校は、自分等に下された命令は、ぐづ付いて後れる者どもは銃殺しろといふのだ、と云つた。

ピエールは、處刑の時に自分を押し潰し、それから、自分の拘禁の間は殆ど見え無くなつて居た彼の人の生命を支配する力が、今は再自分の存在を支配しだしたことを感じた。

彼は恐れた、が、彼は、それと同時に、その定業的な力が自分を押し潰さうと骨折るに従つて、自分の心の裡には、その力から獨立した生の力が、だん／＼生長して、力を加へて來つゝあるのを感じた。

ピエールは、ライ麥の粉と馬肉との肉汁で晩食を終つた、そして、自分の朋輩等と少許談話を爲した。

ピエールも、朋輩のうちの誰でも、自分等が莫斯科で見た事柄や、佛蘭西人から受けた手荒い取り扱ひのことや、自分等に向つて公言された自分等を銃殺するといふ命令のことなどは一切話さ無かつた。自分等の一層銷沈した状態に反動して居るかのやうに、誰も彼も、悉皆、勢ひ好く、快活であつた。彼等は、各自の一己の追憶や、行進中に自分等が見た可笑しい事件などの話を爲て、自分等の現在の状態に言ひ及ぶことを避けて居た。

日は最早餘程前に入つて居た、星が、空の彼方此方で燦めいて居た、満月が登らうとして居た所には、地平線の上の大火のそのやうな、赤い明るみがあつた。そして、大きい赤い球が、灰色の闇の裡で異様に震へて居るやうに見えた。最早全く明るかつた。夕方は過ぎて居た、が、夜は未だ始まつて居無かつたのだ。

ピエールは新たに朋輩等の傍を離れて、燎火の間を、普通の俘虜等が居ると聞いた道路の彼方側へと、歩いて行つた。彼は、その俘虜等と談話を爲やうと思つたのだ。道路で、佛蘭西の哨兵が、ピエールを止めて彼を後方へ歸らせた。

ピエールは、後方へは歸ら無かつた。彼の朋輩等が居た燎火の所へは歸らずに、誰も居無かつた馬の附いて居無い荷馬車へと行つた。足を身體の下へ折り込み、頭を下けて、彼は、荷馬車の輪に凭りかゝつて、冷たい地面に坐つた、そして、長い間、靜然として、考へながら、居た。

一時間餘過ぎた。誰もピエールの邪魔を爲無かつた。不意に、彼は、肥つた、機嫌の好い、哄笑の高い聲で噴飯だした。その聲が餘り高つたので、人々が、諸方から、その不思議な、確に一人らしい哄笑聲の方を、驚いて見返つた位であつた。

「は、は、は」と、ピエールは笑つた。彼は、大きい聲で獨語を云つた。「彼の兵卒が俺を通さ無かつた。奴等が俺を捉まへて——俺を拘禁した。奴等は俺を俘虜にして置くんぞ。」俺とは何んだらう？。俺？。俺——俺の不朽の靈魂だ。は、は、は……は、は、……は、は、……」と、彼は、涙が眼に出るまで、笑つた。

一人の男が、起ち上つて、一體何を、この奇異な大きい男が一人で笑つて居るのかと、やつて來た。ピエールは、笑ふのを止めた、起ち上つて、そして、穿鑿したがる闖入者から歩き去つて、四邊を見廻した。パチ／＼いふ火や、人々の話す音に満ちて居たその大きい、極限の無い野營は、安眠に入つて居た。赤い燎火が低く朦朧と燃えて居た。頭上高く、澄み渡つた空には、満月が懸つて居た。それまでは野營の彼方には見られ無かつた幾つもの森や野が、今は、遠方で見えだした。そして、さういふ野や森の彼方に、キラキラした、形の變はる、人の眼を迷すやうな、際涯の無い、遠方が見えて居た。

ピエールは、空を仰ぎ、極く遠方で燦めいて居る幾個もの星を見た。「で、俺の物である總ての物、俺のうちにある總ての物、それから、俺である所の總ての物」と、ピエールは思つた。「で、斯ういふ總ての物を奴等は捉まへて、板で圍つた小舎の裡へ閉ぢ込めたんだ」

彼は、微笑んだ、そして、朋輩等の側で眠やうと、横になつた。

(十五)

十月の初時分に、又一人の使節が、平和に對する提言と、手紙を以つて、ナポレオンの許から、クツウゾフの所へよこされた。その使節は、莫斯科から來たと云つて居たが、それは、僞言で、實際は、ナポレオンは、舊カルウガ海道でクツウゾフよりも前方に居たのであつた。

クツウゾフは、この手紙に對しても、ロオリストンが持つて來た最初の手紙に對したと同様の返答を爲た、彼は、平和などは思ひも寄らぬことなのだ、云つたのであつた。

その直ぐ後で、タルティノオの左方を動いて居たドロオホフの不正規兵が、佛蘭西の軍隊がフォミンスコエに現はれたが、その隊はブルウシエーの分團であつて、それは、軍の他の部分からは離れて居るのだから、容易に全滅させ得るのだ、といふ報告をよこした。

兵卒等も、將校等も、是非戰鬪を開き度いと騒ぎ立てた。タルティノオの容易な勝利で勢ひ付いて居た總司令部の將官等は、ドロオホフの意見を採用するやうにと、クツウゾフに切りに勧めた。

クツウゾフは、何様な戰鬪をも必要だと認め無かつた。が、何うしても避け得られ無かつた中間の方針を執つた。小さい枝隊がブルウシエーを攻撃する爲めに、フォミンスコエへ送られたのだ。不思議な偶然の機會で、後になつて最も困難な、最も重要なものになつたこの任務が、その最も眼に立た無い小さい將軍のドフツウロフに命ぜられた。ドフツウロフのことは、これまで、戰役の方略を立て、居たとか、諸聯隊の先頭に立つて突進して居たとか、砲壘の周圍へ勳章を撒いたとか、先さう云つたやうなこと

を爲して居たとは、誰も云は無かつた。彼は、人々からは、決断も洞察力も無い者のやうに云はれて居たのだ。が、實際は、アウステルリッツから、千八百十三年に至るまでの、佛蘭西人との露西亞人の諸戦に於て、吾々は、地位が最も困難であつた場所には、必らず何時でも彼が司令の地位に在るのを見るのだ。アウステルリッツでは、總てが敗走で、破滅であつて、後衛には一人も將官で残つて居る者が無かつたのに、彼一人アウゲストの渡頭に止まつて、諸聯隊を糾合して、能き限りのものを助けたのであつた。熱病に罹かつて居ながら、彼は、ナポレオンの全軍に對して、スモレエンスクを守る爲めに、僅に二萬の兵を率ゐて、その市へと進んだ。スモレエンスクでは、熱病が非常に烈くなつて、マラフォーフスキイ門で、眠たばかりの所で、スモレエンスクの砲撃で眼を覺まされ、そして、スモレエンスクは全一日守り遂げられた。

ボロディノオでは、バグラチオンが殺され、我左翼の兵の十分の九が殺され、佛蘭西の全砲兵の砲火がその上へ向けられた時に、クツウゾフは、間違つて差遣した將官を急いで喚び返し、その代りに、人々からは、決断も洞察力も無いやうに云はれて居たドフツウロフその人を遣つたのだ。で、少しも誇ら無い小さいドフツウロフは其所へ行つた。すると、ボロディノオが、露西亞の軍隊の最も大なる光榮となつたのだ。で、その戦の多くの勇士は、歌や文で名高くされたのだが、ドフツウロフに就ては一言も云はれ無い。

再、ドフツウロフは、フォミンスコエへ遣られ、其所からは再、マレエ・ヤロスラアヴェツツへと遣られた。其所は、佛蘭西人との最後の戦が戦れ、そして、佛蘭西軍の最後の滅亡が實際に始まりだしたことの明瞭な場所であつたのだ。で、再、多くの勇士等や、天才の人々のことが、戦役のその時期の物語の中で話されるのだが、ドフツウロフのことは、何とも云はれ無いか、で無くも、疑はしい賛辭が唯二三言云はれるのみ

なのだ。ドフツウロフに就てのこの沈黙は、ドフツウロフの功績に對する最も明白な證據なのだ。機械の働きの解ら無い人が、その機械の働いて居るのを見るといふと、偶然にそれから落ち、或は、その中でピラ／＼廻りながら、機械の働きの邪魔するところの、削屑が、機械の最も重要な部分だと思ふのが、自然である。誰でも、機械の構造を解さ無い人には、その削屑は、機械の運轉を妨げるばかりのものであつて、音も無く廻つて居る小さい齒車の方が、その機械の一番大切な部分の一であるといふことは、覺り得られ無いのだ。

十月の十日に、ドフツウロフは、フォミンスコエへの半路程の所まで進んで、アリストヴオの村で止まつて、自分に與へられた命令をば、キッチリその通りに實行する爲めの有らゆる準備を爲しつゝあつたのだ。その同なじ日に、佛蘭西の全軍は、戦を開く積りらしい風で、ミユアラの陣地の所まで、痙攣的な突進で達してから、不意に、別に何の原因も無いらしいのに、左方へ、新カルウガ海道へと轉じた、そして、それまでは、ブルウシエーばかり居たフォミンスコエへと行進し始めた。

ドフツウロフが、その時率ゐて居たのは、ドロオホフの隊と、それから、フィグネルとセスラアヴィンの小さい二枝隊ばかりであつた。

十月の十一日に、セスラアヴィンは、佛蘭西の親兵で捕虜になつた一人の兵を伴つて、アリストヴオに居る將官の所へ来た。その捕虜は、その日フォミンスコエに達した軍隊は、全軍の前衛なのであつて、ナポレオンが居るのだが、全軍は五日前に莫斯科を出たのだ、と云つた。

その同なじ晩方に、ボロオフスクから来た家内の隸僕は、自分が、非常に大きい軍がその市へ入つて居るのを見たといふ言辭を齎した。

ドロオホフの哥薩克兵等は、佛蘭西の親兵等が、ボロオフスクへの海道を行進して居るのを見た、報告した。

總てさういふ情報で見るといふと、今までは唯だ一分團だけだと思つて居た所に、今は、莫斯科から、意外な方向——舊カルウガ海道——に依つて行進して居る佛蘭西の全軍が居るのだといふことが、明瞭であつた。

ドフツウロフは、今自分の任務は何ういふのであるのか明白で無かつたので、何等の行動をも執ることを欲し無かつた。彼は、フォミンスコエを攻撃しろといふ命令を受けて居たのだ。

が、その時は、フォミンスコエにはブルウシエーばかりであつたのだが、今、其所には、佛蘭西の全軍が居るのだ。

エルモオロフは自分だけの判断で行動しやうと思つた、が、ドフツウロフは、總司令官殿下からの命令を仰が無ければなら無いと言ひ張つた。で、總司令部へ報告を出すことに決した。

この目的に向つて、有爲な將校ボルホヴィイノフが選み出された、彼は、文書になつた報告を携つて行く上に、尙口頭で一切の事を説明することになつて居た。眞夜半に、ボルホヴィイノフは、急書と口頭の命令を受けて、代へ馬を引いた一人の哥薩克兵を従へて、總司令部へと駆け去つた。

〔十六〕

それは、暗の、暖な、秋の夜であつた。雨が、その四日以来降つて居た。馬を二度代へて、ボルホヴィイノフは、一時間半で、泥濘つた、滑る道路をば三十露里駈けた。彼は、夜一時にレタアシエーフカの村に

達した。網代垣の上に、「總司令部」と書き出してある小舎の所で馬を下り、そして、馬を放して、暗い入口へと歩み込んだ。

「當番の將官へ、直ぐに。非常な重大事件だ」と、彼は跳び起きて暗闇で喘いで居る誰かに、叫んだ。

「副官殿は、夕方から、甚く病氣なんだ、この三晩といふもののお眠みなさら無いんだから」と、口を挟まれた従卒の聲が囁いた。「先へ大尉を起さ無きやア不可ないんです」

「將軍ドフツウロフからの重大な報告なんだ」と、ボルホヴィイノフは云つて、開いて居る戸を手探つて、内へ入つた。

従卒は、先きに立つて、入つて行つて、誰かを起し始めた。「貴下、貴下、急使です」

「何だ？。何だ？。誰からだ？」と、眠むさうな聲が云つた。

「ドフツウロフと、アレクセエ・ペエツロヴィイチとからです。ナポレオンがフォミンスコエに居るんです」と、ボルホヴィイノフは、眞闇なので先の人を見ることが能きずに、その聲だけで、それがコノヴニイツインであらうと思つて、云つた。

起された男は、欠伸をして、身體を伸した。「將軍を起すのは、不可な」と、彼は云つて、何か手探つた。「病氣なんだから、風説だけでも知れ無いぢやア無いか」

「報告は此です」と、ボルホヴィイノフが云つた。「私は、當番の將官に直ぐ渡せといふ命令を受けて來たんです」

「寸時待つてください、火を打つから。物を何う爲たんだ、痴漢奴」と、眠むさうな聲が、従卒に向つて云つた。さう云つた男は、コノヴニイツインの副官のシチエルビニンであつた。「あ、在つた在つた」と、彼

は云ひ足した。

従卒は火を打つた、シチエルヴィイニンは蠟燭立をと手探つた。

「あゝ、厭な獣類ども」と、彼は、さも厭さうに、云つた。

火絨箱の火花の光で、ボルホヴィテイノフは、シチエルヴィイニンの若い顔をチラリと見ることができた。と、隅に今一人眠て居る者があつた。これがコノヴニイツインであつた。

火絨は、最初は、蒼い、次には、赤い焔に燃えだした、シチエルヴィイニンは牛脂蠟燭を点火した——それを嚙つて居た油蟲は八方へ逃げ散つた——そして、彼は使者を見た。

ボルホヴィテイノフは、泥だらけになつて居た、そして、袖で顔を拭いたので、顔までも泥だらけにしてしまつて居た。

「だが、誰がさういふ情報を持つて来たんですか？」と、シチエルヴィイニンは、云つて、封状を取つた。

「情報は確です」と、ボルホヴィテイノフは云つた。「捕虜ども、哥薩克兵等も、間諜ども、悉皆同なじ事を云ふんです」

「うん、では、爲方が無い、起さ無きやア」と、シチエルヴィイニンは、云つて、起つて、夜帽を冠つて、軍用外套に纏まつて眠て居る人の傍へ行つた。

「ビョートル・ペエツロヴィイチ」と、彼は云つた。

コノヴニイツインは、身動きも爲無かつた。

「總司令部からの喚び出しです」と、シチエルヴィイニンは、さう云へば、必定起きるのだと知つて居たので、微笑みながら、云つた。と、成る程、夜帽を冠つて居る頭が、直ぐ舉げられた。コノヴニイツインの、熱病で

頬部の膨れた、強い、奇麗な顔は、未だ寸時は、遠方を見て居るやうな、夢みて居る顔容を帯びて居たが、彼は、不意にハツと氣が付いた、そして、顔が、沈着と力との平常の表情に戻つた。

「うん、何だね？。誰からだ？」と、彼は、直ぐに尋いた、が、未だ、急ぎは爲すに、燈光に向いて、眩しさに瞬して居た。

將校が話すべき事を云ふのを聞いて、コノヴニイツインは、封状を開けて、それを讀んだ。彼は、それを讀んで了まふか、了まは無いうちに、手編みの毛糸の靴足袋を穿いて居た兩足を地の床へ下した、そして、長靴を穿きだした。それから、彼は、夜帽を脱つて、髪を梳いて、略帽を冠つた。

「君は急いで此所へ来たのかね？。殿下の所へ行かう」  
コノヴニイツインは、その報告に極く重大なものであつて、少しも猶豫して居られ無いことを、直ぐ理解した。それが、好い報告であつたのか、悪いものであつたのか、といふやうなことに就いては、彼は、何等の意見も無かつたし、又、自分に向つて、さういふ事を尋きさへも爲無かつた。さういふ問題は彼の關する所では無かつた。彼は、戦争といふ全問題をば、自分の智力を以つてでは無く、自分の理性を以つてでは無く、それとは全く異つた何物かで、見て居たのだ、彼は、自分の心の裡で、總てが結局は大丈夫であるのだが、さう信じてはいけず、又さう、云つては尙いけずして、自分は唯だ自分の任務を盡くして居無ければなら無いのだ、といふ動か無い確信を持つて居た。で、彼は、全力を注いで、自分の任務を盡くして居たのだ。

ビョートル・ペエツロヴィイチ・コノヴニイツインは、ドフツウロフと同なじやうに、唯だ形式的に、バルクレエーとか、ラエーフスキイとか、エルモオロフとか、ミロラアドヴィイチとか、いふやうな連中と一緒に所謂千八百十二年の勇士等の間へ加へられて居るのだ。ドフツウロフと同なじに、彼も、又、極く能の少くな



い、學識の乏しい人間だといふ評判であつた。そして、ドフツウロフと同名に、彼も決して、戦役の方略を建言し無かつたが、尙且、それでも、一番難かしい地位には何時でも居るのであつた。總司令官附の將官に任命されてからは、ズツと何時でも、戸を開けたまゝで、眠て、何様な使者が來ても起せといふ命令を出した。戦では、彼は、何時でも敵火の下に居た、で、クツウゾフが、彼のさう爲るのを叱つて、戦線へ彼を遣り度から無かつたのだ。ドフツウロフと同名に、彼も、又、キイとも云はず、ガラとも音を立てずに、動いて居ながら、機械の一番大切な部分を成して居るさういふ眼立たない齒車の一つであつたのだ。小舎から、濕つた、暗夜の裡へ出るといふと、コノヰニツインは顔を擧めた。それは、一つは、頭痛が烈く爲つた爲めでもあつたのだが、又一つには、この報告が、總司令部の有力者等の巢ぢうに騒ぎを起させるだらうといふ事や、特にこの報告が、タルティノオの戦以來クツウゾフとは敵同士のやうになつて居たベニグセンに及ぼす影響や、それから、この報告の爲めに、種々な想像、議論、命令、反對の命令が、出るだらうといふ事などに、思ひ至ると、非常に厭な氣持が爲て來たからであつたのだ。で、總てさういふ事の豫覺が、彼はさういふ事は何うしても避け得られ無きことだと知つて居たに拘らず、彼には氣持が悪かつたのだ。彼が報告を傳へに行つたトオルは、果して、自分と同居して居た將官に向つて、直ぐその事態に對する自分の意見を説き出し始めた。で、コノヰニツインは、退屈さうに黙まつて、それを聞いて居てから、殿下の所へ行か無ければなるまいと、トオルに注意した。

(十七)

總ての老人のやうに、クツウゾフは、夜は少許しきや眠無かつた。彼は、晝間、不意に一吋一寸眠むつて了まふのであつて、夜は、衣服を脱すに、寢臺の上に横になつて、大抵は、眠すに、何か考へて居るのであつた。

彼は、その時も、さういふ風で、彼の寢床の上で、大きい、重い、傷痕だらけの頭を、肥つた手に凭せて、臥て居た。彼は、隻眼を廣く見張つて、暗闇を見詰めながら、考へ込んで居た。

皇帝と直接に交渉して居て、總司令部の誰よりも勢力のあつたベニグセンが、クツウゾフを避けるやうになつてからといふものは、クツウゾフは無理やりに無益な攻撃的行動に兵を率ゐて行か無ければならぬやうにされることの無くなつたといふ點だけでは、大きに樂に爲つて居た。クツウゾフは、彼の心に苦痛を與へる記憶であつたところの、タルティノオの戦及びその戦の翌日の教訓が、兵等にも又その効果を持つたに違ひ無いと、思つて居たのだ。

「攻勢を執れば唯だ損をするばかりだといふことを、奴等は承認して居無ければ不可。時と忍耐、この二つが俺の爲めの勇士なのだ」と、クツウゾフは思つた。

彼は、林檎は青いうちにちぎつては不可ぬといふことを知つて居た。熟しさへすれば、それは自然に落ちるのだが、若し、それを青いうちにちぎれば、實も駄目になれば、樹も駄目になつて、慄へあがる程酸ばい目に逢ふものなのだ。

功を経た獵人のやうに、彼は、獸が傷を負つて居た、即ち、露西亞の全力を以てしたのみ傷を負はし得るのであつたやうに傷を負はされて居たことを、知つて居た。が、致命傷であつたか、否は、未だ決し無い問題であつた。

今は、ロオリストンやベルテミイをよこしたことから、不正規兵が齎した報告やらで、クツウゾフは、そ

の負傷が致命のものであることは、殆ど確實だと思つたのだ。けども、もつと證據が欲しかった、彼は待たざるを得無かつた。

「奴等は、駆け出して行つて、敵に何れ程傷を負はせ得たのか見度がつて居るのだ。まア今少し待つて居れ直きに分るから。何時も、機動とか、攻撃とかいふことばかり云つて居る」と、彼は思つた。「一體何の爲めなのか？。自分等が拔群な功を立て得るやうな機會ばかり規つて居るのだ。戦が面白半分でもやれることでありでもするかのやうに。奴等は、自分等が何れだけ善く殿り合ひが能きか他人に見せ度くて堪まら無い小兒等のやうなもので、道理の通つたことは、何も云ひ得無いのだ。けれども、其様なことは、今の場合何うでも宜いことなのだ。随分巧妙な種々な方略を奴等は建言するものだなア、奴等は僅に二つ三つの偶發事項を考へ付くといふと（クツウゾフは、彼得堡から來る一般方略のことを憶ひ起したのだ）奴等は最早それで有らゆる偶發事項が残らず考へ付けたのだと思ふのだ。けれども、偶發事項などいふものに限りがあつて堪まるものか」

ボロディノオで敵に與へた負傷は致命のものであつたか、何うだらうかといふ問題は、未解決のまゝで、全一月といふもの、クツウゾフの頭上に懸つて居た。一方では、佛蘭西軍が莫斯科を占領して了まつた。けれども、他方では、クツウゾフは、自分が、總ての露西亞人と一緒に全力を擧げて敵に蒙むらせた恐るべき打撃が、致命のものであつたに違ひ無いといふことを、有らゆる疑念を超えて、彼の全人格に於て、感じたのだ。

が、何れにしても、證據が必要であつた、で、彼は、一月の間それを待つて居た、が、時が経ち行くまゝに彼はだん／＼じれ出した。

幾晩もの寝られ無い夜ちう、寢床に横になつて居ながら、彼は、若い將官等の爲たと同なじ事、即ち、彼が非難して居たその同なじ事を、爲たのであつた。彼は、若い時代の人々と全く同なじに、有らゆる有り得べき偶發事項を想像したのだが、然し、若い人々と違つて居たことには、彼の方は、さういふ想像を基礎としては何等の結論をも爲無かつたし、又、さういふ偶發事項をば、二つ三つ限りのものとしては見ずに、數千あるものとして見たのであつた。

彼が考へれば考へる程、さういふ偶發事項はますます／＼多くなるのであつた。彼は、ナポレオンの軍の全體としてやる場合及びその一部分がやる場合の、有ゆる行動を、想像して見た、即ち、ナポレオンが、彼得堡へ向ふだらうかとか、クツウゾフ自身の方へ向つて來るだらうかとか、クツウゾフ自身の軍を包圍して了まふだらうとか（それがクツウゾフには一番可怖かつたのだ）いふやうなことを、想像し、それから又、ナポレオンがクツウゾフ自身の武器でクツウゾフに向つて戦ふことになる、即ち、ナポレオンが莫斯科に止まつて居て、クツウゾフが其所へ進撃するのを待つて居ることになりはしまいかといふことも、想像したのであつた。

クツウゾフは、ナポレオンの軍がメデイン及びユウノフへ逆進するかも知れぬとさへ想像したのでだ。が、彼が豫想することが能き無かつたのは、實際起つた事柄——ナポレオンの軍が、莫斯科から出た最初十一日間の、狂亂的な烈しい驚走——であつた。さういふ驚走は、クツウゾフがそれ迄は未だ考へることさへ敢てし得無かつた事柄、即ち、佛蘭西軍の全くの全滅といふことをば、有り得ることゝ爲たのであつた。ブルウシエーの分團に就てのドロオホフの報告や、不正規兵等が持つて來たナポレオン軍の困苦に關する情報や、莫斯科を出やうと支度中だといふ風説など、總てさういふものが、悉く、佛蘭西軍が、負けて、

今逃走しやうと爲て居るのだといふ想像を確實にしたのであつた。が、總てそれは、唯だ想像に過ぎ無かつた。で、それは、若い人々に取つては、重みのあることのやうに、思はれたのだが、クツウゾフに取つては、決してさうでは無かつた。

六十年の経験で、彼は、風説といふものに何れだけの重みの置き得べきものかといふことを知つて居た。彼は、又、人は何物もさうあり度いと思ふ時には、そのさうあるのだといふことに爲るやうに、總ての證據をば、都合の宜い方へ振り向けて了まふやうに直ぐ爲るものだといふことを、知つて居た。それから又、彼は、さういふ場合には、人は、反對の意義を持つて居る總ての物をば、一向心に留めずに、通り過ぎさせて了まひ勝なものであるといふことをも知つて居た。

で、クツウゾフは、この想像が的中することを欲すれば欲するほど、ますます自分が、それが的中して居ると信ずることを、自ら許さ無かつたのだ。この問題が、彼の精神上の全精力を吸収した。それ以外の事は、悉皆残らず、彼に取つては、人生の日常事の唯の常例的遂行に過ぎ無かつたのだ。即ち、幕僚の將官たちとの談話や、彼がタルティノオから出したマダム・スタエルへの手紙や、彼の佛蘭西の小説や、賞の分配や、彼得堡との交通などが、さういふ日常事の常例的執行及び遵守であつた。

が、唯彼一人のみが先見して居た佛蘭西軍の覆滅といふことが、彼の心の底からの唯一の願望であつた。十月十一日の夜、彼は、頭を手に凭たせて、横になつて、その事を考へて居たのだ。

次の間に人の氣配が爲た、そして、トオル、コノヴィニツイン、及びボルホヴィティノフの足音が、クツウゾフに聞こえた。

「やア、誰だ？。お入り、お入り。何事が有つたかね？」と、總司令官は三人に聲を掛けた。従僕が蠟燭

に火を點けて居るうちに、トオルは、情報の要項を話した。

「誰がその情報を持つて来たかね？」と、クツウゾフは、尋いたが、蠟燭が點けられた時には、その顔の動か無い嚴格さが、トオルに強い印象を與へた。

「それには、少しも疑がありません、殿下」

「その男を呼べ、その男を此所へ呼べ」

クツウゾフは、一脚を寢臺の外へ出し、彼の重い肥つた身體を、下へ曲けた今一つの脚の上へ凭せて、坐つて居た。彼は、使者の顔の裡で、自分が知り度いと思つて居た事柄を讀まうと思ふかのやうに、使者の顔を十分に熱く見やうと、彼の見える方の眼を見張つた。

「話して呉れ、話して呉れ、君」と、彼は、低い、年取つた聲で、ボルホヴィティノフに云つて、彼の胸の所で開いて来た襯衣の襟元をかき合した。「此所へ來なさい、もつとすつと此方へおいで。君が持つて來た情報は何ういふのかね？。え？。ナポレオンが莫斯科から出たのかね？。それは眞實の話かね？。え？？」

ボルホヴィティノフは、自分が命ぜられて居た使の趣を詳しく繰り返して始めた。

「早く云つて呉れ、急げ、私を苦しめる勿一と、クツウゾフは、ボルホヴィティノフを遮ぎつた。

はうと爲だした、が、クツウゾフは、彼を止めた。クツウゾフは、何か云はうと爲た、が、不意に、彼の顔が、動きだし、變められた。トオルに向けて手を振つて、彼は、彼方へ、聖畫で黒く見えて居る小舎の隅へと、振り向いた。

「主よ、造物主よ。貴方は、吾々の祈禱をお聴きくださいました……」と、彼は、震へる聲で云つて、指

を組み合せて、「露西亞は救はれました。貴方に感謝いたしまする、おゝ、主よ」  
で、彼はハラ／＼と涙を滾した。

(十八)

その時からして、戦役の終局に至るまで、クツウゾフの總ての活動が、權威の行使を以てするのは勿論、  
なだめることや、懇請で以て、露西亞軍をして、死に行く敵に對して無益な攻撃、機動、及び小衝突などを  
爲せ無いやうに爲ることばかりに限られたのであつた。

ドフツウロフは、マレエ・ヤロスラアヴツツへと行進した、が、クツウゾフは、本軍を以て、ぐづ／＼し  
て居た、そして、カルウガを開け渡す命令を出した。即ち、その市の彼方への退却がクツウゾフには一番至  
當だと思はれたのだ。

何處でも、クツウゾフは退却した、が、敵は、クツウゾフが退却するのを待たずに、反對の方向へ飛ぶや  
うに逃げて行くのであつた。

ナポレオンの歴史家等は、タルティノオや、マレエ・ヤロスラアヴツツでの彼の巧妙な軍の操縦を、吾々に  
語り、そして、若しナポレオンが、南方の富裕な土地へ入り得たのであつたら、何う爲つたらうといふこと  
を論じて居る。

が、ナポレオンが若しさういふ南方の諸縣に進まうと思つたのなら、ナポレオンがさうするのに何の障  
も無かつた(露西亞軍はその路を全く開けて居たのだから)といふ事實は云はぬこととして、歴史家等は、  
ナポレオンの軍は、それ自身の裡に、破滅の避け難き萌芽を、その時には、持つて居たのだから、何様なこ

とを爲ても助かりやうの無かつたことを忘れて居るのだ。

莫斯科で、饒多な糧食を見出しながら、それを貯へて置くことが能き無いで、それを脚下に蹂躪つてしま  
つたやうな軍、それから又、スモレンスクに入つた時に、糧食を貯へて置き得ずに、それを無暗に掠奪し  
て了まつたやうな軍、何うしてさういふやうな軍が、住民が莫斯科と同名露西亞人であり、火事も、火を  
放つた物を同なじやうに焼き得る場所であるところのカルウガへ入つて、それ自身を助け得られるものか。

ナポレオンの軍は、何様なことでも、それ自身を恢復させることは能き無かつたのだ。ポロディノの戦  
及び莫斯科の掠奪以後、それは、それ自身の裡に、云はゞ、溶潰の化學的諸要素を持つて居たのだ。

嘗ては軍を成して居た人々が、自分等の將帥たちと一緒に、何處へ行きつゝあるとも知らずに、唯だ只管  
に逃げて行つた。上はナポレオンよりして、下は一兵卒に至るまで、誰も彼も、唯だ一つの願望で心を満た  
されて居た。即ち、彼等は皆、誰もが臆氣には覺つて居たその望の絶えた地位から能きだけ早く、自分が、  
避れて了まはうと希つて居たのだ。

マレエ・ヤロスラアヴツツでの會議で、佛蘭西の將軍たちが、熟考して居るやうな態を装つて、その後何  
うすべきかに就て、種々な意見を出して居た時に、率直な軍人ムウトンが、能きだけ速く退くより外に爲  
やうは無いついふ意見を出すと、いふと、それが、その時誰でもが腹の裡では思つて居た事柄なので、それで、  
誰もその口が噤ませられて了まつた。そして、誰も、ナポレオンでさへ、誰も認めて居たその眞理に反對し  
ては何にも云ひ得無かつた。

が、誰もが、自分等が去ら無ければなら無いとは、知つて居ながらも、避け無ければならぬといふことを  
承認するのは、未だ其所に恥辱の感情が残つて居た。で、その愧恥に打ち勝つには、外形上の激動が、何か